

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(38)

竜郷—新奄美空港線の改良工事
に伴う埋蔵文化財報告書

ケ ジ I ・ III 遺 跡

1986年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が、県道龍郷―新奄美空港線の改良工事に先立って、昭和60年度に実施したケジⅠ・Ⅲ遺跡の発掘調査の記録です。

ケジⅠ・Ⅲ遺跡は、南西諸島に多くみられる砂丘遺跡の一つで、縄文時代の遺構、貝殻やさまざまな貝製品など、地域的特色を示す遺構や遺物が多数発見されました。

本書は、南西諸島の先史文化の解明に貴重な手掛かりを提供することができると思います。地域の先史文化の研究や、文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に終始御協力くださった県土木部道路建設課、大島支庁土木課、港湾課、笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和61年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 山 田 克 穂

例 言

1. この報告書は、竜郷一新奄美空港線の改良工事に伴う「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて鹿児島県教育委員会が行った。
3. 発掘調査にあたり
鹿児島県文化財保護審議会委員 河口貞徳
熊本大学法文学部教授 白木原和美
鹿児島県立徳之島高校教諭 成尾英仁の三氏に指導助言を受けた。
4. 獣骨・魚骨の同定及び所見については鹿児島大学農学部助教授西中川駿・水産学部四宮明彦氏に依頼した。
5. 貝類の同定については宮之城町立宮之城中学校教諭行田義三氏に依頼した。
6. ケジ遺跡の砂層形式については徳之島高校教諭成尾英仁氏に依頼した。
7. 放射性炭素の測定については京都産業大学山田治氏に依頼した。
8. 本報告の編集は、長野真一が行ない、各執筆分担は下記のとおりである。

第1・2・3・5章（ケジⅠ遺跡）	長野真一
第4章（ケジⅢ遺跡）	立神次郎
第6章 1 ケジ遺跡出土貝類について	行田義三
2 放射性炭素測定について	山田 治
3 ケジ遺跡出土の自然遺物	
一とくに出土動物骨について一	西中川駿
	西宮明彦
第2章第2節 ケジ遺跡の砂層形成	成尾英仁
9. 出土遺物の管理・保管は県文化課重富収蔵庫で一括して取り扱っている。

本文目次

第1章	調査の経過	
第1節	調査に至るまでの経過	3
第2節	調査の組織	3
第2章	調査の概要	
第1節	調査の概要	4
第2節	調査の経過	6
第3節	層序	8
第4節	ケジ遺跡の砂層形成	9
第3章	ケジⅠ遺跡	10
第1節	遺構	10
第2節	人工遺物	15
1)	下層出土の土器	15
2)	上層出土の土器	34
3)	石器類	52
4)	貝製利器・貝製品	57
第4章	ケジⅢ遺跡	58
第1節	出土遺物	58
第5章	まとめ	60
第6章	自然遺物の同定	70
第1節	ケジ遺跡出土の貝類について	70
第2節	放射性炭素測定について	72
第3節	ケジ遺跡出土の自然遺物 —とくに動物骨について—	73

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の地形図……………	4	第34図	Ⅲ類胴部片……………	40
第2図	ケジⅠ遺跡地形図……………	5	第35図	Ⅲ類胴部片……………	41
第3図	ケジⅠ遺跡土層図……………	8	第36図	Ⅲ類口縁・胴部片……………	42
第4図	ケジ遺跡周辺砂丘の概念図……………	9	第37図	Ⅵ類・Ⅴ類口縁片……………	43
第5図	ケジ遺跡周辺砂層の概念図……………	9	第38図	Ⅲ類 底部片……………	44
第6図	2号集石遺構……………	10	第39図	Ⅵ類・Ⅶ類土器……………	46
第7図	1号集石遺構と共伴遺物……………	11	第40図	Ⅷ類・Ⅸ類土器……………	47
第8図	2号集石遺構の共伴遺物……………	12	第41図	2層出土石器……………	49
第9図	4号集石遺構と共伴遺物……………	13	第42図	2層出土石器……………	50
第10図	7号集石遺構……………	13	第43図	3層出土石器……………	51
第11図	6号集石遺構……………	14	第44図	3層出土石器……………	52
第12図	Ⅰ類口縁部片……………	16	第45図	3層出土石器……………	53
第13図	Ⅰ類口縁部片……………	17	第46図	3層出土石器……………	54
第14図	Ⅱ類口縁部片……………	18	第47図	4層出土石器……………	55
第15図	Ⅱ類口縁部片……………	19	第48図	4層出土石器……………	56
第16図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	20	第49図	貝製利器・貝製品……………	57
第17図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	21	第50図	ケジⅢ遺跡出土遺物……………	58
第18図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	22		表 目 次	
第19図	Ⅱ類胴部片……………	23	表 1	下層出土土器一覧表……………	33
第20図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	24	表 2	上層出土土器一覧表……………	48
第21図	Ⅰ類胴部片……………	25	表 3	ケジⅢ遺跡出土遺物一覧表……………	59
第22図	Ⅰ類胴部片……………	26		図 版 目 次	
第23図	Ⅰ類胴部片……………	27	図版 1	ケジⅠ遺跡（土層断面 調査 風景, 1・6・7号集石遺構）……………	62
第24図	Ⅱ類胴部片……………	28	図版 2	Ⅰ類・Ⅱ類土器……………	63
第25図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	29	図版 3	Ⅱ類土器……………	64
第26図	Ⅰ類・Ⅱ類胴部片……………	30	図版 4	Ⅰ類・Ⅱ類土器……………	65
第27図	Ⅰ類胴部片……………	31	図版 5	Ⅰ類土器……………	66
第28図	Ⅰ類・Ⅱ類胴・底部片……………	32	図版 6	Ⅲ類土器……………	67
第29図	Ⅲ類口縁部片……………	35	図版 7	Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類土器……………	68
第30図	Ⅲ類口縁・胴部片……………	36	図版 8	Ⅷ類・Ⅸ類土器・貝製品……………	69
第31図	Ⅲ類口縁・胴部片……………	37			
第32図	Ⅲ類胴部片……………	38			
第33図	Ⅲ類胴部片……………	39			

第1章調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は昭和63年度の完成を目ざし、大島郡笠利町万屋から和野地区の一部と、砂丘地並びに東海岸に新奄美空港の建設工事を実施している。また、この新空港の開設に伴い、竜郷一新奄美空港線の改良工事も計画された。その結果、これらの建設用地内に本遺跡が含まれることが明らかとなり、県土木部からその取り扱いについて、県教育委員会に協議があった。協議の結果、本遺跡については発掘調査を実施し、記録による保存を図ることとなり今回の調査が行われた。

本遺跡の一部は、昭和57年7月に笠利町教育委員会と熊本大学考古学研究室により、発掘調査が行われている。今回の調査では、前述の調査区域をも含め遺跡全てが対象となっている。

第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会教育長	山田克穂
調査責任責任者	鹿児島県教育委員会文化課課長	桑原一廣
	〃 課長補佐	坂口肇
	〃 主幹	中村文夫
調査企画	〃 主任文化財研究員	向山勝貞
調査事務	〃 主幹	寺園晃
		主査濱松巖
		主事田中孝子
		主事川畑由紀子
調査担当者	〃 主査	立神次郎
	〃 主事	長野真一
調査指導助言者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口貞徳
	熊本大学法文学部教授	白木原和美
	鹿児島県立徳之島高校教諭	成尾英二

その他、鹿児島県大島支庁土木課、同港湾課、笠利町役場、笠利町教育委員会、笠利町立歴史民俗資料館、沖縄県教育庁文化課、有限会社山下建設

〈発掘作業〉川畑忠美、東田輝美、泉忠洋、川畑チズ、川畑オサエ、川畑ミキエ、川畑ヨシ子、坂下代千子、泉カズエ、東田ミネ子、清タエ子、山下ミナエ、当原カズエ、中ウミエ、重信チズ子、〈整理作業〉下畠節子、脇田美津江、河野陽子、有留瑛美、の方々の協力・助言をいただいた記して謝意を表します。

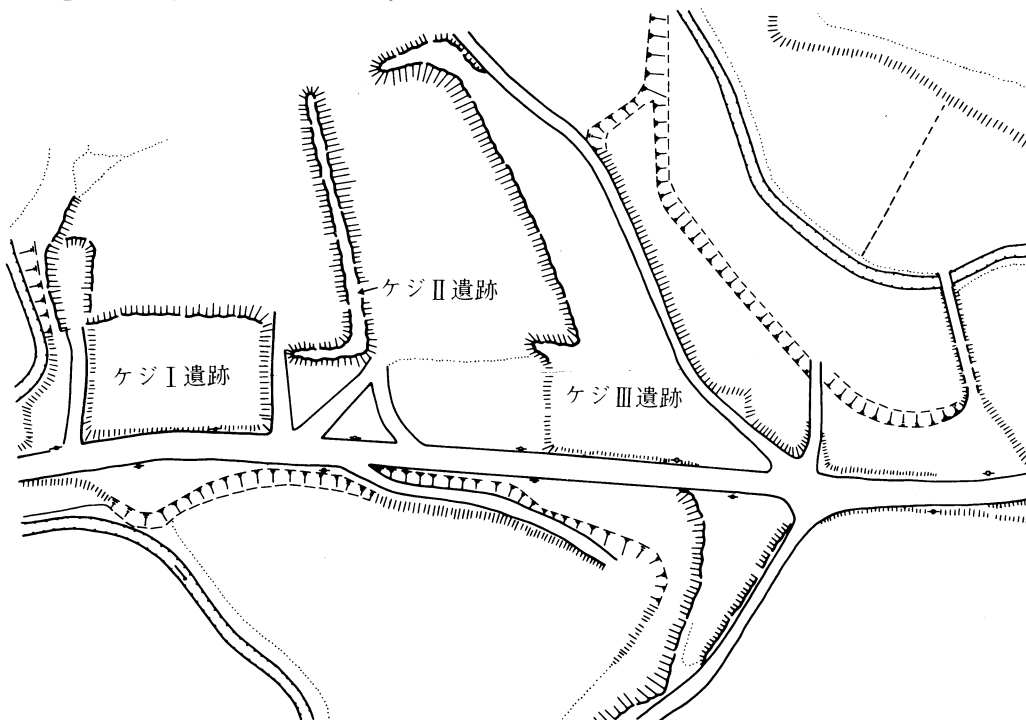
第2章 調査の概要

第1節 調査の概要

笠利町内の遺跡の立地には、一定の傾向のあることが知られている。まず、洪積台地（主に花崗岩の風化土壌で赤色を呈していることより“マージ”と呼ばれる畑地帯）上では、ほとんど遺跡は形成されていない。遺跡は、東側海岸線（太平洋側）近くに集中しそれらは洪積台地の裾部に形成された旧期砂丘地と、現海岸線を形づくる新期砂丘上に形成されている。さらに、旧期砂丘地には、縄文時代の遺跡があり、新旧の二つの砂丘の接触付近から弥生時代の遺跡が顕著となり、新期砂丘上にはその後の古代の遺跡が存在している。なお、遺跡のほとんどは大なり小なりの貝塚を保有している。

本遺跡は、先述した旧期砂丘上に残され、遺跡の後方20m程の距離では洪積台地の裾部と接触している。本来、ケジⅠ遺跡とケジⅢ遺跡とは、同一の砂丘上の遺跡であったが近年の砂採取工事により分断され、お互が独立して遺跡を形成することとなった。

遺跡は、砂丘の前庭部に位置し、最高位で標高12m程である。遺跡の前面にはサンゴ礁の発達した獲場があり、後背地はサトウキビ畑が広がり、さらに奥には笠利の最高峰で天孫降臨の伝承の地「アマンデーの丘」が位置している。このアマンデーの丘は、笠利町を東西に分断する形で連なりその結果、本遺跡では冬期の北西の季節風が一度しゃ断されることとなり、直接吹き越むことが少なくなるのである。



第1図 遺跡周辺の地形図

遺跡は、水成作用で凝結した砂層（クールと呼ばれている）に立脚し、旧期砂丘形成時の白色砂層（第4層）と風化した黄褐、黒褐色砂層で構成される。生活痕跡を認めた層は4枚で、上位の2枚は、近代の耕作等による汚染が顕著であった。下位の3・4層は、先史時代の遺物が包含され、第3層に南島特有の面縄前庭式土器、4層に九州本土との接触を感じさせる曾畑式類似土器が出土している。遺物の分布は、主に北半分1～5区にあり、南側部分の6～9区の範囲では少量であった。この南側部分に分布が希薄であった原因は、北側部分が遺跡の中心部であったことに起因している。第3・4層の層推積は正常な状態であるにもかかわらず、遺物の包含は希薄であったことで説明できると判断している。第1・2層は後世の攪乱が著しく、良好な出土状況は捉えられなかった。出土遺物も各種あり、混在した内容を呈している。沖縄本島と近接した島々に分布の中心をなす。伊波式土器との接触を思わせるもの、奄美に起源をもつと見られる面縄東洞式・嘉徳式土器や、九州本土から移入したと思われる松山式土器



第 2 図 ケジ I 遺跡地形図

片なども出土している。それらの中で、最も多いのが面縄前庭式土器で細片が多数出土している。その他、曾畑式類似の厚手の土器片も認められる。石器では、チャートを用いて剥出した剥片が多く、横長の傾向を持つ不規則な形状を呈している。石斧や叩石は、そのほとんどに研磨が認められ、小型で厚手のものが一般的である。用いた石材は輝緑岩で、近くに産地が知られている。さらに、石鏃が1点出土している。第3層は、面縄前庭式土器が主体の文化層で、上位の多くは攪乱を受けていた。7基の集石遺構を検出しているが、その多くはこの時期の所産と思われる。第4層は、上位のみに遺物の散布があり、厚手で丸底の底部を持つ鉢形土器が出土している。先述の集石遺構は、この層に底面を設けている。

ケジⅢ遺跡は、ほぼ全域に砂採取工事が認められる状態であり、出土遺物もわずかであった。遺物のほとんどは、ケジⅠ遺跡出土の曾畑式類似と同種のタイプである。同時期に実施された笠利町教委の発掘調査でも同様の成果が得られている。

調査方法は、10m四方の升掘りを基本とし、さらに5mごとに四分割して遺物の取り上げを実施している。グッドの設営では、東西方向にA・B・CとしA～Fまでの6区（5m単位）南北方向に1・2・3とし9区まで設けた。その結果、各調査区の名称は、A-1区とかE-6区ということとなる。層序観察は、10mごとにベルトとして残し、その位置で行った。

第2節 調査の経過

発掘調査は、ケジⅠ遺跡・ケジⅢ遺跡の二遺跡を対象とした。現地での調査は、昭和60年6月4日より昭和60年8月14日まで行ない、報告書作製のための製理作業と昭和60年8月19日から60年8月31日までと、60年11月5日から61年1月10日までの二回に分けて行った。これらの調査経過については、日誌より抜粋して示すこととする。

日誌抄

- 6月4日（火）現地着。調査の実施について、鹿児島県大島支庁土木課、大島教育事務局と検討。その後、笠利町役場、教育委員会へ調査協力を依頼する。
- 6月5日（水）本日より、発掘調査実施。遺跡内の草木、蘇鉄等の伐採、焼却等の作業より始める。作業中、ハブが出現。ハブの安全対策については、笠利町へ依頼。
- 6月6日（木）調査区域の設営（ケジⅠ遺跡）。工事用のセンター杭を基準とし、5m単位のグッドを設ける。東西方向にA～F、南北1～9区とし、A-1、D-4区と呼んだ。
- 6月11日（火）重機（バグホー）を投入して、伐採品や盛土の排除。D～Fの各2区の掘り下げ続行。かなりの面積にわたり、耕作や砂採集のための破壊が認められる。
- 6月14日（金）これまでの結果、第2層（黒褐色砂層）までは、良好な推積は確認できず、遺物の採集だけに留意することとした。
- 6月15日（土）遺跡の南部分（D・E、F-8・9区）では、第4層に相当する白色砂層がすでに露出し、包含層部はすでに隠滅していることが判明、中央部から北部分では嘉徳式や面縄前庭式土器等の小破片が採集され始めている。

- 6月17日(月)層順の確認を行う。1～2層(耕作土) 3層(黄褐色砂層) 4層(白色砂層)。A-5区の4層上位で熊本大学考古学研究室が昭和57年に行った発掘トレンチ跡を確認。南部分の白色砂層中には、貝殻が部分的に散布しているが判断が難しい。
- 6月18日(火)遺跡内の電柱の移設工事開始。
- 6月21日(金)C-3区の2層下位よりチャート製の打製石鏃1点出土。周辺からは面縄東洞式、面縄前庭式土器等が散在している。石鏃がどの土器形式に付随したものは確認できず。
- 6月24日(月)本日より笠利町主催の「城遺跡」の発掘調査開始。考古学一色。
- 6月25日(火)A-5区で集石遺構確認(2号と呼ぶ)。かなりの熱を受けている。南部分7～9区にかけてはA・B区でも、3層は削平されている。
- 6月28日(金)本日までの調査で、面縄東洞式、面縄前庭式、曾畑式類似土器、不明土器等が確認される。主体は、面縄前庭式土器(2・3層)である。2号集石遺構の近くで1号集石遺構を確認、2m以上に及ぶ大規模なものである。
- 6月29日(土)台風接近との事、事務所の補強、休憩所テント等の除去作業。
- 7月3日(水)1号集石の検出作業続行中、遺構内より貝製の垂飾出土、遺構は二重構造になり50cm程より下は中央部だけさらに深く掘り込まれている。D-2区に3号集石遺構を確認。
- 7月5日(金)3号集石は角礫を用いたもので、礫間より面縄前庭土器破片を確認。
- 7月9日(火)鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏による調査指導、10日まで。南島の土器形式の諸特長についても指導を受ける。4層では、曾畑式類似土器の出土が顕著となる。鹿児島大学歯学部小片教授、川路助手の来跡。
- 7月19日(木)B-1・2区で礫が散在しているが平面的であり判断が難しい。
- 7月15日(月)C-2・3区3層下位にチャート製の剥片が多く散布。曾畑系土器も出土。
- 7月18日(木)1号集石遺構内の埋土を2mmのフルイにかけ、自然遺物の採取、魚骨が目立つ。遺構の最終構造を確認。
- 7月22日(月)県立徳之島高校教諭成尾英仁氏による地質的見地からの調査指導、23日まで。新期砂丘と旧期砂丘の形成状況等について指導を受ける。
- 7月24日(水)熊本大学白木原和美教授の調査指導、26日まで。前回発掘調査の結果等を聞く。
- 7月25日(木)D-2区4層より、チャート製大型石核、有孔貝製品(垂飾)2点出土。
- 7月30日(火)本日より、ケジⅢ遺跡の調査開始。砂採取工事による削平の可能性が高い。
- 7月31日(水)ケジ1遺跡-5～7号集石遺構、平板実測等の実施。ケジⅢ遺跡-B～G 1～3区の掘り下げ実施。G 1・2区にわずかに4層が残存。他の区域では全て削平されている。
- 8月2日(金)ケジ1遺跡-残存部の調査と関連の実測記録。ケジⅢ遺跡-周辺地形実測。
- 8月5日(月)ケジⅠ遺跡-壁面の実測。ケジⅢ遺跡-周辺地形実測継続。
- 8月9日(金)ケジⅠ遺跡-実測記録。ケジⅢ遺跡-重機を伴用して深掘り続行。
- 8月11日(日)本日で調査終了。器材の梱包。台風接近。
- 8月14日(水)台風来襲のため本日まで滞在。帰庁。

第3節 層序

ケジI遺跡の層序で、10m 毎の基本ベルトの一部を図示した。

最上位の断面図は、B-1 からF-1 区までの層順で、南側に観察したものである。中央と下段の三本は、南北方向の状況を示したもので西側（海より山方向）に観察したものである。

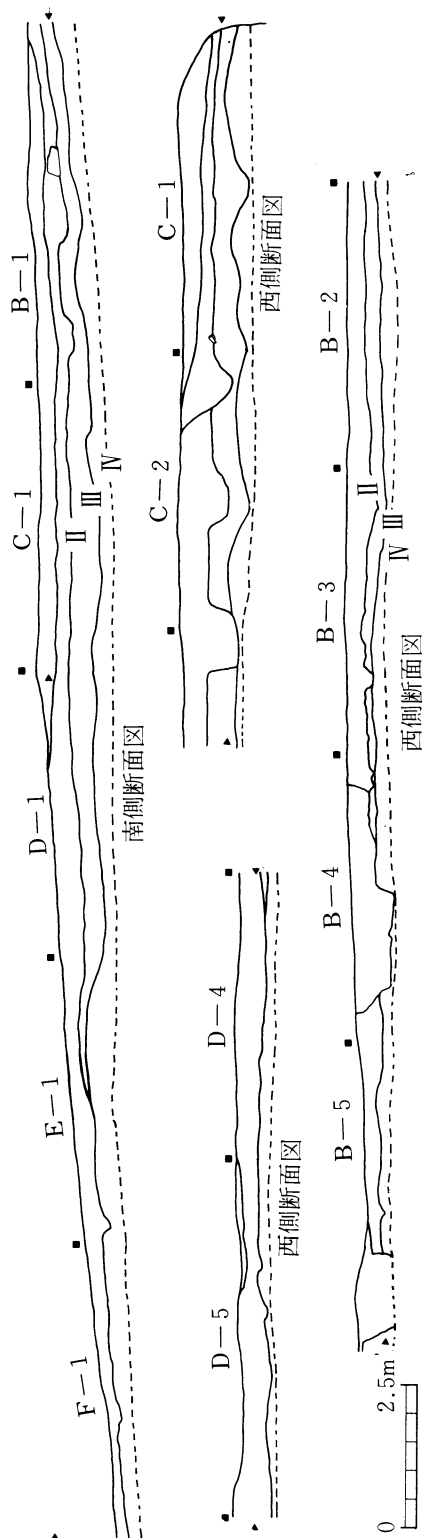
層観察の結果を示すと以下のとおりである。

第1層 いわゆる耕作土で、色調は褐色の腐植土で、その成分の多くは砂粒である。全域において残りは悪く、北側部分に観察できる程度である。遺物は包含されているが、原位置の可能性は極めて少ない。

第2層 黒褐色の砂質層で、蘇鉄等の樹根が大量に繁茂し、さらに、事前に行われた砂採取工事での清掃作業の影響を受け、攪乱が著しく認められた。5区から1区の北半分に遺物が包含されていた。この層でも、遺物の原位置の可能性は少ない。

第3層 黄褐色の砂層で、面縄前庭式土器の主体層である。この層は、南側断面図でも観察できるように、E区の中央部附近までの広がりであり、砂丘先端部までは形成されていないことが確認できた。このような傾向は、砂丘地ではしばしば見られる現象であり、砂丘遺跡の調査報告ではよく報じられている。特長的なことは、第4層との接触面が平担ではなく、波状の推積をなしていたことである。この状況は、ケジIII遺跡でも同様であった。

第4層 白色の砂層で、上位に曾畑式に類似した土器を包含していた。遺物の分布は、1区から3区の範囲に限られている。このことは、先に行われた笠利町教委によるトレンチ調査との結果とも、よく符号している。



第3図 ケジI遺跡・土層図

第4節 ケジ遺跡の砂層形成

鹿児島県立德之島高校教諭 成尾英仁

ケジ遺跡は、大島本島の北部の東海岸の砂丘上に立地している。この砂丘はほぼ南北にのびており、その上に宇宿貝塚や長浜金久遺跡・アママル貝塚など多数の遺跡が立地している。

砂丘の幅がもっとも広い部分では約 500m 位であり、平均して 300m 程度で長短をくりかえしながら続いている。高さは比較的 low、最高所でも 20 数 m である。

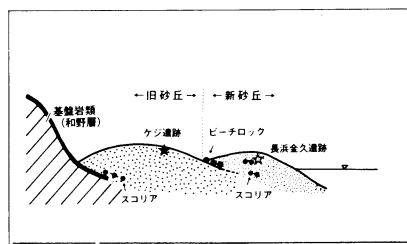
笠利半島の砂丘は固結の程度により新旧二つの砂丘に分けられるが、その二つの境界は地形的にも浅い谷となっており、明瞭に区別することができる、硬質の砂層は内陸部にあり、未固結の砂層によっておおわれていることが多いが、その際二つの境界はあまり判然と区別されにくい。

ケジ遺跡の砂層はこの新旧二つの砂層よりなりたっている。硬質の砂層は有孔虫の死骸が続成作用により固結したもので、サンゴ片などは含まれていないことから、汀線付近からやや陸側で推積したものと考えられる。またこの砂層中にはクロスラミナが良く発達していたり、下部に風化し赤銅色を呈するスコリアが点々と推積している。部分的には軟質で未固結の中粒砂が薄くはさまれている。層厚は場所により異なるが、最低 10m の厚さがある。

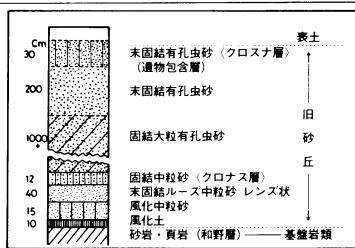
硬質砂層の上の未固結の軟質砂層は、下位の砂層と同様に有孔虫砂よりなりたっており、純粋な層ではサンゴ片・貝片等は含んでいない。砂層の色調は白色から黄橙色まで大きく変化するが、特に遺物包含層ではやや赤味を帯びルーズでサラサラしている。硬質砂層との境界は明瞭な場合もあるが、大部分の場所では漸移している。

ケジ遺跡南側の長浜金久遺跡では、未固結砂層中に少なくとも 5 層の黒色砂層（クロスナ層）が認められるが、ケジ遺跡では明瞭なクロスナ層は遺物包含層が相当すると考えられ、海側部分の砂丘より少ない。

砂丘の形成について井関（1975）は、古砂丘がリス・ヴルム間氷期の海面上昇期に、旧砂丘は約 6000 年前の縄文海進期に、新砂丘は奈良・平安時代以降に形成されたことを明らかにした。ケジ遺跡では砂丘の上位に近い部分から、縄文時代前期の遺物が出土することより、井関の旧期砂丘に相当すると思われる。



第4図ケジ遺跡周辺砂丘の概念図



第5図ケジ遺跡周辺砂層概念図

井関弘太郎（1975）：砂丘形成期分類のためのインデックス 第4紀研 14, 183～188

第3章 ケジI遺跡

第1節 遺構

7基の集石遺構を確認した。

1号集石遺構 (第7図)

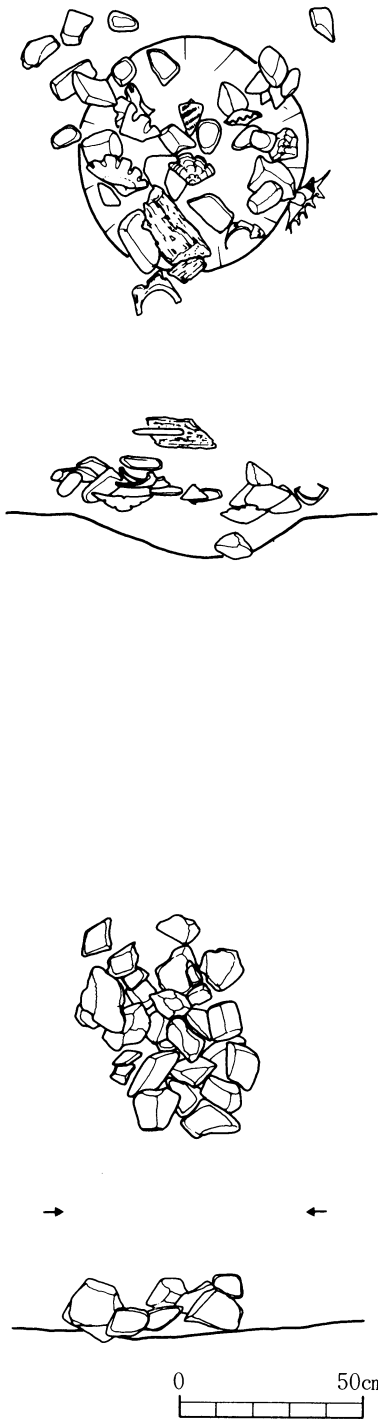
B-5区で検出し、第4層の白色砂層と第5層のクールに掘り込まれている。上面観は円形で、途中までは皿状に掘り込み、その下位では筒形に掘り込み、側面観はラッパ状を呈している。なお、筒形部分は第5層に相当する。最大幅は南北方向で2.75m、東北方向では2.40mの円形である。確認できた位置より、最深部までは約1.0mで、0.45mまでは皿形にその下位は筒形である。集石遺構の確認は、掘り込み位置より約10cm程上位で、遺構に伴う平扁礫である。

遺構内の礫は、最大で30cm、最小で5cm程であり、礫のほとんどは砂岩(和野砂岩層より)で、わずかに輝緑岩も含まれている。この輝緑岩は、叩石の破棄されたものである。

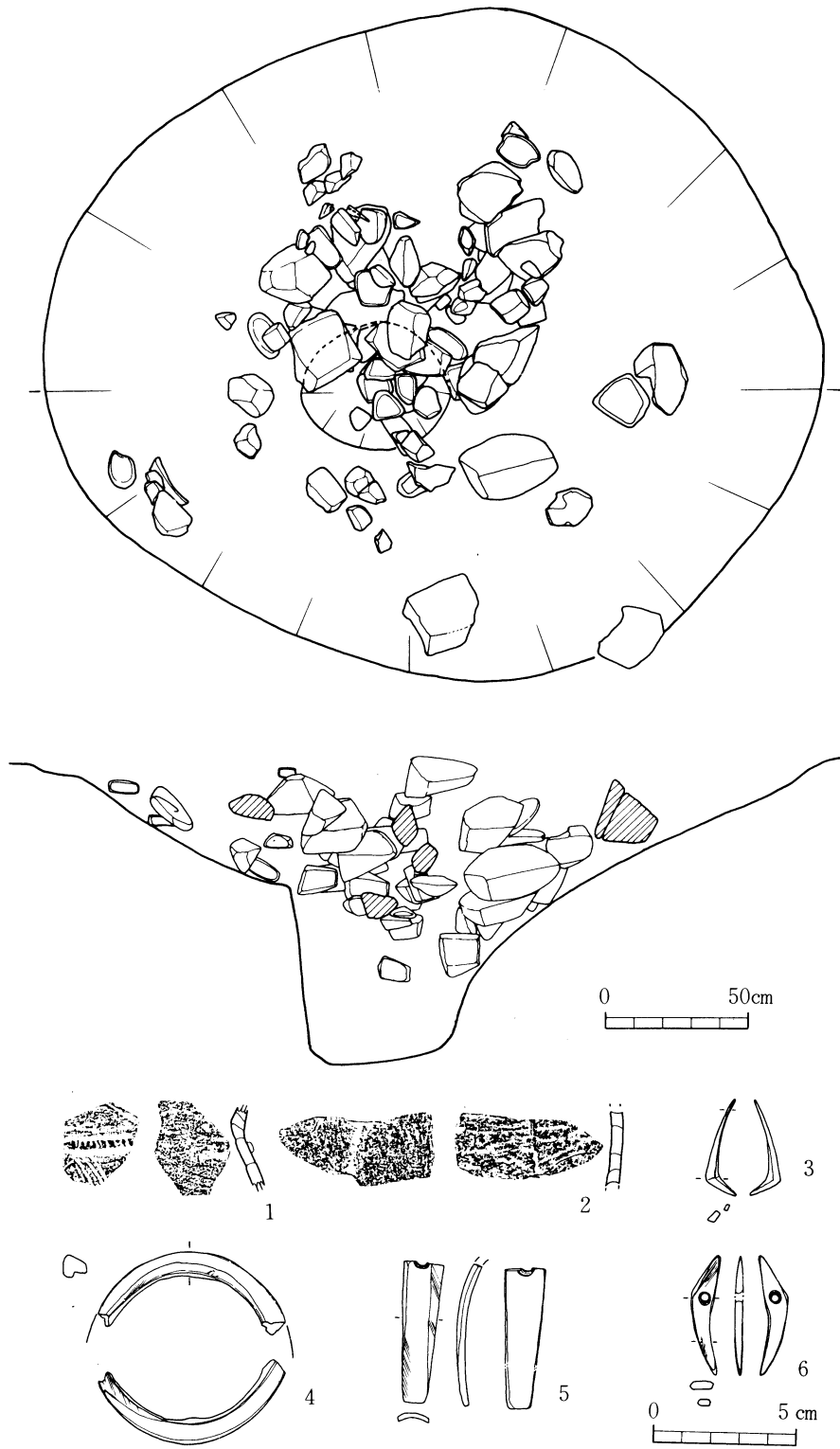
遺構の状況から、加熱を受けた等の二次的な痕跡は認められない。共伴遺物は、図示した6点の他、砂岩製の磨石2点、輝緑岩製の叩石と磨製石斧の欠損品が1点ずつ出土している。1は頸部、2は胴部片でいずれも面縄前庭式土器である。3は貝種と用途は不明、周縁部を利用し入念に研磨している。4はサラサバティの周縁を研磨し、貝輪としている。殻底には斑文が残る。5は真珠層のみで造り上げたもので垂飾品と思われる。6も5と同様で垂飾品と思われるが、形状より実用品の可能性もある。その他、主に魚骨・多種の貝殻も検出され、その状況は、破棄の様相を呈していた。埋土は、主に黄褐色の砂で、面縄前庭式土器の所産と判断できる。

2号集石遺構(第6図)

B-5区の検出で、1号集石遺構と接した位置にあり、中心部との距離は2m程である。遺構の底面は、第4層の白色砂層に設け、皿状を呈している。加熱を受けていることもあり、埋土は灰や木炭粒が混り黒灰色の砂質土

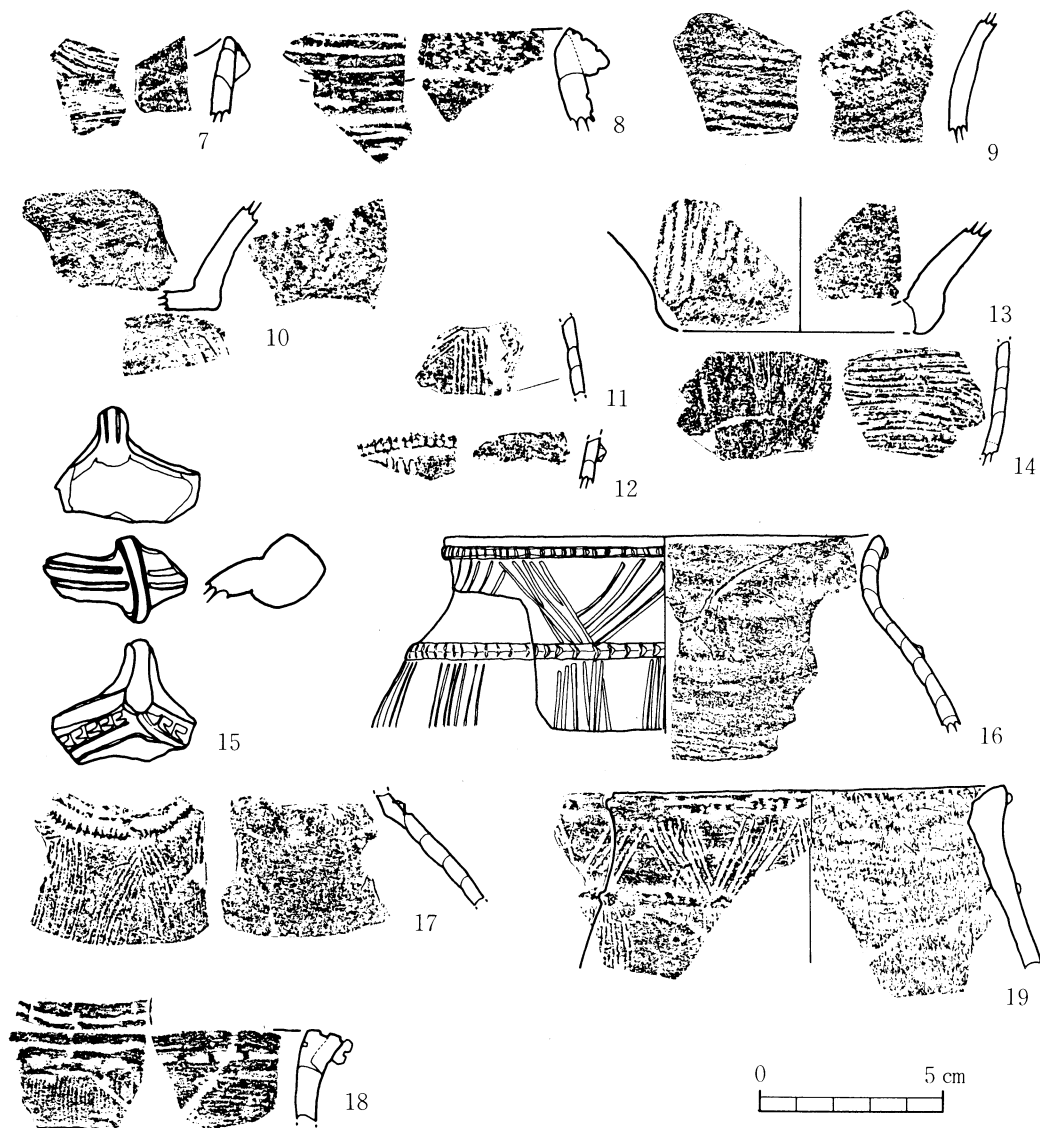


第6図 2号・3号集石遺構



第 7 図 1号集石遺構と共伴遺物

である。
掘り込み
の確認面
は、第 4
層で、60
～65cm程
のほぼ円
形である。
10～15cm
程の砂岩
礫・20～
30cm程の
サンゴ塊
・ヤコウ
ガイ・ク
モガイ・
シヤコガ
イ・サラ
サバテイ
の大型貝
で構成さ
れ、その
他小型の
貝や魚骨
等も含ま
れている。
明瞭に加
熱を受けたと確認
できたの
は、この
遺構だけ
である。
共伴遺
物は、図

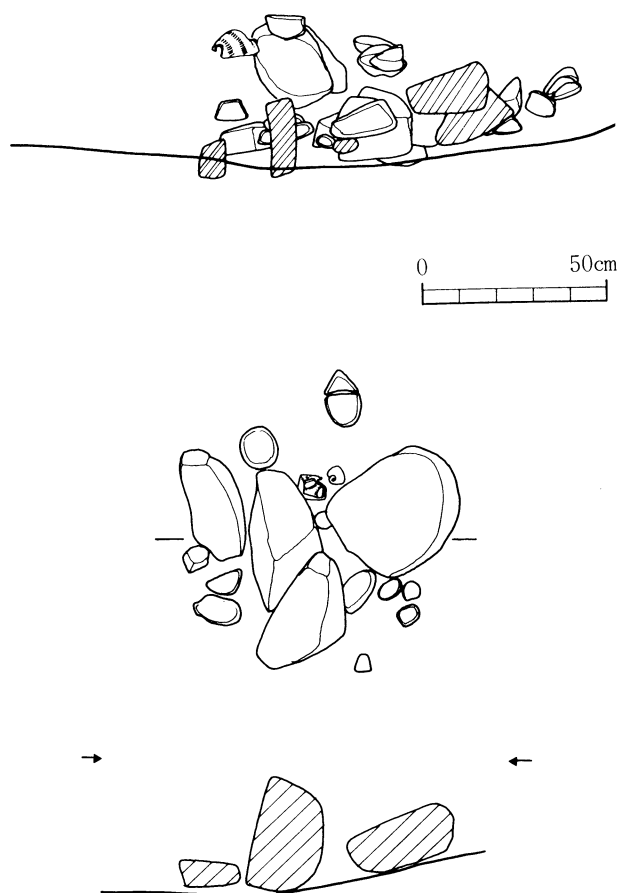
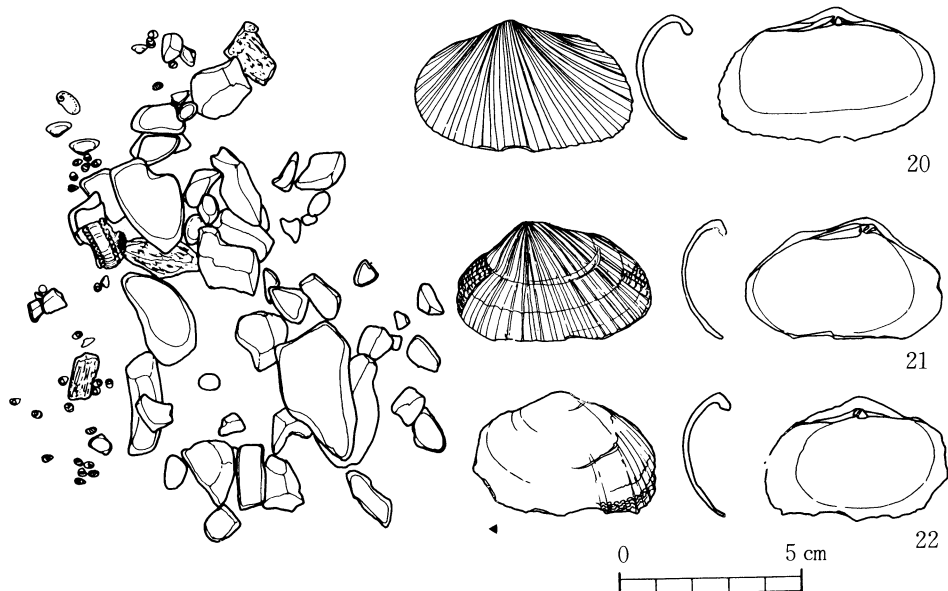


第 8 図 2号集石遺構の共伴遺物

示した7～19の他は細片が少量である。7・8は、口唇部を肥厚し状線文を施し、18では押し引き文、15は山形口縁部にこぶ状の突起をつけ、上位は二本の状線文、下位は二又の押し引き文がみられる。底部を除く他の遺物は、面縄前庭式土器（Ⅱ類）である。

3号集石遺構（第6図）

D-2区の検出で、砂岩の角礫で構成される。底面は第3層の下面に相当し、掘り込みは確認できていない。50～60cmの範囲に礫が置かれている。焼を受けたかどうかは、不明である。共伴遺物は、面縄前庭式土器（Ⅲ類）の胴部の小破片が1点だけ、礫間で確認できた。



第 9 図 4号集石遺構と共伴遺物

第 10 図 7号集石遺構

4号集石遺構 (第9図)

D-2・3区の検出で、底面は第4層の白色砂層の上位である。横断面の右側(西)がやや高くなるようでもあったが、掘り込みが行われたかどうかは不明である。東西に110cm、南北に140cmの広がりを持ち、最大で45cmの深さをなしている。大型の礫は平扁で、最大で40cm程あり、そのほとんどは砂岩を用いている。サンゴ塊も3個使用し、ヤコウガイ・ミミガイ・リュウキュウバカガイ・リュウキュウマスオ・アマオブネ・イソハマグリ等も含まれる。また、アマオブネ等の小型の貝は、最下面に散布していた。遺構の構造では、方形に組まれた様相もうかがえ、中央部には小礫が2点あるだけであった。

20~22がリュウキュウマスオで、腹縁部が一部欠落している。貝刃であるかどうかは、判断がむずかしい。上部からは、面縄前庭式土器が採集されている。

7号集石遺構 (第10図)

C-2区の検出で、第3層より4層の上位へかけて組まれる。南北・東西ともに80cm程の範囲である。30~40cm程の砂岩礫4個と小



第 11 図 6号集石遺構

砂岩礫で構成し、ヤマウガイの破片が2点含まれる掘り込みラインは確認できていない。

6号集石遺跡（第11図） A-3区の検出で、第4層で掘り込みを確認し、皿形の形状をなしている。最上位から底面までは50cm程で、砂岩の大型礫と小礫で構成し、リュウキュウバカガイ・イソハマグリ・ミミガイ・サラサバテイ・オオベッコウガサ・水字貝などを含んでいる。なお、貝類は主に下位にみられる。黒塗りは、魚骨を示している。

第2節 人工遺物

1) 下層出土の土器

最下層の第4層の主流を占める土器で、第3層でも出土している。3層出土の例では、4層との接触面に近く、本遺跡の下層に存在することには違いない。

23の例を除き、他のものは、口縁部は直行するのが一般的で、わずかに外反する程度のものである。口唇部の断面形は舌状が主で、尖りぎみのものが多い。文様は、連点文、列点文、沈線文（直線文・曲線文）で、これらの組み合わせによる幾何学文様が主である。胴部から底部へかけては、沈線文が主となり、底部近くまで施文している例もある。底部は厚みのある丸底のみで他の形状は含まれない。

総じて以上のような特長が指摘でき、この種の土器をⅠ類・Ⅱ類として取り扱い、文様等の相違により細別した。（口縁部近くの、第1文様帯についてのみ）

Ⅰa類 (23) 1点だけの出土で、口縁端部で大きく外反し丸味のある口唇部を呈している。口唇部に不規則な刻み目が施され、特に内面では平行ないしは八の字状に施文し、さらに、内面の下位にも部分的に施している。外面の文様は、浅い短沈線と沈線を横・縦・斜位につけ、さらに曲線文も組み合わせで不規則な構成に仕上げている。両面ともにナデられる。

Ⅰb類 (24・25) 第1文様帯に連点文を施すもので、口唇部は平坦である。連点文は先端部が丸味を帯びた施文具で、下から上へ突き上げるように押えつけたもので押点文風な感じでもある。口唇部が平坦面を呈するのはこの類だけで、斜位の刺突文をつける。内面にも刺突連点文がつけられる。25では内面に1条、外面に数条の浅い沈線がつけられることより、第2文様帯以下を構成していることを知り得る。なお、整形はナデの調整である。

Ⅰc類 (26) 基本的な施文イメージはⅠb類と同じであるが、押し付けが浅いこと、口唇部が尖り、器面に条痕が著しい点で異なる。第2文様帯は、横と斜位の直線文と思われる。

Ⅰd類 (27～29・30・32) バリエーションに富んでいるが、列点文・列点文と短沈線、列点文と曲線文が見られる。27は、上位が縦位、下位が斜位の列点文で、その間を短沈線で斜位（右下り）に結んでいる。口唇外面に刺突を施し、内面では横位の沈線の上に短沈線を浅く描く。28は曲線文の上下に右下りで斜位の列点を描き、内面の列点は深く鋭い。内面は条痕が著しく、外面はナデ消されている。30は縦位に押え付けた列点文と短沈線との組み合わせで、内面にも二列右下りの列点文がつけられる。内外面とも下位で条痕が残される。

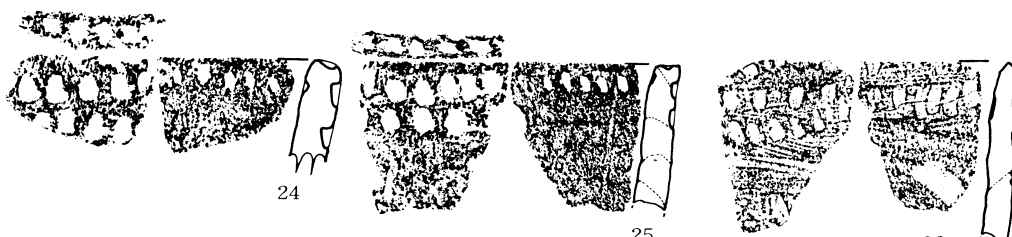
Ⅰe類 (34～40・42・44) 沈線文を主文とするもので、横位の平行線文、斜位の平行線文、曲線文と直線文・直線文の組み合わせ文等で構成される。34は横走する細沈線と斜行する沈線（ヘラ状施文具をやや寝かせる様に使用）で描き、内面でも同種の文様構成を持つ。35は二片の接合で、左側は赤褐色、右側は黒色の色調で全く異なる。外面は細めでやや深めの沈線で横・縦位さらに口唇端部で弯曲する曲線文を組み合わせ、内面では斜めの直線を交差させることで菱形文を描き出している。内外ともに横位の条痕が著しい。36口唇部に深めの刺突を行ない、外面は左から右方向への沈線、内面では横位・斜位の沈線構成である。内面がより細くて深い



23



23



24

25

26



27

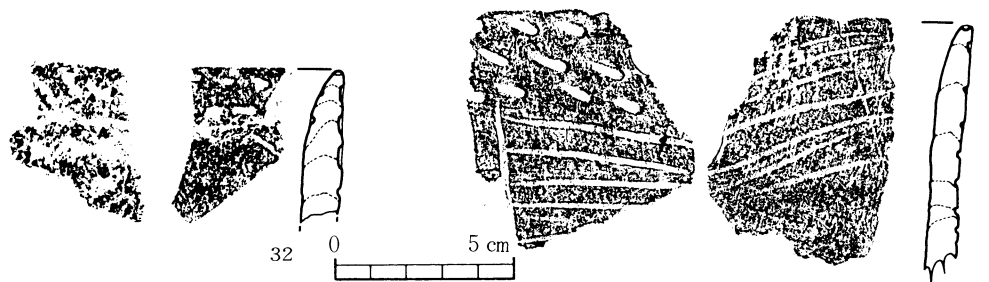
28

29



30

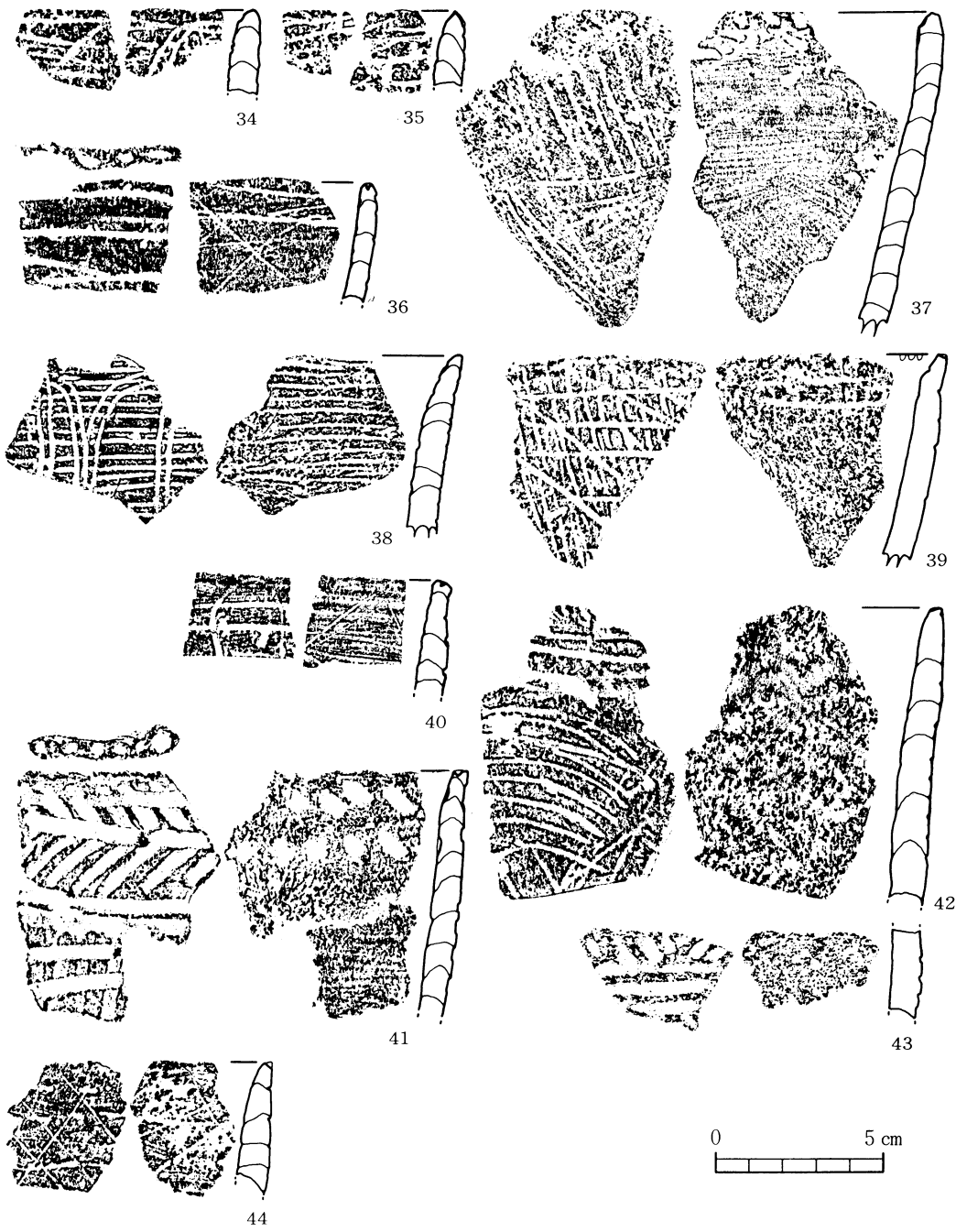
31



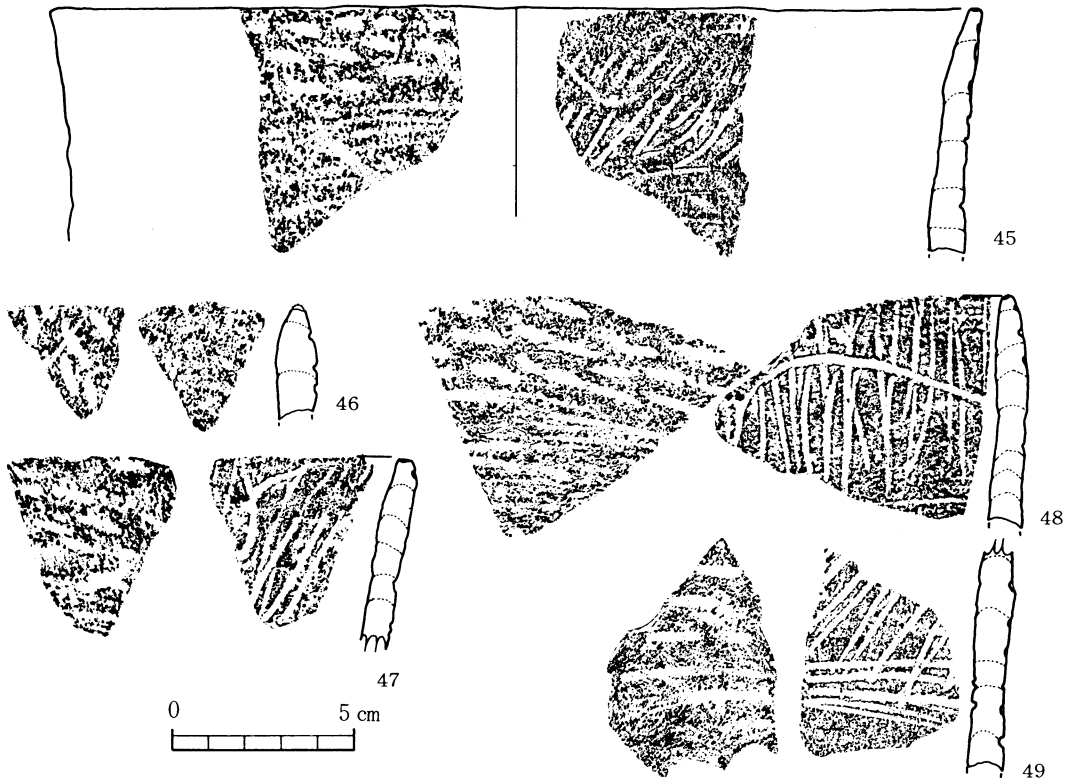
32

33

第 12 図 I 類口縁部片



第 13 図 I 類口縁部片

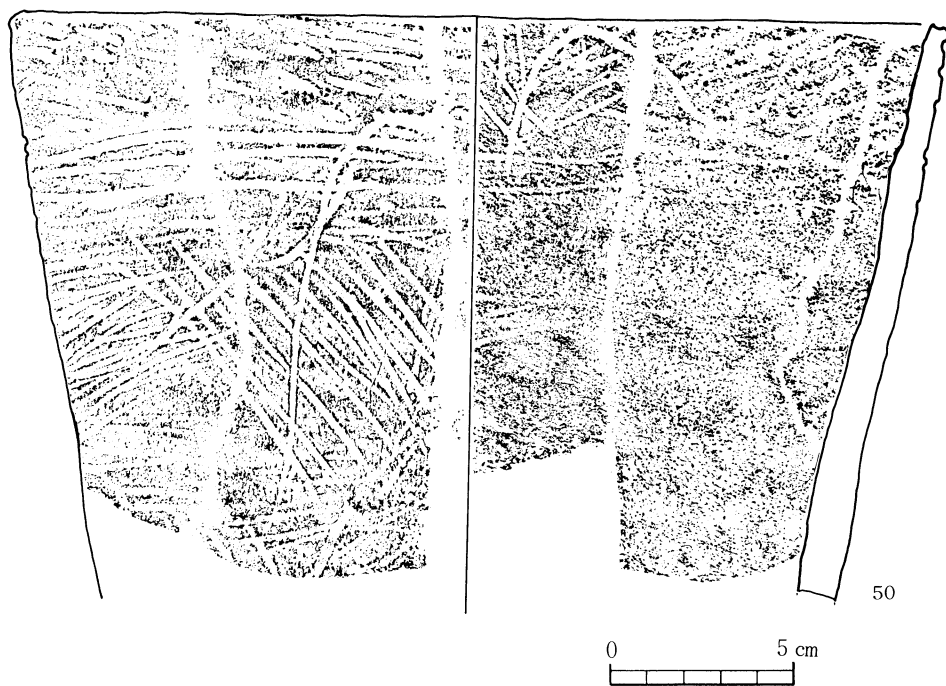
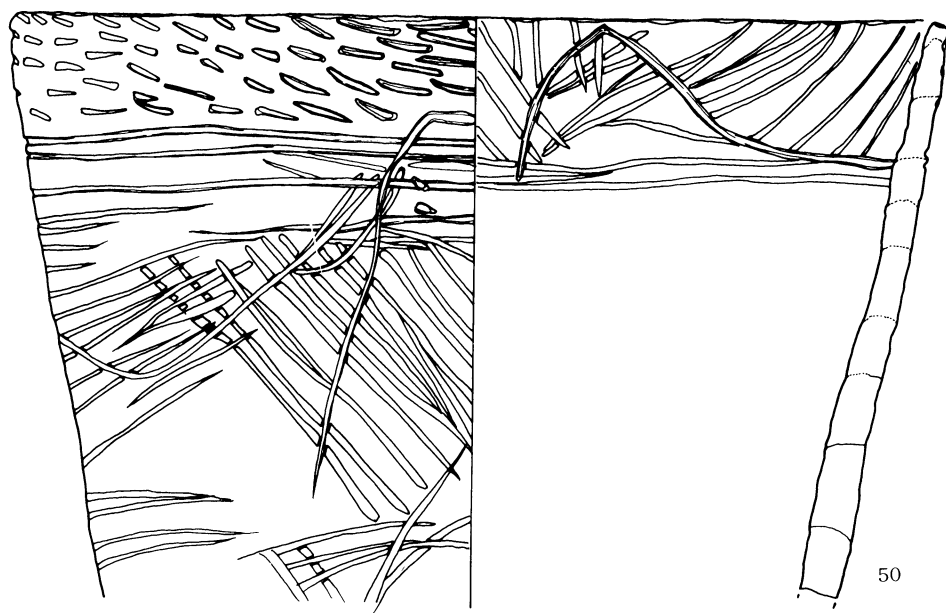


第 14 図 II 類口縁部片

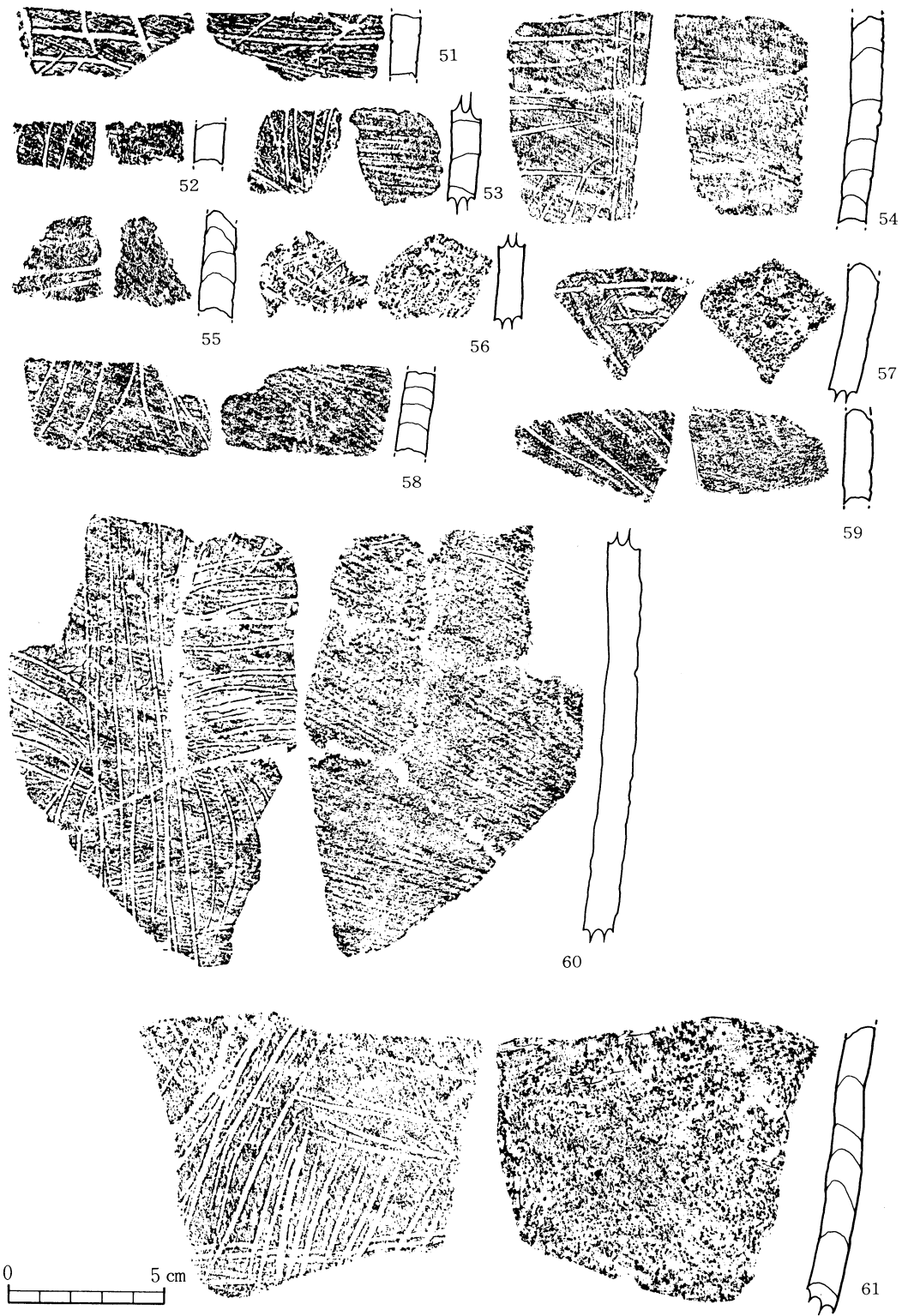
沈線がつけられている。37は4層の接合品で、文様帯の区別はなさそうである。施文具は先端部の鋭いヘラ状のもので、寝かせるように用いる。内面調整はヘラ状のもので条痕風に行ない上位に、深めの列点がつけられる。38、横位の平行沈線をつけた後、それぞれ縦位と弯曲する平行線を描き、短沈線文風に仕上げる。内面は横方向の平行沈線である。39は縦→横→斜の順に施文し、口唇部はヘラで刻まれる。内面は二本の横位の平行沈線の上に縦位の短沈線で描かれている。42裏面は剝脱が激しい。外面は光沢があり入念なナデの調整がみられる。口唇端部に刺突連点をつけ、直下に4本の平行沈線、第2文様帯は孤文状に描かれている。44の施文具は鋭いもので深く鋭く切り込まれている。斜位の沈線を文差し菱形の文様を描き出している。

I f 類 (41・43) 幅広の沈線文の一群である。41は最大で5mm程あり、右下り→左下り→横方向の順で描かれ、口唇部も刻まれる。内面ではI b 類様の連点文がつけられる。外面はナデられ、内面では横位の条痕が残される。

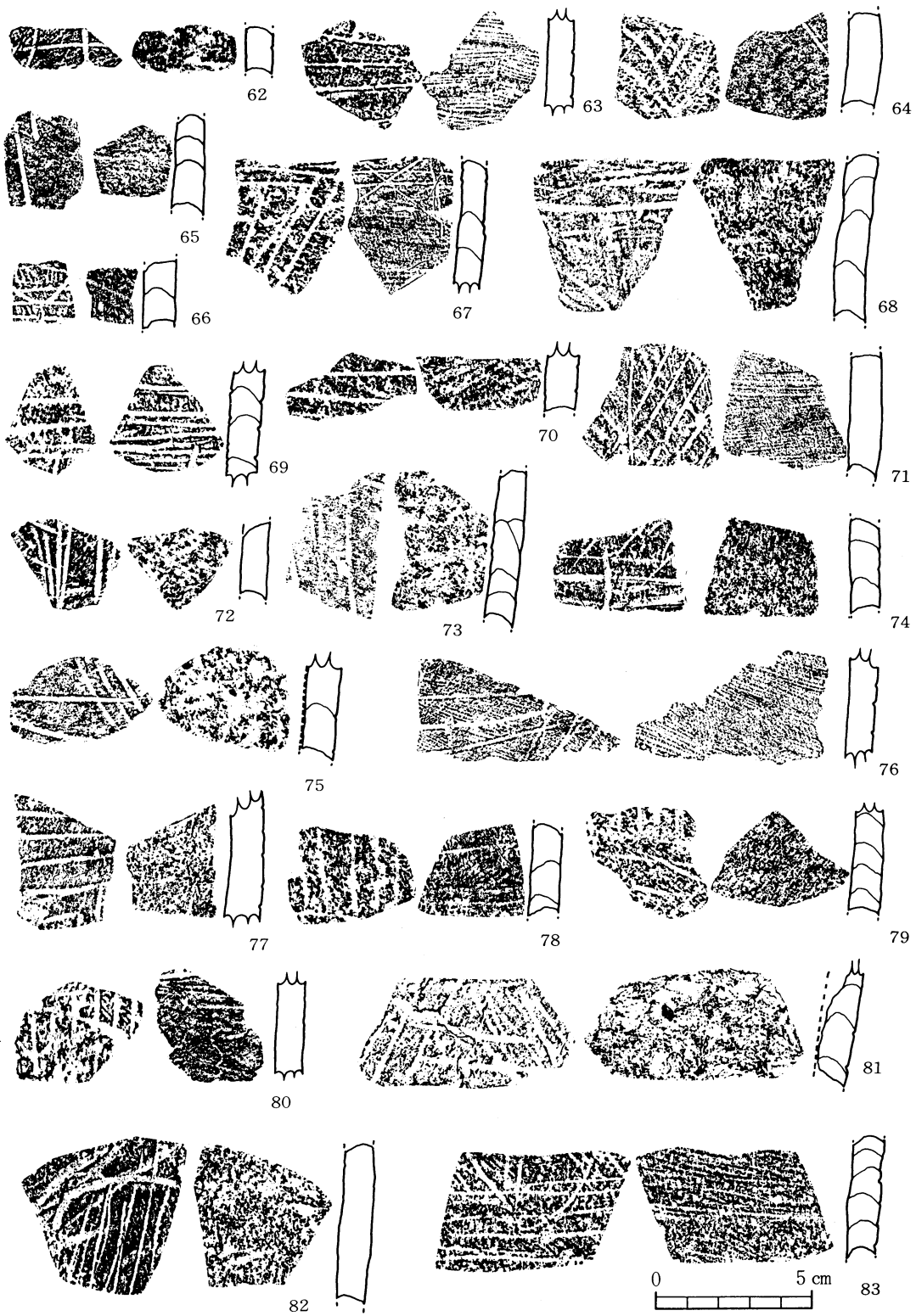
II 類 (33・45・46～50) 斜ないし横位の短沈線(極めて短く1～1.5cm程)で第1文様帯を構成し、内面には不規則な沈線文を描く。口唇部には斜位の刺突が施されている。33は第1文様帯では入念にナデの調整がなされ、第2文様帯ではわずかに条痕が残される。ヘラ状施文具で右下りに押し付けられ粘土の溜りがみられる。第2文様帯は、縦と横位の短沈線で構成される。内面もナデ仕上げで、右上りと縦位の浅い沈線文が描かれる。45・47～50も33と同様な



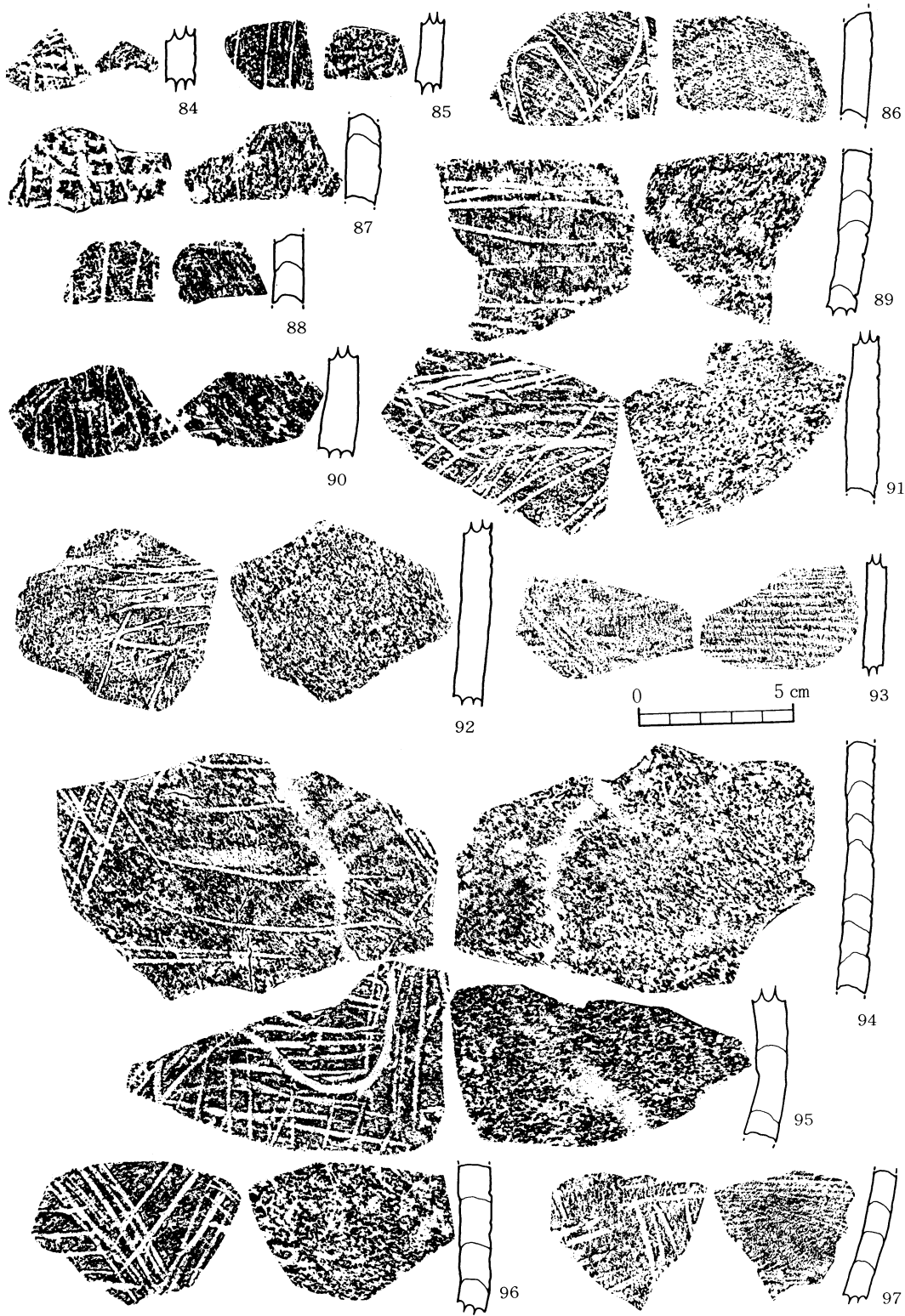
第 15 图 II 類口縁部片



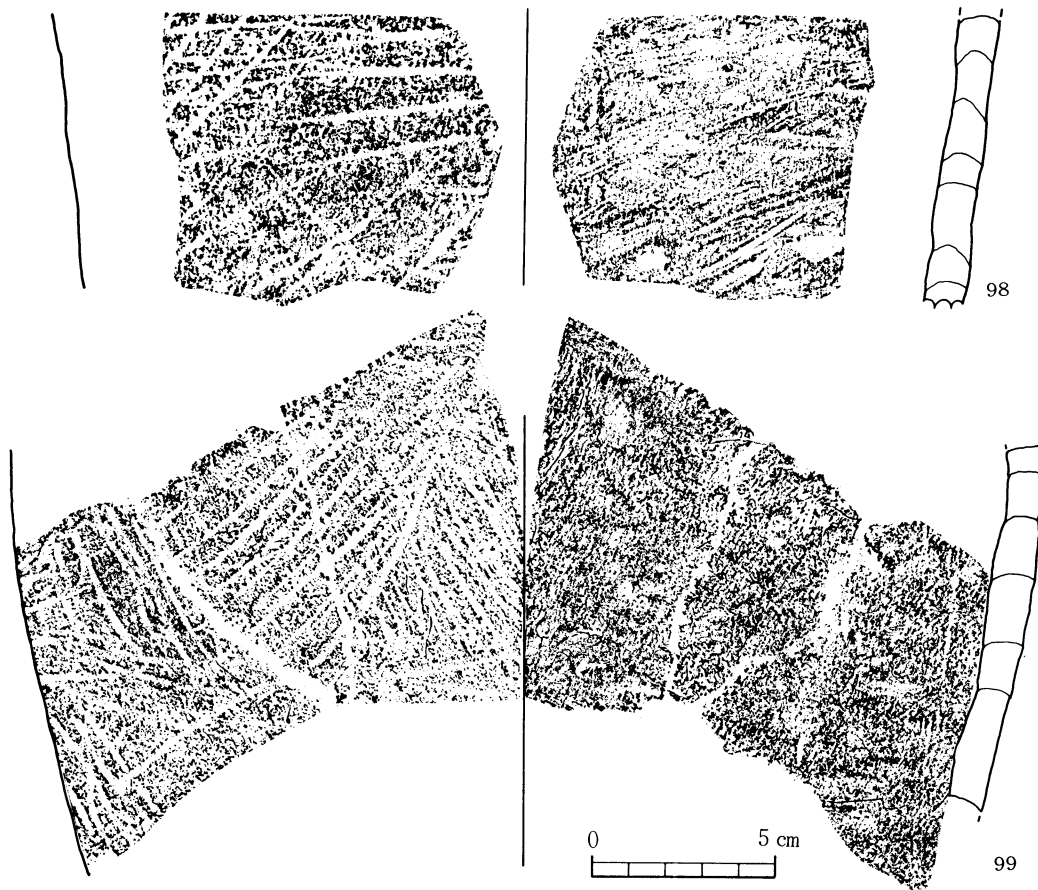
第 16 图 I · II 類胴部片



第 17 圖 I · II 類胴部片



第 18 图 I · II 類胸部片



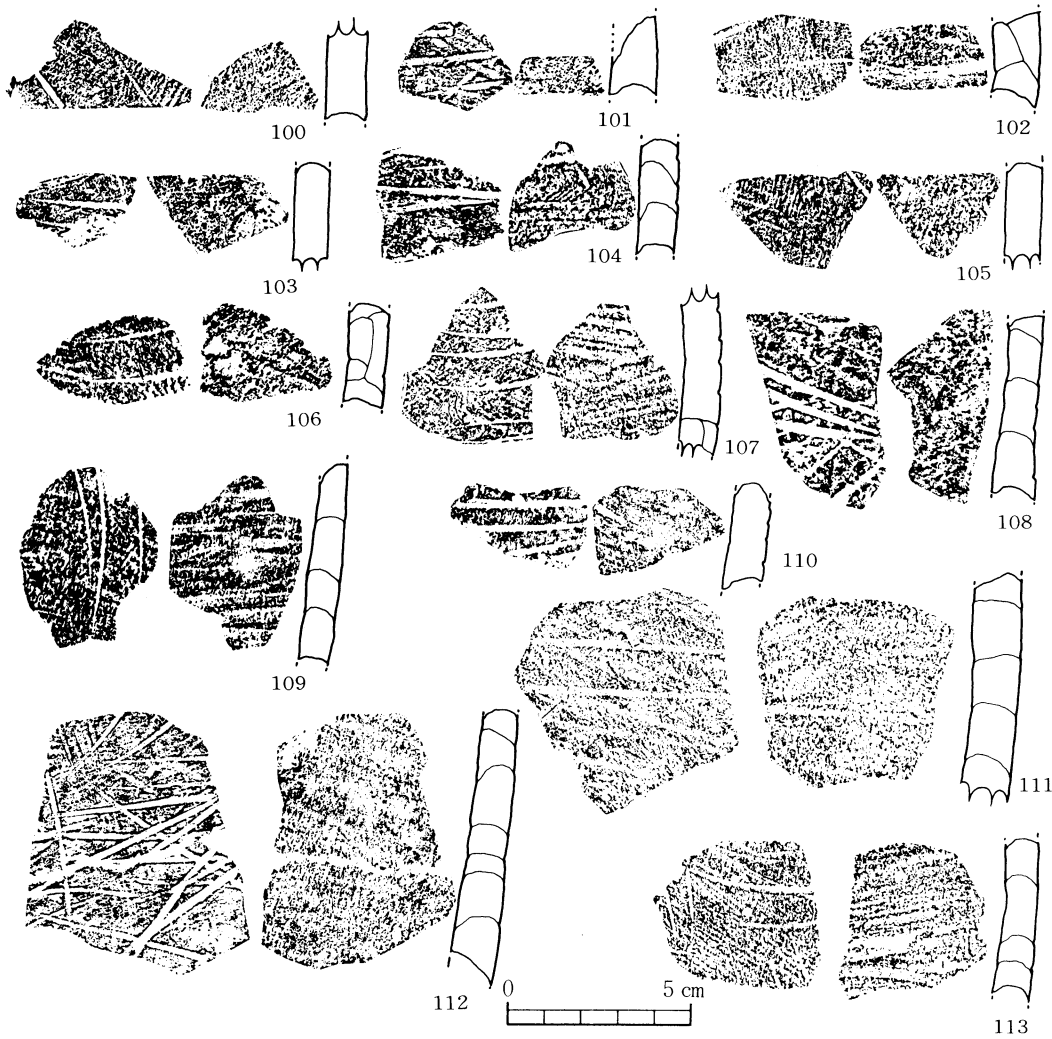
第 19 図 II 類胴部片

第 1 文様帯を持ち、第 2 文様帯は各種に変化している。48 の口縁部は山形を呈すようである。45・50 の復元口径は 25.5cm で文様構成・胎土・焼成等の類似などから同一個体の可能性が高い。50 の短沈線は右下りに連続的に描かれ、第 2 文様帯は横走する 3 本の浅い沈線で区画され斜位の直線文や曲線文で描かれる。内外面共に入念なナデ調整がなされる。

胴部

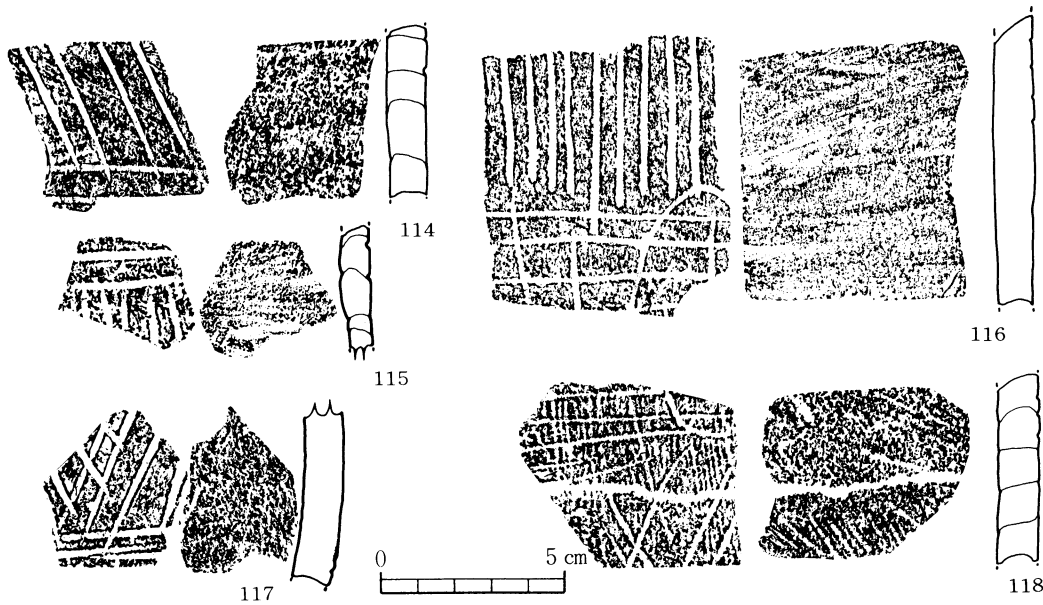
胴部についての細分は行っていないが、特長なものについては列挙して図示した。

51～60 は類似した特長を見ることができた。硬質で光沢のある仕上がり、表裏共に条痕調整が行われ、ヘラ状の先端部の鋭い施文具で各種の沈線が描かれている。60 は 5 点の接合で全て 4 層の出土である。63・67・71・76 等の内面の条痕は繊細で特殊な整形具の使用が予測される。67 の内面に描かれた交差する文様は 30・40 等と近接していることをうかがわせる。69 の内面は深い沈線で描かれ、83 では粘土ひもの接合部が明瞭に観察できる。87 は格子目文を描き、内面は黒色・表面は赤色の色調を持つ。86 の曲線は二又の施文具で描かれる。91 の曲線は最終段階である。93 は採集品で内面の条痕が著しく残される。器壁の薄い点など他の形式の可能性もある。94 は 3 層と 4 層の接合で外面は光沢があり、入念なナデ調整である。97 は薄く硬質である。



第 20 図 I・II 類胴部片

98・99は復元したもので、99ではナデ調整を良く行う。100～113は外面の色調が赤褐色を呈したもので同一個体と思われるものもある。100・101・105の外面に残る条痕はよく類似し、107・109の施文手法や内面の整形の類似も指摘できる。108や112の施文はやや広くなる傾向がみられ、両者とも整形は入念なナデである。113では条痕が残される。114～118は直線的な文様構成が見られるもので、細くて明瞭な沈線文である。114の内面は入念にナデ消され、116では外面だけに行われる。115の内面整調は不十分で、粘土ひもの接合の痕が残される。117は傾が不明で横転の可能性もある。ナデ整調は入念である。118の条痕は顕著で、文様構成は116と類似する。119～137は広めのヘラ状施文工具で描かれる一群である。119は最も規則的な文様構成を感じさせるもので、短沈線の特長をよく表わしている。入念なナデ調整が見られ、120、121も同じである。122、123、130は横と斜線の接点部で、130の3点の接合はいずれも4層出土である。125は硬質で内面の条痕は著しく、他よりもやや薄手の破片であ

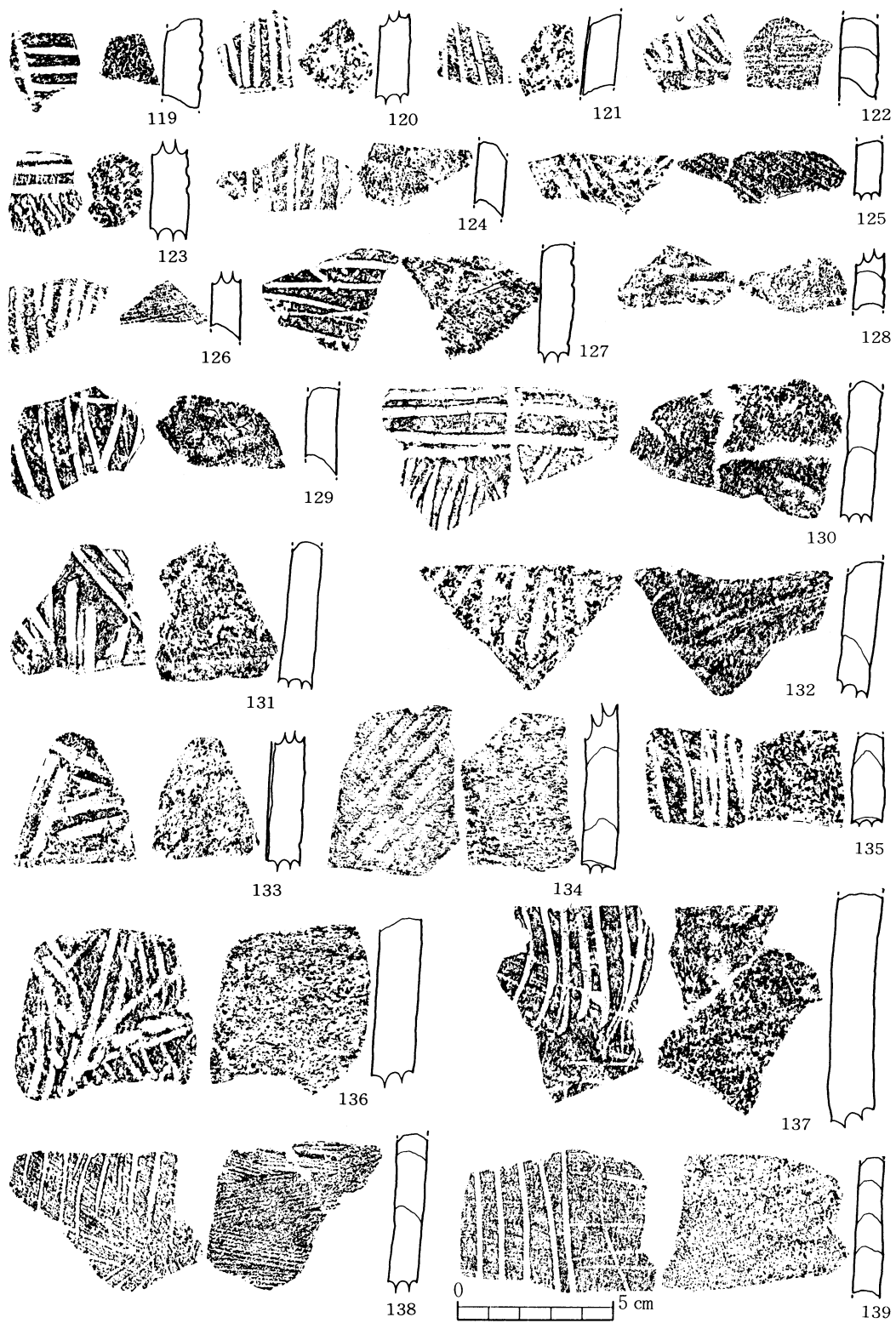


第 21 図 I 類胴部片

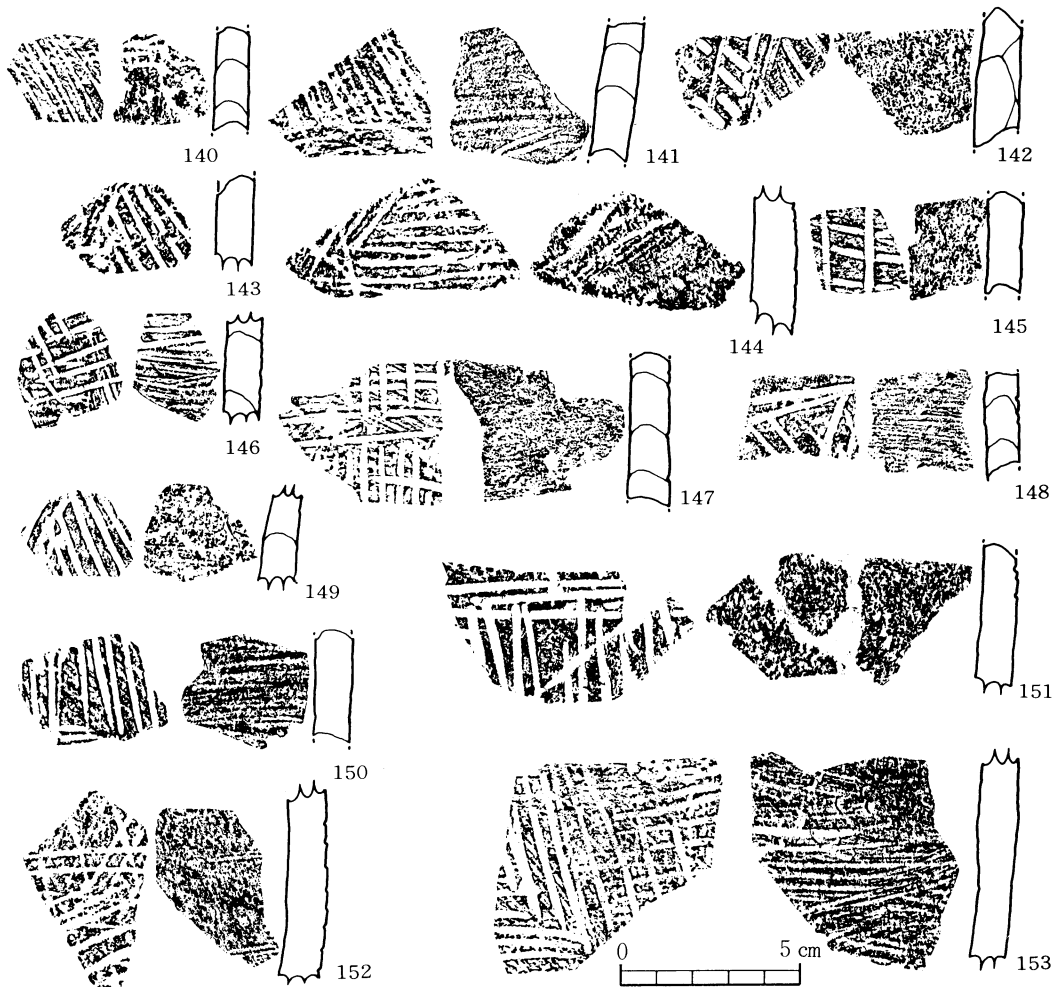
る。129のナデ調整は入念で、縦沈線が後に描かれ、131も同じある。132、133の沈線が最も広く5mm程あり、短沈線での構成である。134は極めて浅く、逆に135、136、137は深く描かれている。136の短沈線はヘラ状工具の押し付けで粘土の溜が残される。137は3層と4層の接合で、沈線の最後を押し付けるものとそのまま引き上げる手法が見られる。138は両面共に条痕が著しく、沈線も深い。139も明瞭な文様を示す。140・141は斜位の鋭い沈線を持つものでよく類似している。内面は条痕が残り上位に斜の短沈線がつけられる。144も同様の特長を持つ。142は斜沈線を埋めるように連続して短沈線を描き、145・146・147では格子目状に施文することで表わしている。146の内面の条痕は著しく、147では外面に残される。150・153も著しい条痕が残される。151は縦線が後につけられる。119の調整・色調等が類似している。

154以降は、主として胴部下位・底部近くの資料である。全体として文様が減少する傾向がうかがえる。154は粘土ひもの接着部で剥脱した資料で、上下面とも明瞭に観察でき、さらに中間にも存在する。161の内面の条痕は著しく、163はやや大きめの条痕が残される。166・168等では入念なナデ仕上げがみられる。165はかなり底部に近づく感がある。170表面は斜位・内面は横位の条痕、171・172のナデ調整は入念に行われる。173は横位の細沈線、底部に近い174では底面を取り廻くようにやや幅広の円文が描かれる。176の下半部は、接合部が剥脱したもので、円形に脱落している。179は鋭い細沈線文を集中したもので接地面の可能性が高いもので、接合面が円形に剥離している。178は4層の接合である。181は器面の剥脱が激しい。

182は3層下位での接合で、復元最大径は25cm程である。施文部ではナデ調整がなされ、下部では条痕がそのまま残され、内面は入念にナデられる。施文は胴部上半で終り、浅めの沈線



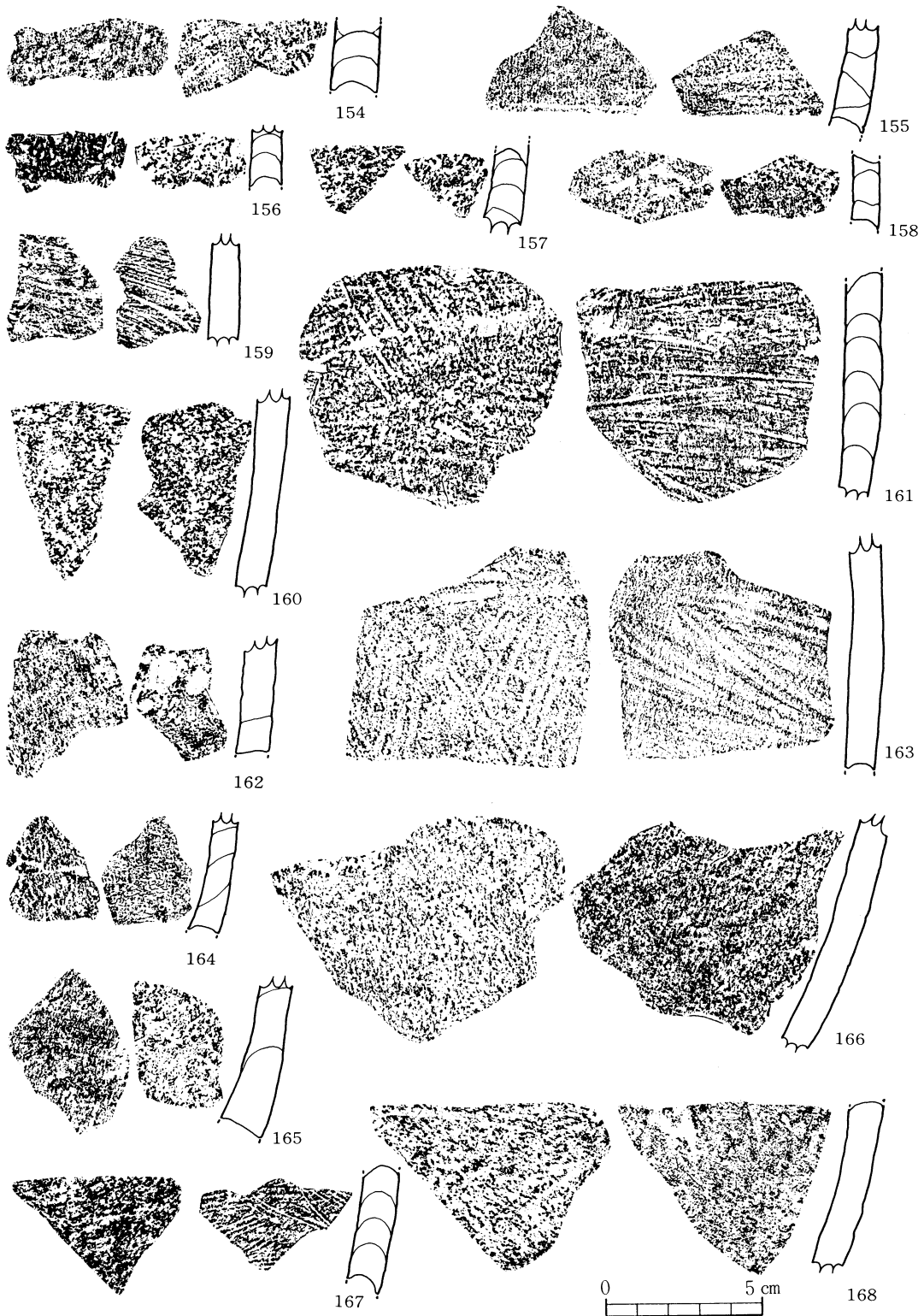
第 22 图 I 类铜部片



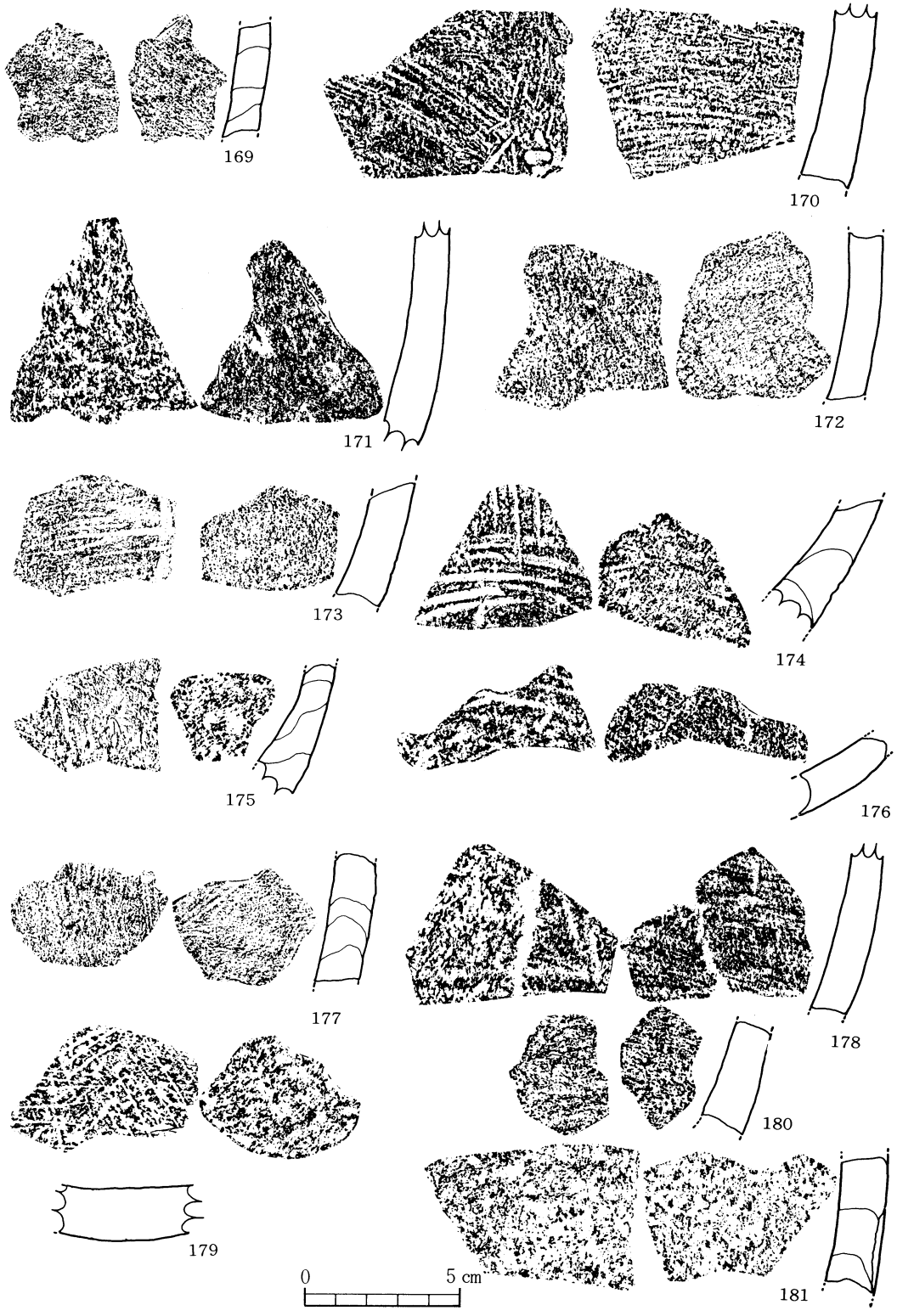
第 23 図 I 類胴部片

が不規則に描かれる。183は35.7cmの胴部径が測られ大型のもので、両面とも入念にナデられ外面は光沢がある。5～6cm程の短沈線で幾何学文が描かれる。184は底部近くの破片で推定復元では丸底をなす。施文は底部近くまで描かれる。188・189の内面の条痕は著しいが整形具は異っている。189の器壁は薄く条痕は両面共に荒い。接合は一括して3層の出土である。

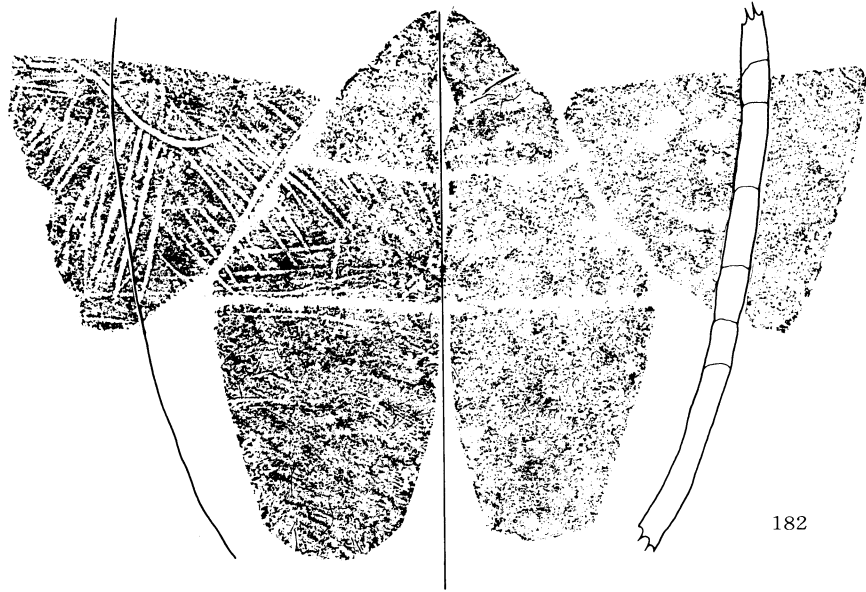
185・186は184との同一個体の可能性もある。191は底部で接地面近くまで細沈線が描かれる。193も丸底の底部で沈線文が横走している。195の内面調整は縦位の条痕である。197では底部の接合がよく観察できる。それによると底面より1～1.5cm程の粘土ひもを積み上げる手法である。199表面はナデ調整・外面は横と斜位の条痕が残される。200は全て4層の接合品で丸底である。接地面の円盤部で剥落し、成形手法を見ることができる。施文は、接地面近くまで描かれ、接地面を取り廻く二本の円文とそれに集まる縦位の沈線文で構成される。接地面の厚さは現状で2.5cm推定値では2.8cm程と思われる。



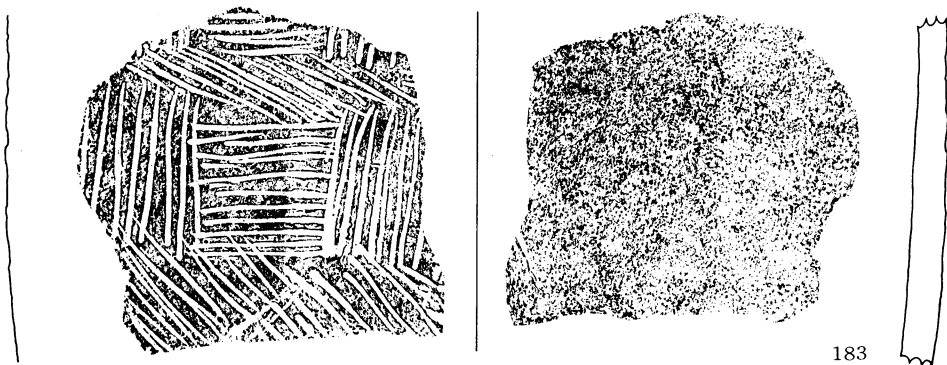
第 24 图 II 类铜部片



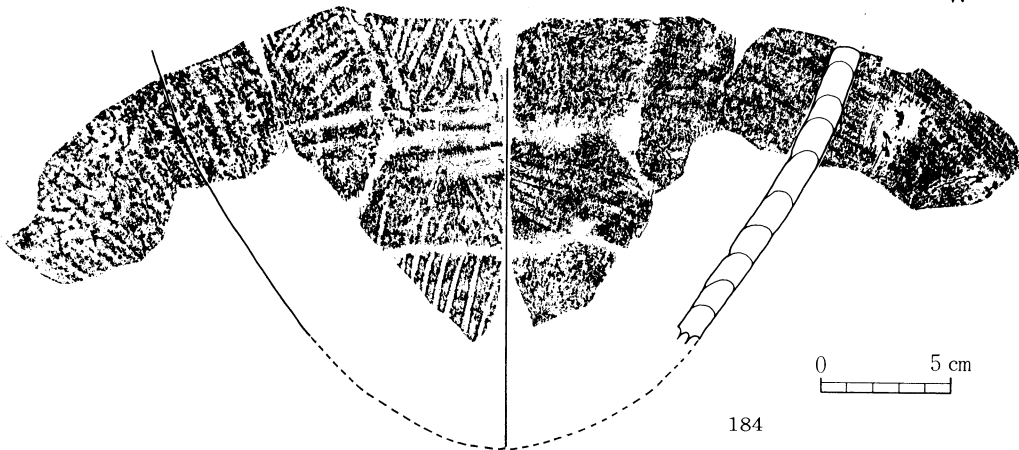
第 25 图 I · II 类铜部片



182



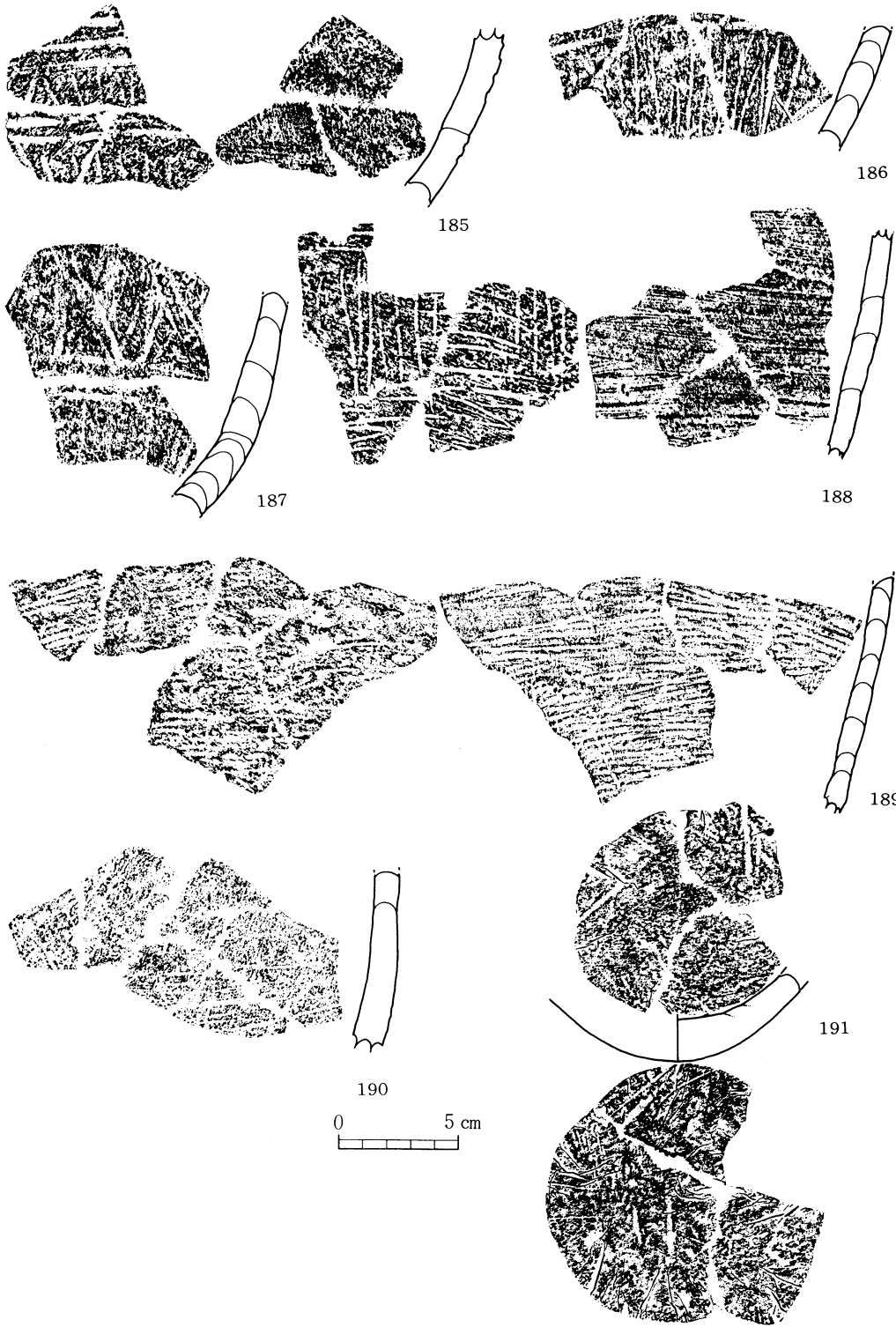
183



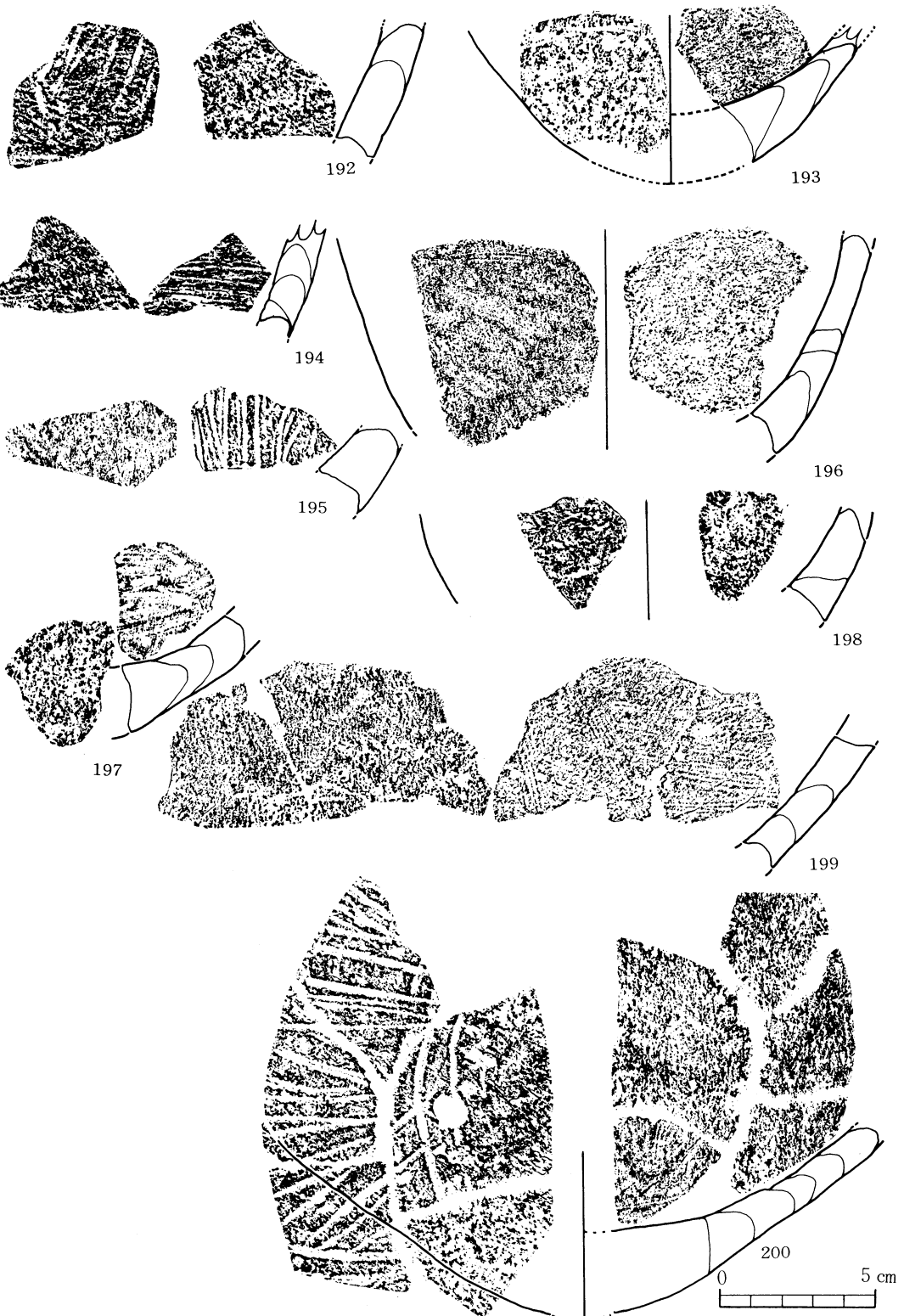
184

0 5 cm

第 26 图 I · II 類胴部片



第 27 圖 I 類銅部片



第 28 图 I · II 类胴, 底部片

挿図番号	遺物番号	出土区	層位
12	23	C-2	3下
〃	24	B-1	3下
〃	25	C-1	3下
〃	26	E-1	4
〃	27	B-2	3下
〃	28	E-2	4
〃	29	?	
〃	30	E-2	4
〃	31	E-2	4
〃	32	D-1	4
〃	33	F-3	4
13	34	F-4	3
〃	35	D-1	3
〃	36	E-3	4
〃	37	D-1	4
〃	38	C-1	3
〃	39	?	
〃	40	F-2	4
〃	41	C-2	3下
〃	42	C-2	3下
〃	43	C-2	3下
〃	44	F-3	4
14	45	B-1	3下
〃	46	B-1	3下
〃	47	B-1	3下
〃	48	C-2	3
〃	49	C-2	3
15	50	C-2	3
16	51	D-2	4
〃	52	C-2	3下
〃	53	F-2	4
〃	54	C-1	2
〃	55	E-2	4
〃	56	C-2	2
〃	57	C-1	3
〃	58	E-2	4
〃	59	E-2	4
〃	60	F-4	4
〃	61	C-2	2
17	62	C-2	3下
〃	63	E-2	4
〃	64	E-6	3
〃	65	E-3	4
〃	66	?	
〃	67	F-2	4

挿図番号	遺物番号	出土区	層位
17	68	D-2	2
〃	69	E-2	4
〃	70	C-2	4
〃	71	F-2	4
〃	72	?	?
〃	73	?	?
〃	74	C-3	4
〃	75	C-2	3下
〃	76	F-3	3
〃	77	?	?
〃	78	C-3	3
〃	79	C-1	3下
〃	80	D-1	?
〃	81	C-2	3下
〃	82	?	?
〃	83	F-3	4
18	84	F-6	4
〃	85	?	?
〃	86	E-2	3下
〃	87	D-2	4
〃	88	?	?
〃	89	C-2	3下
〃	90	E-2	4
〃	91	B-1	3
〃	92	C-2	3
〃	93	?	?
〃	94	C-2	3下
〃	95	C-2	3
〃	96	C-1	3下
〃	97	E-2	4
19	98	D-2	4
〃	99	B-1	3下
20	100	E-3	4
〃	101	B-5	3
〃	102	F-2	4
〃	103	E-2	4
〃	104	E-2	4
〃	105	E-2	4
〃	106	B-1	4
〃	107	D-2	4
〃	108	E-3	4
〃	109	E-3	4
〃	110	F-2	4
〃	111	D-2	4
〃	112	B-2	3

挿図番号	遺物番号	出土区	層位
20	113	F-4	3下
21	114	E-3	4
〃	115	E-4	3下
〃	116	F-2	3下
〃	117	F-4	3下
〃	118	E-2	4
22	119	C-8	4
〃	120	?	?
〃	121	F-3	4
〃	122	D-2	3下
〃	123	E-2	4
〃	124	C-2	3下
〃	125	D-1	4
〃	126	E-2	4
〃	127	C-1	3下
〃	128	B-1	?
〃	129	F-2	4
〃	130	F-2	4
〃	131	D-1	4
〃	132	B-2	3下
〃	133	B-2	3下
〃	134	D-1	3下
〃	135	B-3	3下
〃	136	B-2	3
〃	137	D-2	3
〃	138	E-2	4
〃	139	D-3	3下
23	140	D-1	3下
〃	141	D-1	3下
〃	142	F-4	3下
〃	143	C-3	3下
〃	144	E-2	4
〃	145	D-2	4
〃	146	E-1	4
〃	147	D-1	?
〃	148	表探	?
〃	149	?	?
〃	150	F-1	4
〃	151	F-5	4
〃	152	E-1	4
〃	153	E-3	4
24	154	F-6	3下
〃	155	?	?
〃	156	E-2	4

挿図番号	遺物番号	出土区	層位
24	157	B-1	3下
〃	158	?	?
〃	159	E-4	3下
〃	160	B-2	3下
〃	161	E-2	3下
〃	162	B-3	2
〃	163	D-2	4上
〃	164	E-4	2
〃	165	B-1	3
〃	166	C-2	3
〃	167	F-5	3下
〃	168	B-1	3下
25	169	F-2	4
〃	170	D-1	4
〃	171	B-1	3
〃	172	D-1	2
〃	173	D-2	4上
〃	174	E-2	4
〃	175	D-2	4上
〃	176	?	?
〃	177	C-2	3
〃	178	E-2	4
〃	179	E-3	4
〃	180	D-2	4
〃	181	D-2	3下
26	182	B-1	3下
〃	183	E-2	4
〃	184	F-2	4
27	185	E-2	4
〃	186	F-2	4
〃	187	E-2	4
〃	188	C-2	4
〃	189	C-2	3
〃	190	C-1	3下
〃	191	D-2	4
28	192	E-2	4
〃	193	E-2	4
〃	194	E-2	4
〃	195	E-3	4
〃	196	B-1	4
〃	197	E-3	3
〃	198	E-3	4下
〃	199	C-2	3下
〃	200	E-2	4

表1 下層出土土器一覽表

2) 上層出土の土器

主に2・3層に出土する土器で、調査の結果3層の中位から上部へかけてが中心的包含層であると捉えられる。最も多量に出土した面縄前庭式土器をⅢ類、Ⅲ類と比較し突帯幅が広くなった一群をⅥ類、口唇部にヘラ刻みをもつ一群をⅤ類、面縄東洞式土器をⅥ類、嘉徳式土器をⅦ類、松山式土器をⅧ類、押し引き文や肥厚した口縁部を持つもので型式名称の不明な全てをⅨ類として取り扱っている。

Ⅲ類、細分の決め手となるだけの資料がなく羅列した現状である。細分方法として、例えば口唇端部の突帯の付せれる位置の違い、器形の差異、施文具の違い、整形具の違いなどによる分類も考えられる。しかし、今回の資料ではこれらを充分組み合わせるだけの内容は提示し得ない。そこで、第1に器形について捉え、次に、特に突帯に刻まれる施文具の違いを見ることとした。

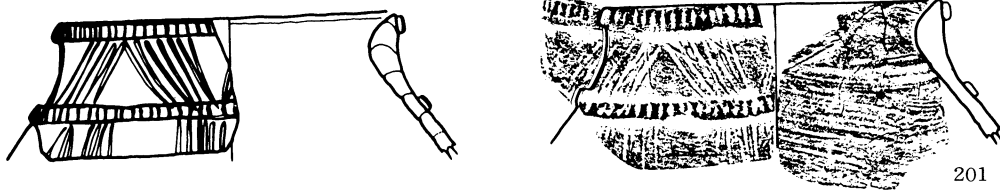
〈器形による分類〉

Ⅲa類 (201・202・217・304) 推定復元できた201・202が代表的なもので、面縄前庭式土器の特長の一つである「…口縁部は外反し、頸部がしまり…」⁽¹⁾の器形が著しく表わされないものである。口縁部から頸部まではゆるやかな外反を呈し口縁部の屈曲部が口縁部上位に位置している。断面観察では、屈曲部が大きく肥厚(舌状)する整形が認められる。

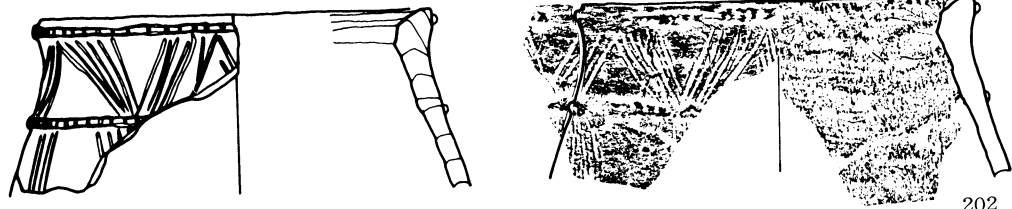
201上位の突帯は口唇部に貼り付け連続して縦方向の刻み目をつける。この刻み目は、貝殻腹縁部の放射筋を用いた可能性もある。施文順位は、文様帯のナデ調整、二本の突帯の貼付け、頸部の鋸歯状沈線、胴部沈線である。内面は横位の条痕が著しい。202砂粒を多く含む胎土で器形は201と同様であるが、突帯は小さく微隆突帯となり、貼付する位置も口唇部より以下になる。刻みの工具は半截竹管状のもので、施文具は単篋である。施文帯はナデ調整。

Ⅲb類 (205) 数少ない土器で、他に強いてあげれば326くらいのものである。頸部が他と比べて極端に締る特長があり、口縁部も大きく外反する。復元口径は20.6cm。口唇部は丸味を持ち、上位の突帯はやや下位に貼付けられる。刻み目工具は叉状のもので、上位突帯では中央部に、下位突帯では中央部より上位につけられる。突帯間はナデ調整で、胴部は条痕が残され施文具は単篋である。頸部の沈線は上から下へ深く描かれ、その本数も不規則であるが、胴部の沈線は全て縦方向で浅く引かれる。また、胴部の1単位6本沈線の中に1と2本目(右より)の間に途中より始まる7本目の沈線が認められる。砂粒の多い胎土を用い、内面は条痕が残される。326は無文で下位の突帯は貼付けられていない。外面は入念なナデ調整。

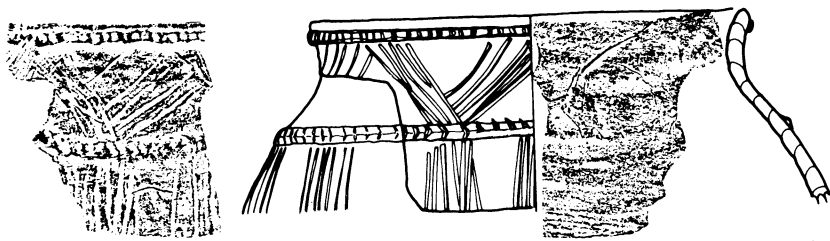
Ⅲc類 (204) 頸部から直線的に立ちあがりながら外反するもので、胴部にある最大径と口径が大きく異なる器形である。断面観察では、内面頸部で大きく屈曲していることが認められ稜線を持つ状態である。上位の突帯は、口唇部より上位にはみ出し刻みは叉状の工具と思われ、下位の突帯も同様である。文様帯全域にナデ調整を行なっているが、頸部は一部条痕が残される。施文具は単篋で、頸部の鋸歯文、胴部の縦沈線とも10本以上が一単位である。内面は条痕が著しく、胎土には多量の砂粒を含んでいる。この器形に類したものに294、299等



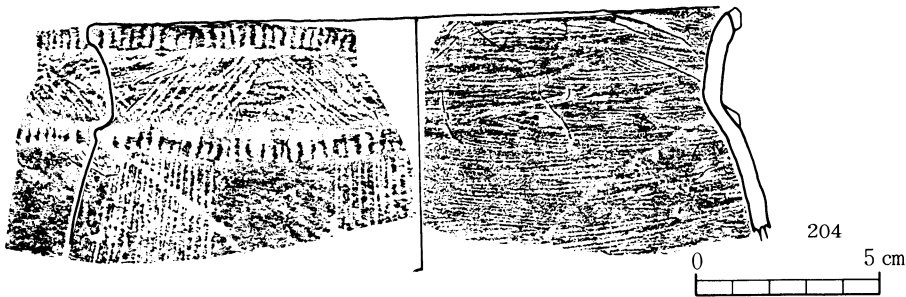
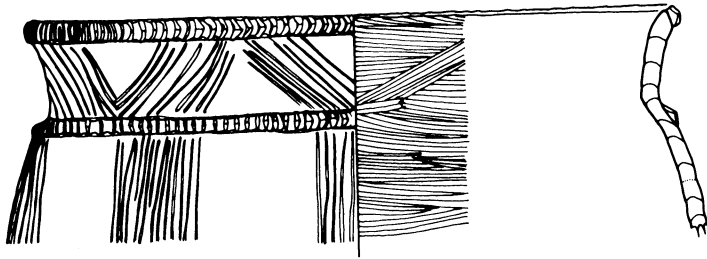
201



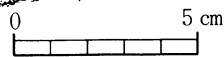
202



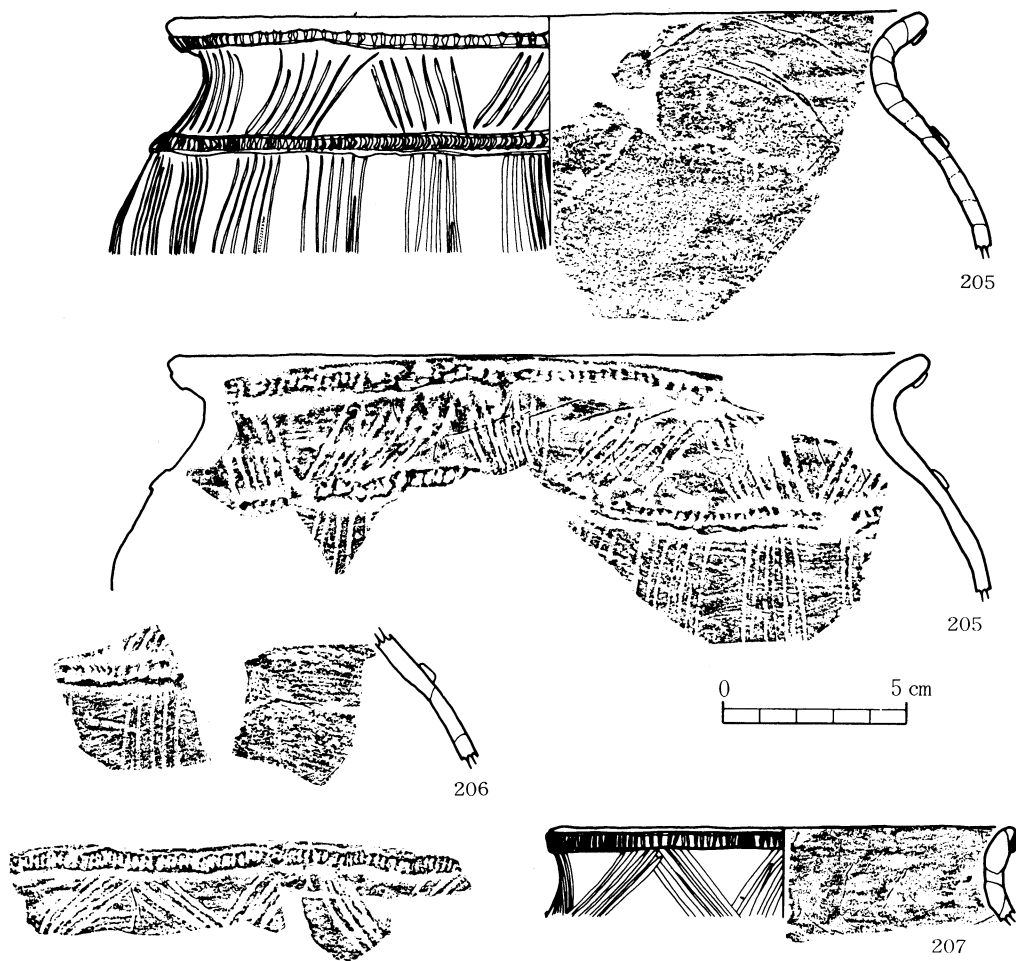
203



204



第 29 图 III 类口缘部片



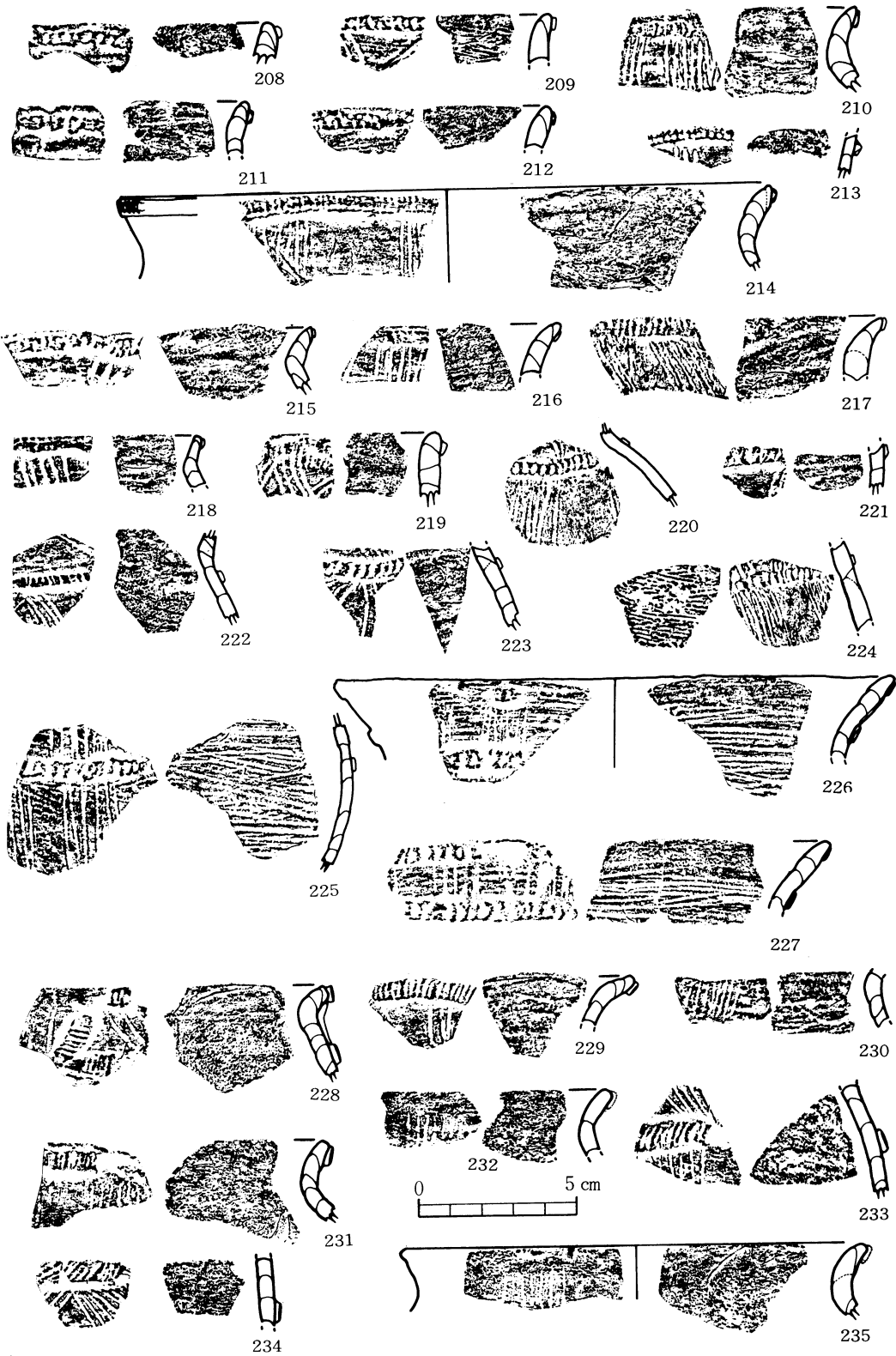
第 30 図 III類口縁，胴部片

があるが施文方法などが異なる。

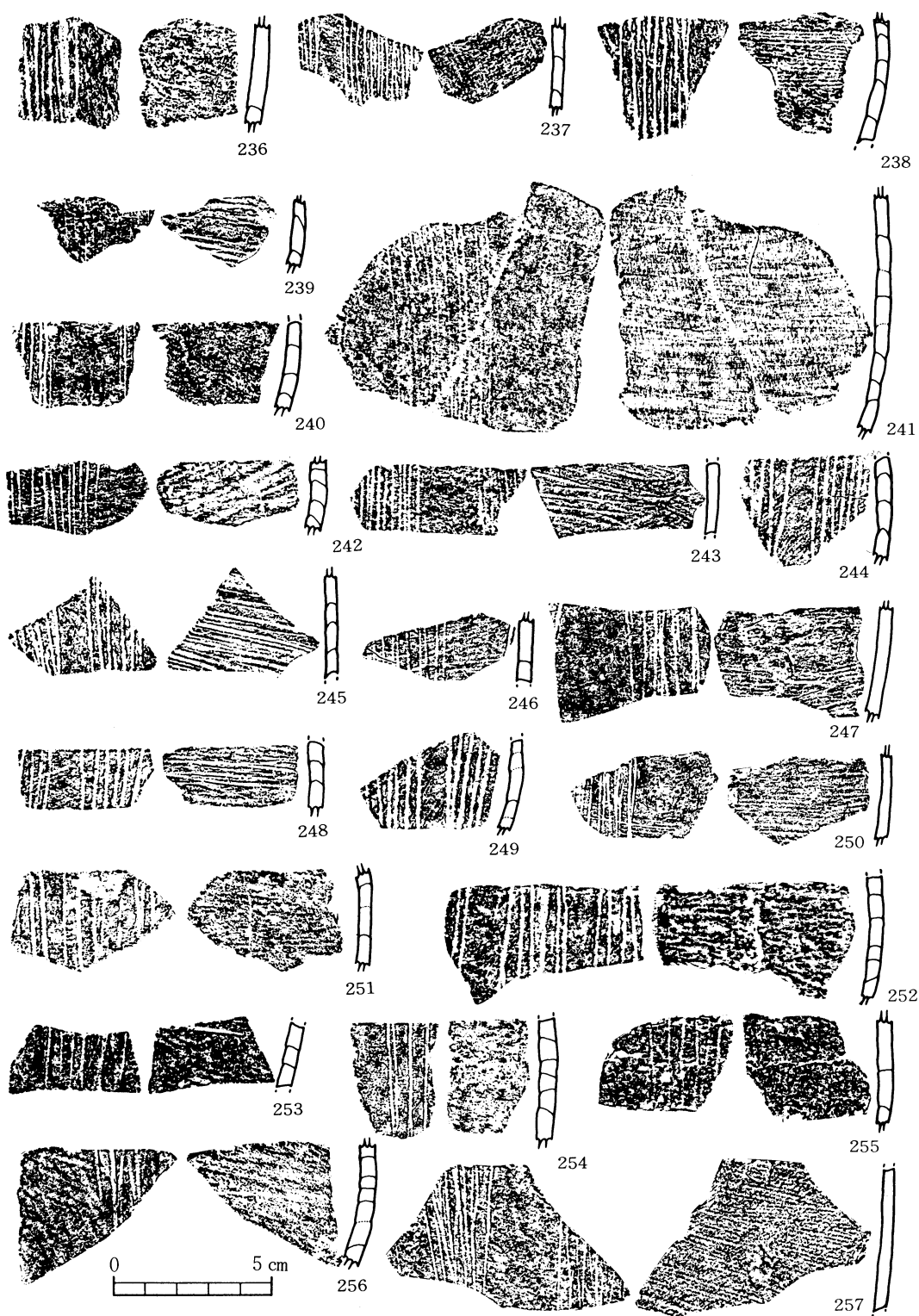
Ⅲd 類 (226・227) 同一個体と思われる資料で、口縁部が大きく外反し屈曲部の起点がⅢb 類よりも下にあると思われ、そのため一見ラッパ状を呈している。頸部から口唇部までが直線的で短く、突帯間も短い(1.3cm程)。上位の突帯は口縁部よりやや下位に貼付けられ、刻み、貝殻腹縁部を用いたと思われる。内面の口唇附近を除いて他は内外共に条痕が著しい。頸部の沈線は全て縦位(鋸歯ではない)である。

Ⅲe 類 (203・207・214) 本遺跡の主流を占め、他のほとんどが含まれる。これまでのa～d 類までを全て取り入れた器形のもので、頸部から口縁部へかけて緩やかに外反する器形で、最も一般的に知られている器形でもある。

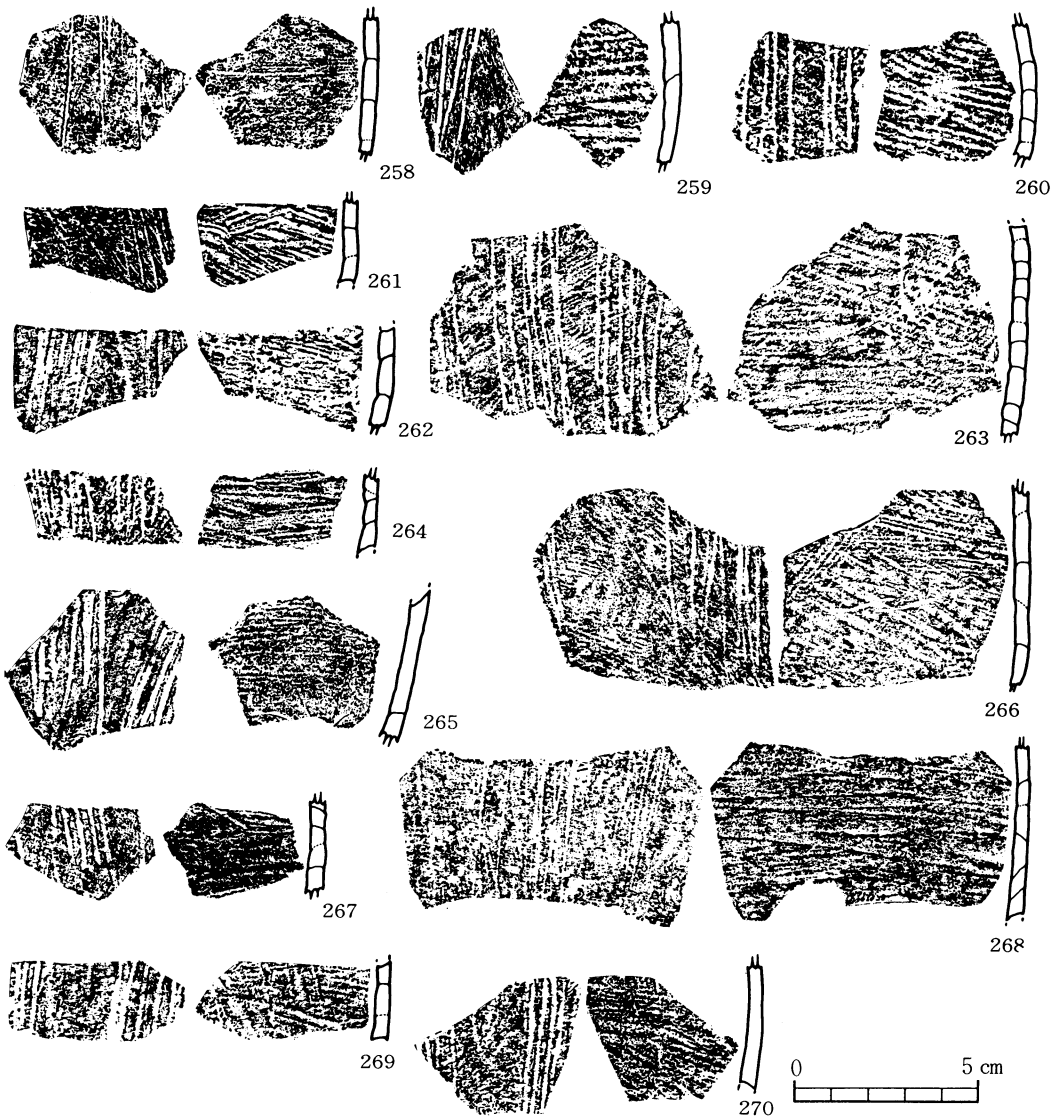
203は復元口径12cm、上位の突帯は下位に貼付けられ、下位の突帯は貼付け後に突帯の上下をナデ、その結果三角形の断面形となっている。内外共によくナデられているが内面では粘土の接着面がそのまま残されている。刻みは叉状の工具と思われ、施文具は単篋である。207焼



第 31 圖 III類口緣，胴部片



第 32 図 III類銅部片

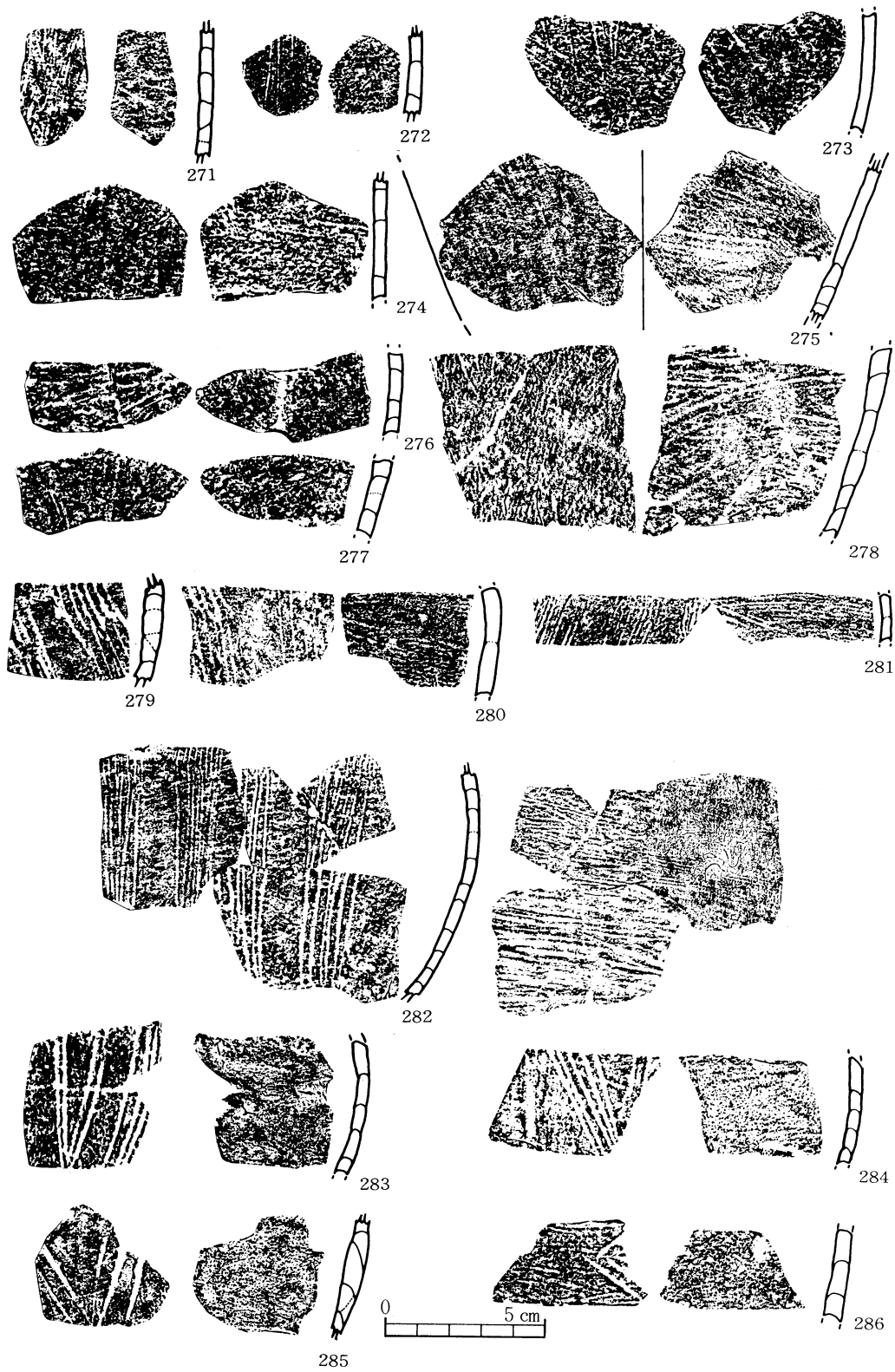


第 33 図 III類銅部片

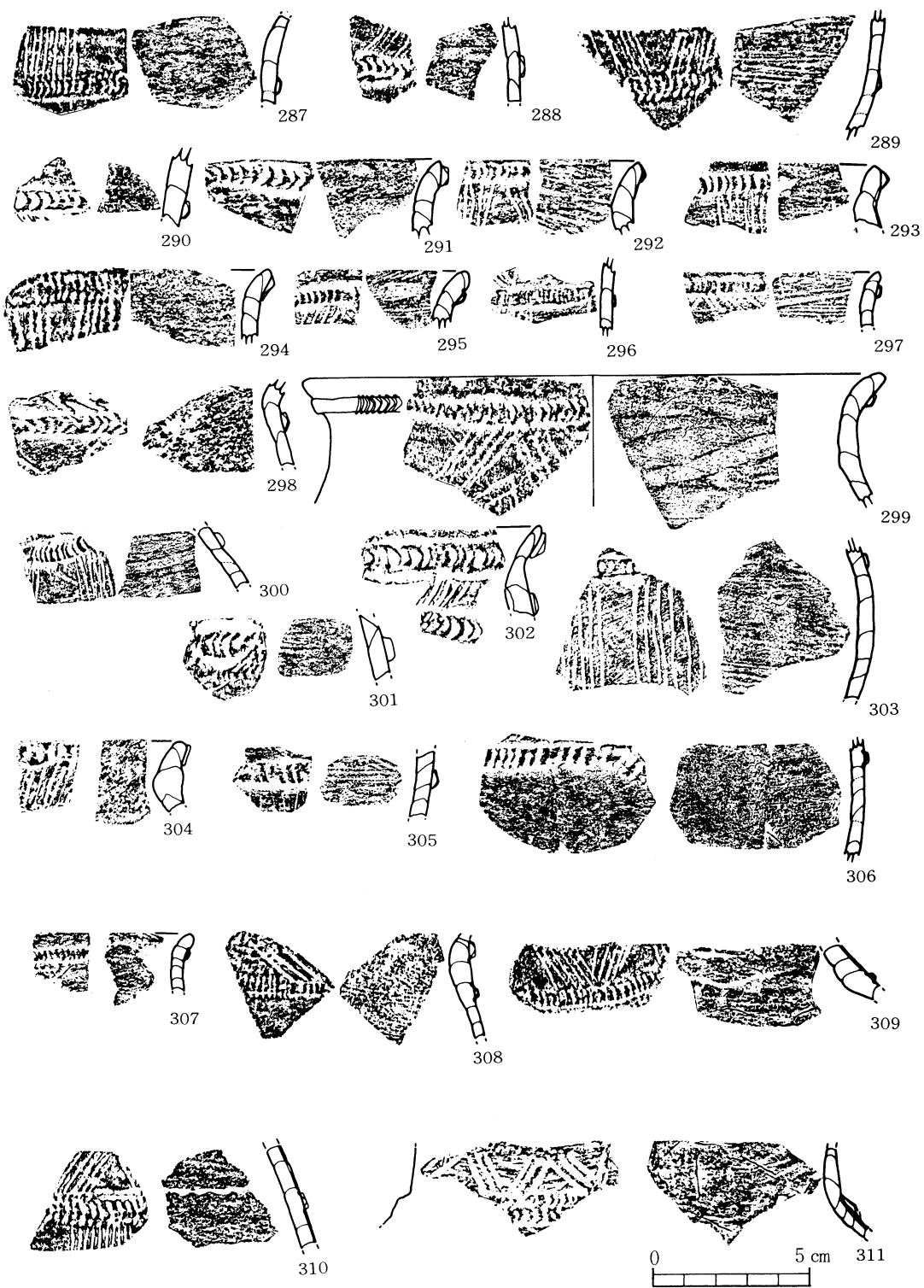
成が極めて硬質で、赤褐色のを呈している。上位の突帯はやや下って貼付けられ、ヘラ状工具で刻まれ、施文は単篋である。外面では条痕が残り、内面ではナデ消される。214復元口径は21cm程で、突帯は口径端部附近に貼付けられ、叉状の工具で刻まれる。内外共に入念なナデ調整である。

次に突帯文に刻まれる特長について列記してみる。

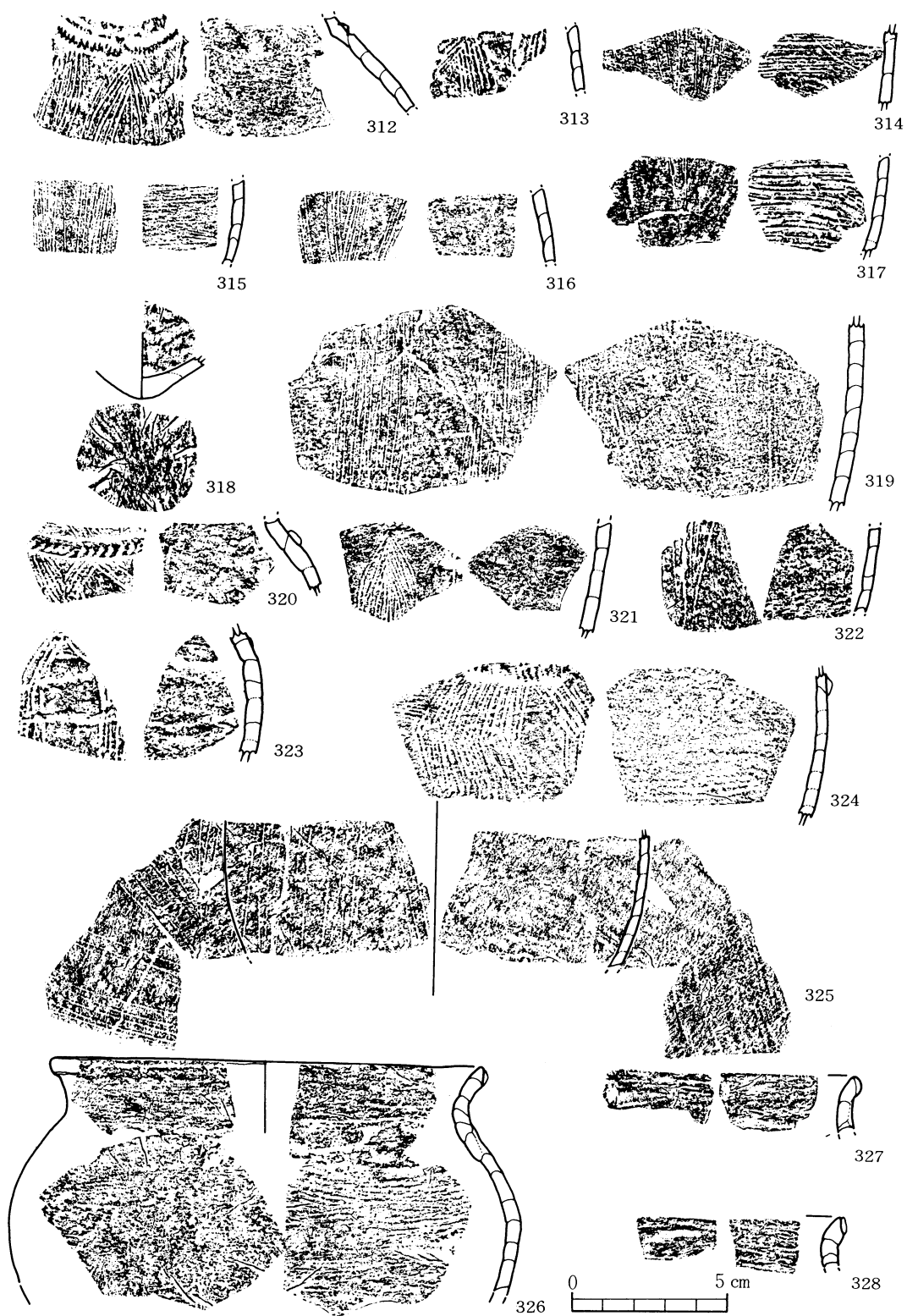
叉状（208～224）叉状の刺突具で刻まれたもので、さらに、突帯の小さいものである。208・213・214等は突帯の中央部につけられ、209・224では下位に刻まれ、下位に刺突連点として残される。217では突帯の上下位にはみ出しいる。210・214等では鋸歯文を構成せず直線だけが見られ、217では斜位につけられる。



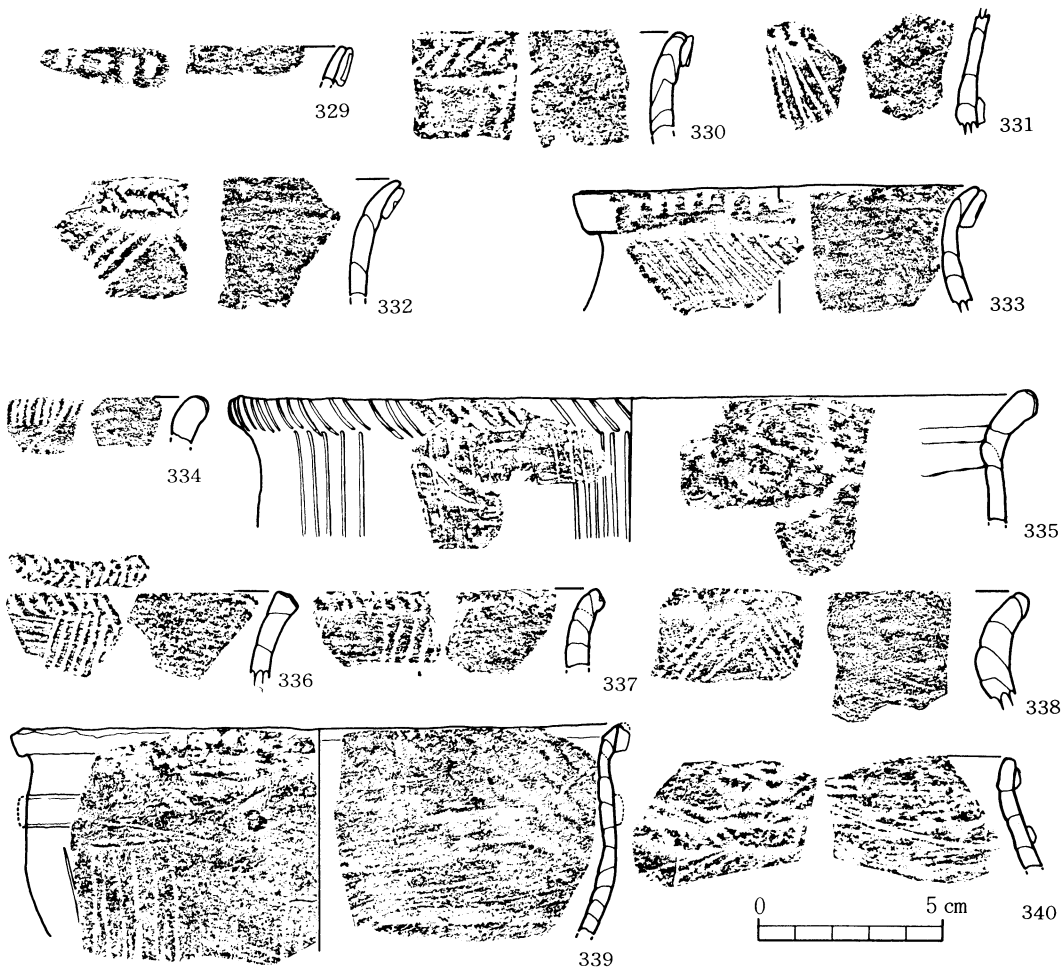
第 34 图 Ⅲ類銅部片



第 35 图 Ⅲ類胴部片



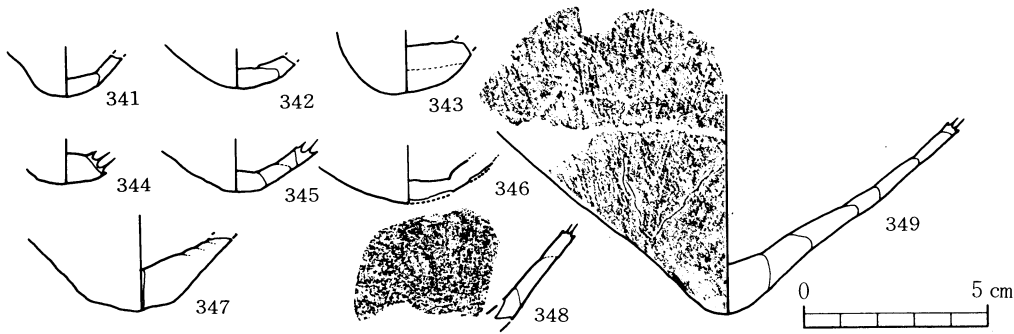
第 36 图 III类口缘铜片



第 37 図 VI・V類口縁胴部片

叉状(大)(289・294・295・297～299・305～311) 叉状工具で刻むことは前群と同様であるが、突帯が大きくなり明瞭に残される。295・307・308では突帯に対し垂直に近い角度で刻み、特に308は顕著で深く刻まれている。289・310では、深く刻まれ突帯の上下が刺突連点風な効果を出している。また、310の胴部の沈線も叉状施文具の可能性もある。309では上位のみが刺突連点風である。299では左右の切り込みの異なる叉状工具を用い、一見半截竹管の様相もある。裏面の整形に特長があり、拓本で取るとヘラケズリの様相を呈している。頸部の文様構成も特異で、鋸歯文が重なり合った状況である。305・306は両端がやや太めの叉状工具を用い、306の胴部は入念にナデられている。311は唯一の資料で、横位に平行して用いている。頸部の沈線も太く、黒灰色の硬質の土器である。

ヘラ(228・229・231・233・234) ヘラ状工具で連続して刻み込んだ一群で、総じて突帯は広くて大きい。228は上位と下位の突帯を結ぶ縦位の突帯がつけられる。233の突帯は大きく台形を呈し、ヘラ状工具で斜めに刻みを入れている。230・232・235は突帯がはずれ



第 38 図 III類底部

れているが同種のものと思われる。

(287・288・290～293・298・300～302) 半截竹管状の工具で刻むもので、全体として半月形ないしU字状の刻み目を呈している。287は突帯上位にその他は全て中央部に刻まれる。288・291では左方向へ刻み、290・293・301・302では右方向へ刻んでいる。

次に、特長的なもの、同一個体の可能性の高いものについて列挙してみる。

312～316は赤褐色を呈した光沢のあるもので、器壁も極単に薄い(3mm)。312は2号集石遺構からの出土で、下位の突帯は又状工具で刻まれ突帯の上下に刺点連点がつけられる。表裏共に入念にナデ消され、突帯を起点とし「人」字状の細沈線文が描かれ、また、上位の突帯と結ぶ縦位の突帯も見られる。313・316等も同様の文様構成がみられ、同様に器壁も薄い。いずれの資料とも内外共に入念にナデ消され、318の底部破片を含めて同一個体の可能性が高い。

325は灰褐色で薄手・硬質のもので、内外は共に入念なナデ調整が見られ、全域に細沈線が施文され、細沈線の一つは、これまでとは逆に胴中央部で結ばれる。この種のものは、283・284・285の3点でも見られる。283の文様構成も325と同様で、胴下半部まで描かれる平行沈線文間に施文される。施文具は、二叉状のものらしく平行線である。また、これらの3点で共通していることは、沈線が他のものと比べてやや広く深く描かれている特長が認められる。

324は1点の特長で、鋸歯文を縦位に連ね幣状の文様を構成している。突帯の刻みは又状の工具である。

234・228・229も同一個体の可能性が高いと思われるもので、器形はIIIe類、刻み工具はヘラを用いている。色調は灰黒色で、胎土に多量の砂粒を含みザラザラした器面をなした硬質の一群である。裏面上位ではヘラナデ状の調整を感じさせる。

230～233・235も同一個体と思われ、器形はIIIe類、刻み工具はヘラを用いている。232と233では上位の突帯が剥脱している。これらの破片も灰黒色で多量の砂粒んだ硬質なものである。

225は前記した226・227と同一個体で、裏面の条痕は同様に著しい。

281と282も同一個体の可能性が高い。胴部の沈線文帯を描く時に、途中で方向を少し変え

たもので、胴部上位で一度施文が中断している。裏面では条痕が著しい。

326～328器形はⅢe類で、無文の土器である。復元口径は14.2cm程で、表面はよくナデられているが風化が激しい、裏は上位ではナデられ下位では条痕が残される。特に裏面には粘土ひもの接合部がそのまま残されている。上位（口縁部）の突帯は微少ではあるが貼付けられている。

258～278は胴部下半から底部附近にかけての破片で、沈線文の末端等が観察できる。

底部（318・341～349）

318は312等と同一個体の可能性の高いもので、尖底に近くやや乳房状の丸味を持っている。ヘラないしは条痕の縦位の整形が見られ、最終的にはナデ消しが行われている。内面はヘラ状のものによる整形である。341～343も同様と言える。344は最終のナデ仕上げの段階で接地面がやや平に変形したものと思われる。345も344と同様の痕跡が認められ、丸くならず平坦面が造り出されている。346は表面の剝脱が激しが、丸底の様相を呈している。347も344と同様である。349乳房状の突起を持ち、縦位の調整時に意識に突起を設けている。

Ⅳ類（329～333）Ⅲ類土器と比較し、突帯が極単に広がる一群で、突帯以外には器形、文様構成での大きな違いは認められない。329・333は叉状の工具、330・332はヘラを用いて刻みを施している。

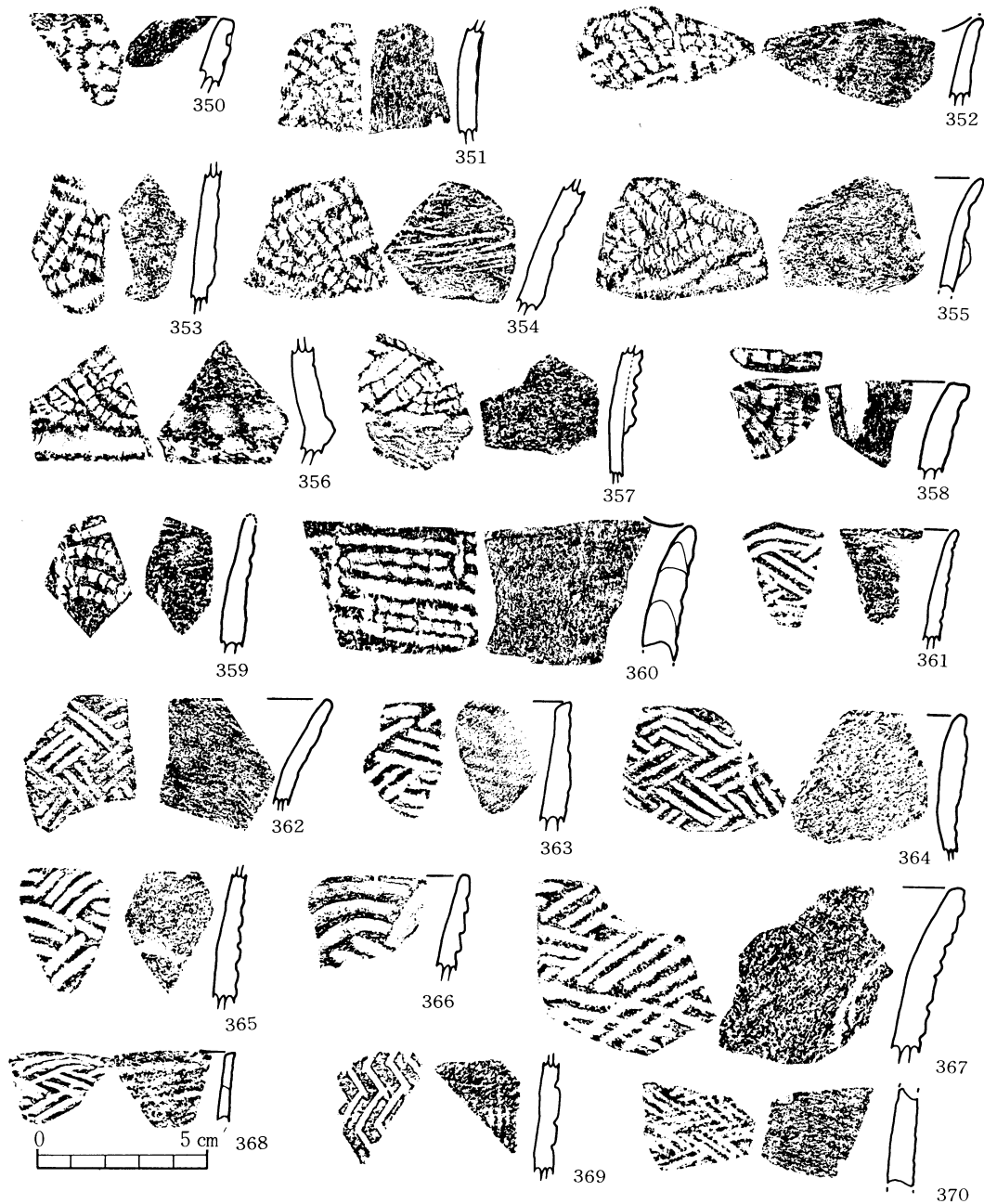
Ⅴ類（334～340）刻み工具はヘラを用い、口唇部への貼付けがないもの（334・335・336・337）とあるもの（338・339・340）に分けられる。340を除く他の器形は、頸部のくびれがなくなり鉢形の器形を呈している。口唇部上面と端部は全てヘラの刻みで、特に口唇上面への施文が目される。340は壺形的様相も感じられる。

Ⅵ類 文様帯を肥厚し、籠目状の文様を構成するもので、平口縁と山形口縁が認められる。ここでは、押し引きで施文したものをa、沈線で施文したものをbとして細分する。

Ⅵa類（350～360）全てヘラ状施文具による押し引き文である。350は先端部に丸味のあるヘラで左→右方向へ連続して押し引き、その押えも深い。359も同様であるが、ヘラ幅がやや狭い。351・355～357では、先端部が三角形に突ったヘラで施文し、355～357では特に深く押えられ、351では逆に浅い、358は、叉状の施文具を寝かせる状態で用い、特に口唇部にも一列の押し引きが見られる。本来はⅥ類とは異なる型式とも捉えられているが、押し引きの手法、土様構成等に極単な違いが認められないと判断し、同列に掲げた。これら押し引き文で籠目状の文様構成を持つのは、面縄東洞式土器の特長である。

Ⅵb類（362～367）基本的文様構成はa類と同様であるが、押し引きに代わり太めの沈線文が用いられている。362～365は三本が1単位で文様を構成し、367では変化が生じている。366はヘラを横位に用い、浅く広く描き押線文様な表現が見られる。

Ⅶ類 361・368・369・370の4点で、沈線が細く、また深く刻まれ明瞭な文様を描くこととなる。基本的にはⅥb類と文様構成では共通しているが、時間の推移を感じさせる。370は細沈線で描かれるが、文様構成が共通しているため同列とし、細分していない。



第 39 図 IV類・VII類土器

Ⅷ類 (376) 4隅が突出し、突出部は山形に隆起する深鉢形の松山式土器である。隆起部を中心にそれぞれ両側に1本ずつの計3本の縦位の沈線を描き、口唇部の中央にも1本ずつの沈線を描いている。表面は整形時の条痕がそのまま残される。表面は赤褐色・内面は黒褐色の仕上がりで多量の石英粒と微量の角閃石を含んでいる。

Ⅸ類 (371～375・377～387)

371内外共に条痕が残り、平行沈線文と下端部には刺突連点が深く施される。372山形口縁で、山形頂部が肥厚し、頂部中央に竹管文が1点施され、周辺は細線で刻まれる。373も山形



第 40 図 VIII・区類土器

口縁で、山形頂部に縦位の突帯をブリッジ状に貼付け、前面と口唇上面に押し引き風の連点を描き出している。374の外縁は浅い押し引き、口唇上面は鋭いヘラ状工具による細線の刻み、375の外縁は頂部を境にシンメトリーな沈線文、頂部と口唇上面は平坦とし頂部に竹管文、口唇上面に深めの沈線文を1条、それと交差する斜位の短線で構成する。377は上位の押し引き文帯を器面整形段階で意識的に作出し、帯状としている。押し引き文は二叉状の工具で押し引き、両面共に条痕は残される。

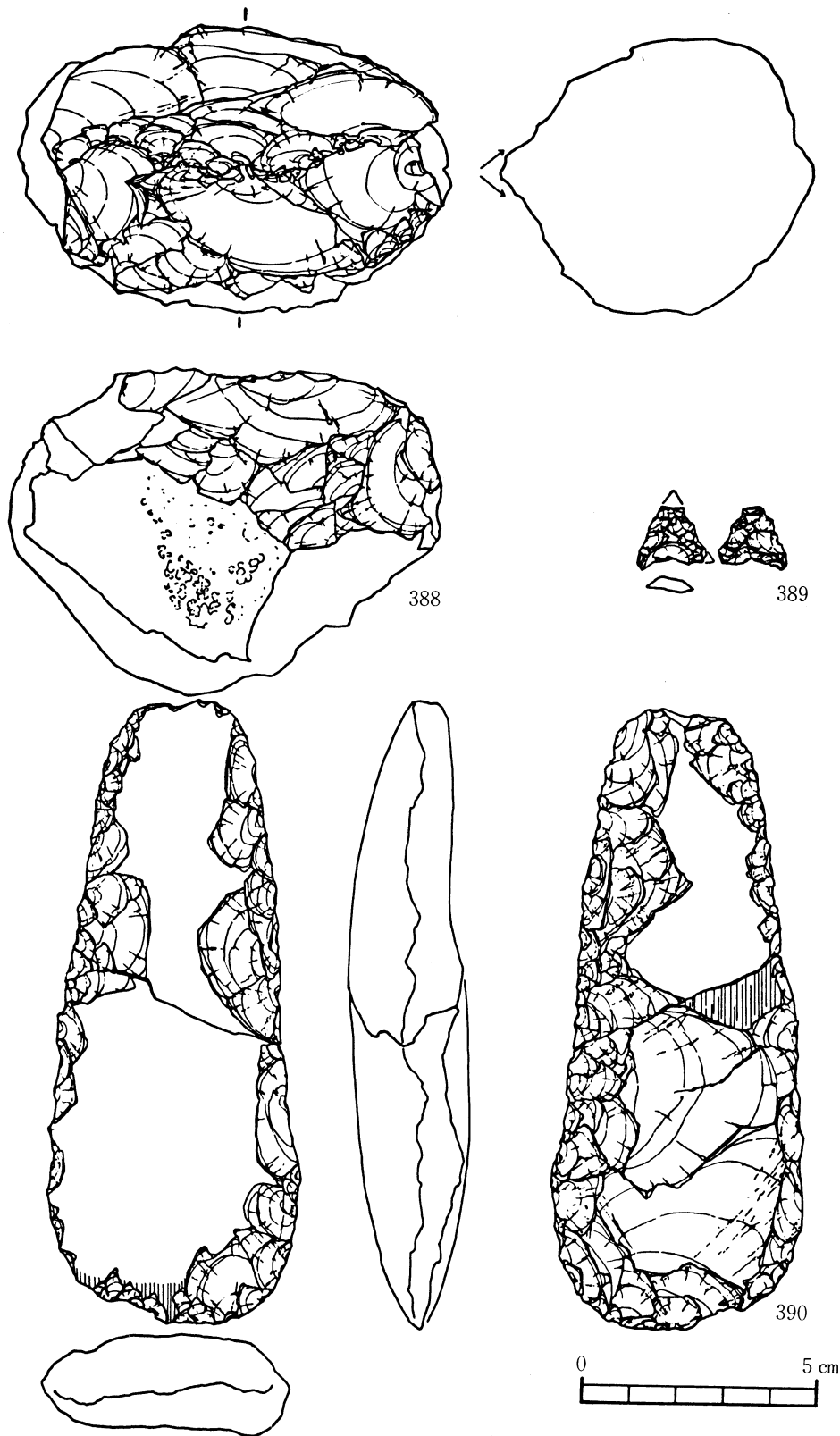
379から389は口唇端部に広めの粘土帯を貼りつけたもので、379は口唇上面に竹管文を連続して並べ、380では細線で刻まれる。384は復元口径7.8cm程で、口唇上面・突帯上・頸部に長めの短線を押しつけるように描き出したもので、口唇上面への施文意識が表わされている。387は肥厚口唇部に横方向の細沈線が特長である。

図号	遺物番号	出土区	層位	器形	刻具	石英	長石	雲母	角閃石
29	201	C-2	2	a	ヘラ	○	○	○	
♪	202	C-2	2	a	又④	○	○		
♪	203	C-2	2	e	又④	○	○	○	
♪	204	D-3	2	c	又④	○	○	○	○
30	205	C-2	2	b	又④	○	○		
♪	206	B-1	2		又④	○	○	○	
♪	207	C-2	3	e	ヘラ	○	○	○	
31	208	C-2	2	e	又④	○	○		
♪	209	C-2	2	e	又④	○	○	○	
♪	210	E-1	2	e	又④	○	○	○	
♪	211	D-2	4	e	又④	○	○		
♪	212	C-2	2	e	又④	○	○		
♪	213	C-2	2		又④	○			
♪	214	?		e	又④	○	○	○	
♪	215	C-2	2	e	又④	○	○	○	
♪	216	B-2	2	e	又④	○	○		
♪	217	D-3	3	e	又④	○	○	○	
♪	218	B-1	2		又④	○			
♪	219	C-2	2		又④	○	○		
♪	220	C-2	2		又④	○	○		
♪	221	B-1	3		又④	○			
♪	222	D-2	4		又④	○	○	○	
♪	223	D-2	4		又④	○	○		
♪	224	C-2	2		又④	○	○	○	
♪	225	E-3	3		貝	○	○	○	
♪	226	C-2	3	b	貝	○	○	○	
♪	227	C-3	3	b	貝	○	○	○	
♪	228	E-3	4	c	ヘラ	○	○	○	
♪	229	E-3	4	e	ヘラ	○	○	○	
♪	230	E-3	4		ヘラ	○	○	○	
♪	231	C-2	3	e	ヘラ	○	○	○	
♪	232	D-2	3	e	ヘラ	○	○	○	
♪	233	C-2	3		ヘラ	○	○	○	
♪	234	D-2	3		ヘラ	○	○	○	
♪	235	C-2	3	e	ヘラ	○	○	○	
32	236	C-2	3下			○	○	○	
♪	237	E-4	2			○	○		
♪	238	C-2	2			○	○		
♪	239	D-2	2			○	○	○	
♪	240	E-4	2			○	○		
♪	241	C-2	3			○	○	○	
♪	242	B-2	3			○	○		
♪	243	C-2	3			○	○		
♪	244	F-4	3			○	○	○	
♪	245	C-2	2			○	○		
♪	246	B-2	2			○	○	○	
♪	247	D-3	4			○	○		
♪	248	C-2	2			○	○	○	
♪	249	C-2	2			○	○	○	
♪	250	D-2	2			○	○		

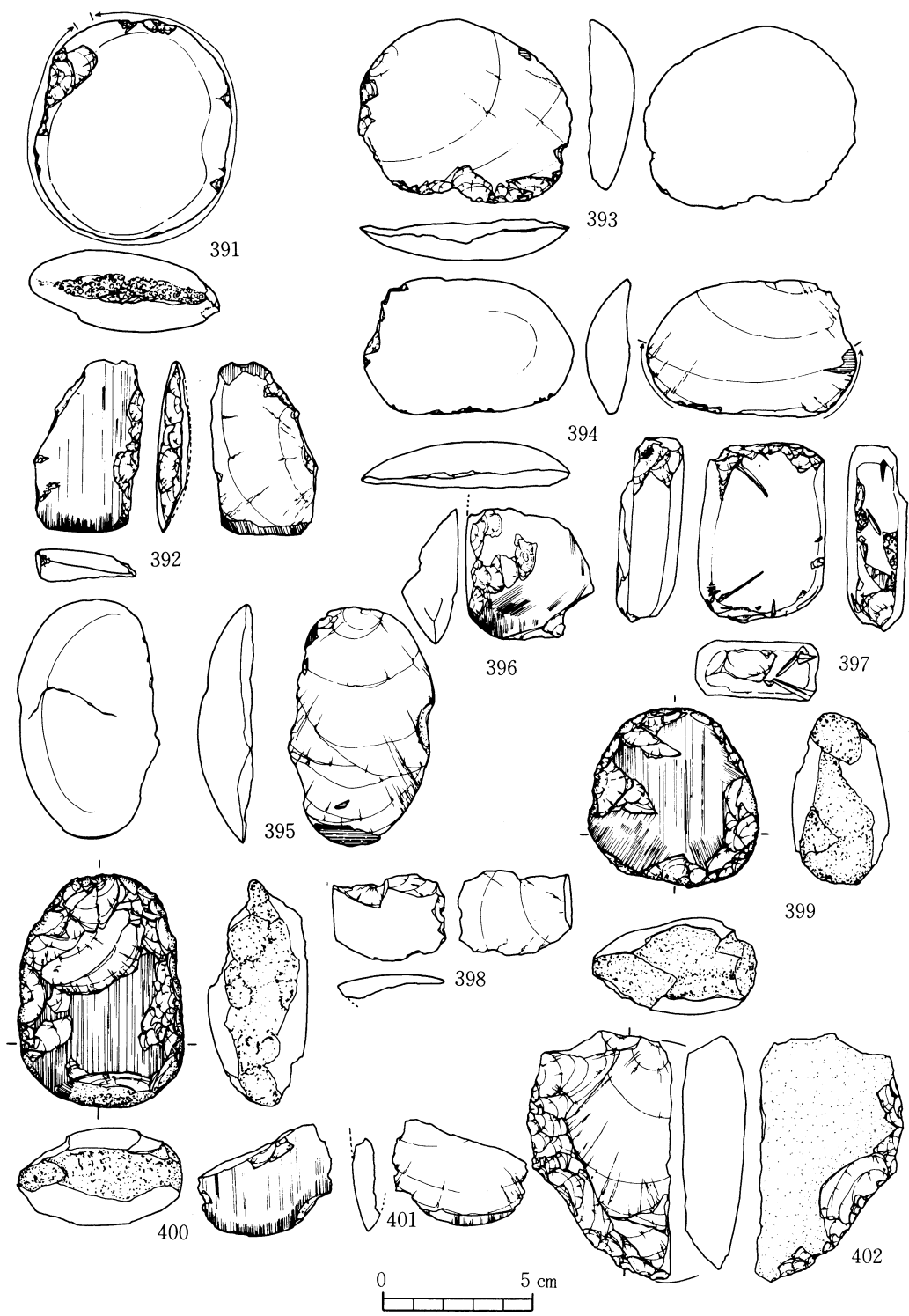
図号	遺物番号	出土区	層位	器形	刻具	石英	長石	雲母	角閃石
32	251	E-2	3			○	○	○	
♪	252	D-3	3			○	○	○	
♪	253	B-2	3			○	○		
♪	254	C-2	3			○	○	○	
♪	255	D-1	3			○	○	○	
♪	256	C-2	3			○	○	○	
♪	257	B-2	3			○	○		
33	258	C-2	3			○	○	○	
♪	259	B-2	3			○	○	○	
♪	260	C-2	3			○	○		
♪	261	B-2	3			○	○	○	
♪	262	B-1	3			○	○		
♪	263	D-3	3			○	○		
♪	264	D-3	3			○	○		
♪	265	C-2	2			○	○	○	
♪	266	B-2	3			○	○	○	
♪	267	D-3	3			○	○		
♪	268	C-2	3			○	○	○	
♪	269	B-1	2			○	○	○	
♪	270	C-2	2			○	○	○	
34	271	D-3	3			○	○		
♪	272	D-3	3			○	○		
♪	273	B-2	2			○	○	○	
♪	274	B-2	2			○	○	○	
♪	275	B-2	3			○	○	○	
♪	276	B-1	3			○	○	○	
♪	277	B-1	3			○	○	○	
♪	278	D-3	3			○	○		
♪	279	C-2	2			○	○		
♪	280	B-2	2			○	○		
♪	281	B-2	2			○	○	○	
♪	282	D-3	3			○	○	○	
♪	283	D-2	3			○	○	○	
♪	284	E-3	2			○	○		
♪	285	E-3	2			○	○	○	
♪	286	F-5	3			○	○	○	
35	287	C-3	2		半竹	○	○	○	
♪	288	D-3	2		半竹	○	○		
♪	289	B-1	3		又④	○	○		
♪	290	E-2	3		半竹	○	○		
♪	291	C-2	2	e	半竹	○	○		
♪	292	C-2	2	e	半竹	○	○	○	
♪	293	D-3	2	e	半竹	○	○		
♪	294	E-3	3	e	又④	○	○		
♪	295	C-2	3	e	又④	○	○		
♪	296	C-1	3	e	半竹	○	○		
♪	297	B-2	3	e	又④	○	○		
♪	298	?		e	半竹	○	○		
♪	299	C-2	3	e	又④	○	○		
♪	300	B-1	3		半竹	○	○		

図号	遺物番号	出土区	層位	器形	刻具	石英	長石	雲母	角閃石
♪	301	B-2	3		又④	○	○	○	
♪	302	B-2	3	e	又④	○	○	○	
♪	303	?			貝	○	○	○	○
♪	304	B-1	2	a	半竹	○	○	○	
♪	305	B-1	3		又④	○	○	○	
♪	306	C-2	2		又④	○	○	○	
♪	307	E-2	3	e	又④	○	○	○	
♪	308	D-3	3		又④	○	○		
♪	309	C-1	3		又④	○	○	○	
♪	310	B-1	3		又④	○	○		
♪	311	B-2	3		又④	○	○	○	
36	312	C-2	3		又④	○	○		
♪	313	C-2	3			○	○		
♪	314	C-2	3			○	○		
♪	315	C-2	3			○	○	○	
♪	316	C-2	3			○	○		
♪	317	C-2	3			○	○	○	
♪	318	C-2	3			○	○	○	
♪	319	C-2	3			○	○	○	
♪	320	D-3	3		貝	○	○		
♪	321	B-1	3			○	○		
♪	322	C-2	3			○	○		
♪	323	D-3	3			○	○		
♪	324	B-2	3			○	○		
♪	325	B-2	2			○	○	○	
♪	326	B-1	3	e		○	○		
♪	327	D-2	3	e		○	○		
♪	328	D-2	3	e		○	○	○	
37	329	D-2	2		又④	○	○	○	
♪	330	D-2	3		ヘラ	○	○		
♪	331	C-2	3			○	○	○	
♪	332	D-2	3		ヘラ	○	○	○	
♪	333	C-2	3		又④	○	○	○	
♪	334	E-3	3		ヘラ	○	○		
♪	335	E-3	3		ヘラ	○	○		
♪	336	E-2	3		ヘラ	○	○		
♪	337	B-2	3		ヘラ	○	○		
♪	338	E-2	3		ヘラ	○	○	○	
♪	339	F-4	3		ヘラ	○	○	○	
♪	340	F-4	2		ヘラ	○	○		
38	341	D-3	2			○	○		
♪	342	D-2	2			○	○		
♪	343	D-2	3			○	○		
♪	344	B-2	2			○	○	○	
♪	345	B-1	2			○	○	○	
♪	346	B-2	2			○	○	○	
♪	347	B-1	2			○	○		
♪	348	C-1	3上			○	○		
♪	349	D-3	2			○	○		

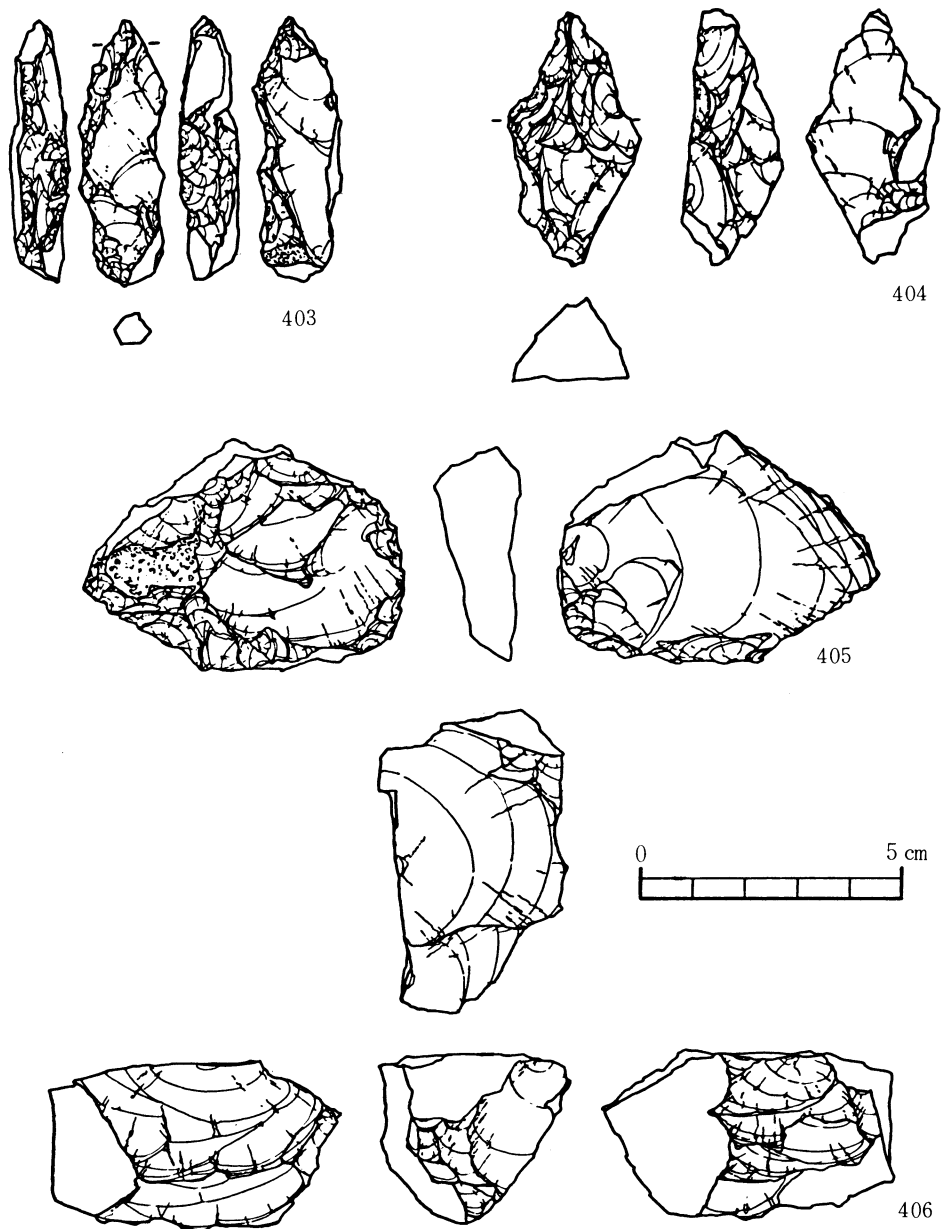
表2 上層出土土器一覧表



第 41 图 2 层出土石器



第 42 图 2 层出土石器

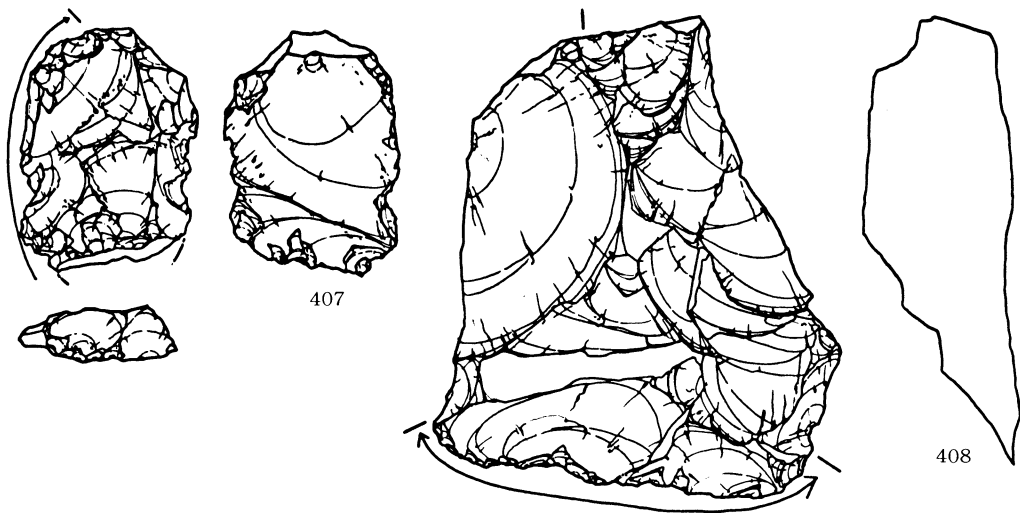


第 43 図 3層出土石器

3) 石器類

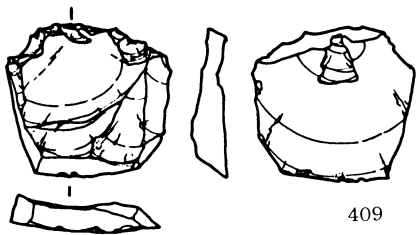
出土層ごとの石器組成に極単な変化は認められず、2・3層に多く出土し、4層は少数である。用いた石材は、チャート・輝緑岩・砂岩の3種類で、いずれも島内で産出される。1号集石遺構より1点だけ、良質の黒曜石のチップが採集されている。島内や近隣の島々でも黒曜石の産出は無く、運びこまれたものである。

388・411・424は石核をハンマーに転用したもので、剥出後残された稜部を随時使用し敲

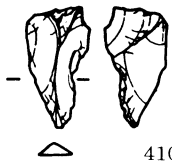


407

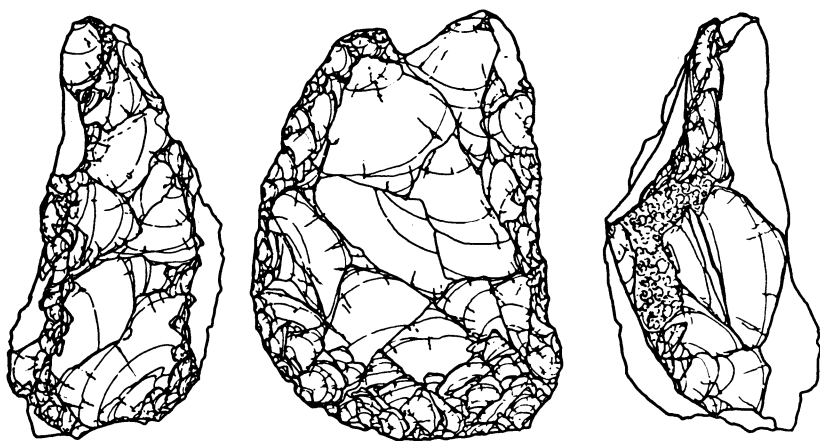
408



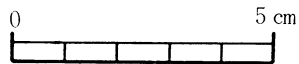
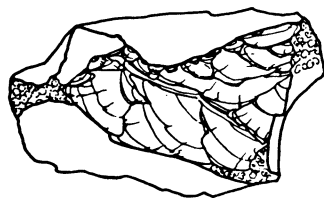
409



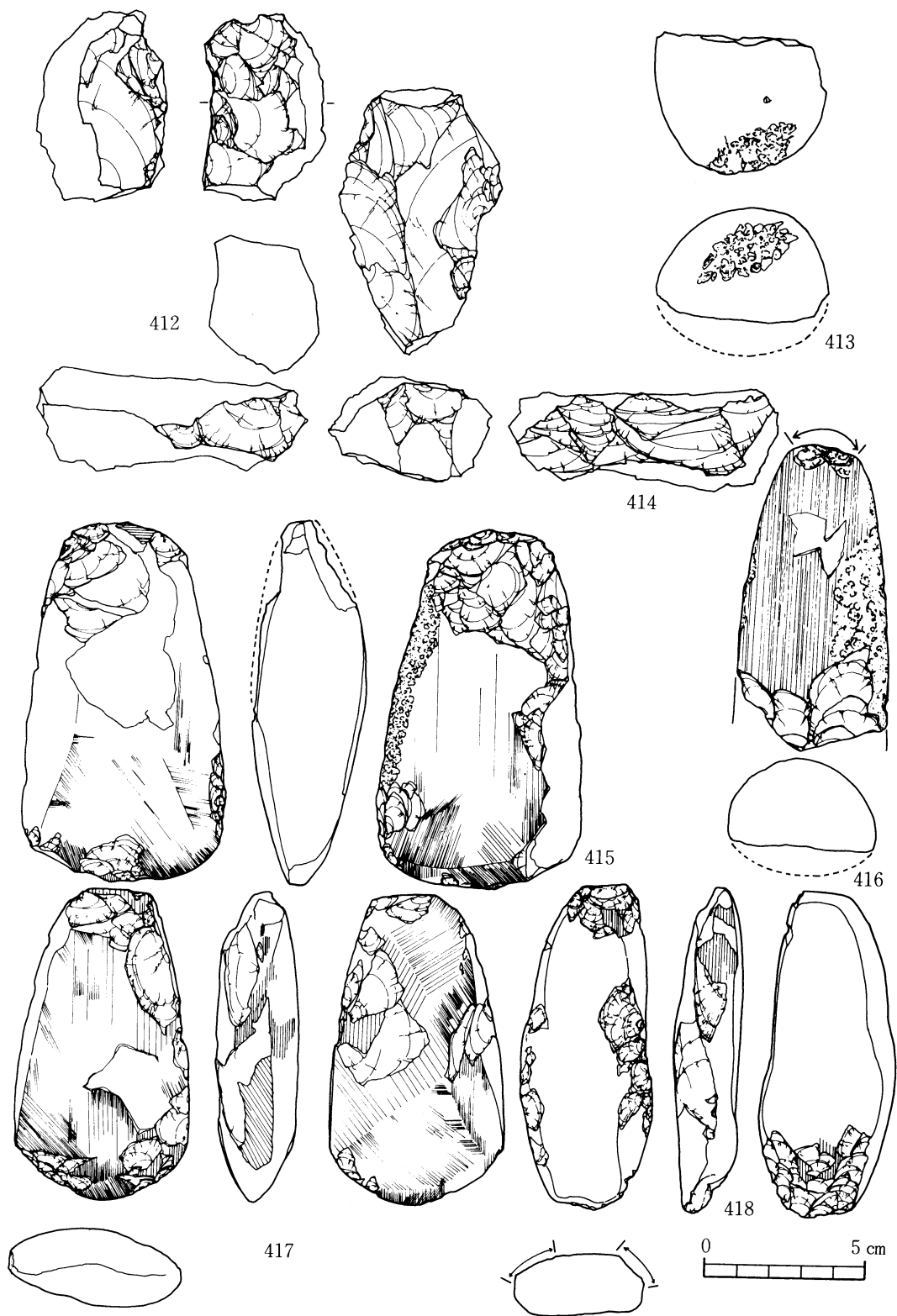
410



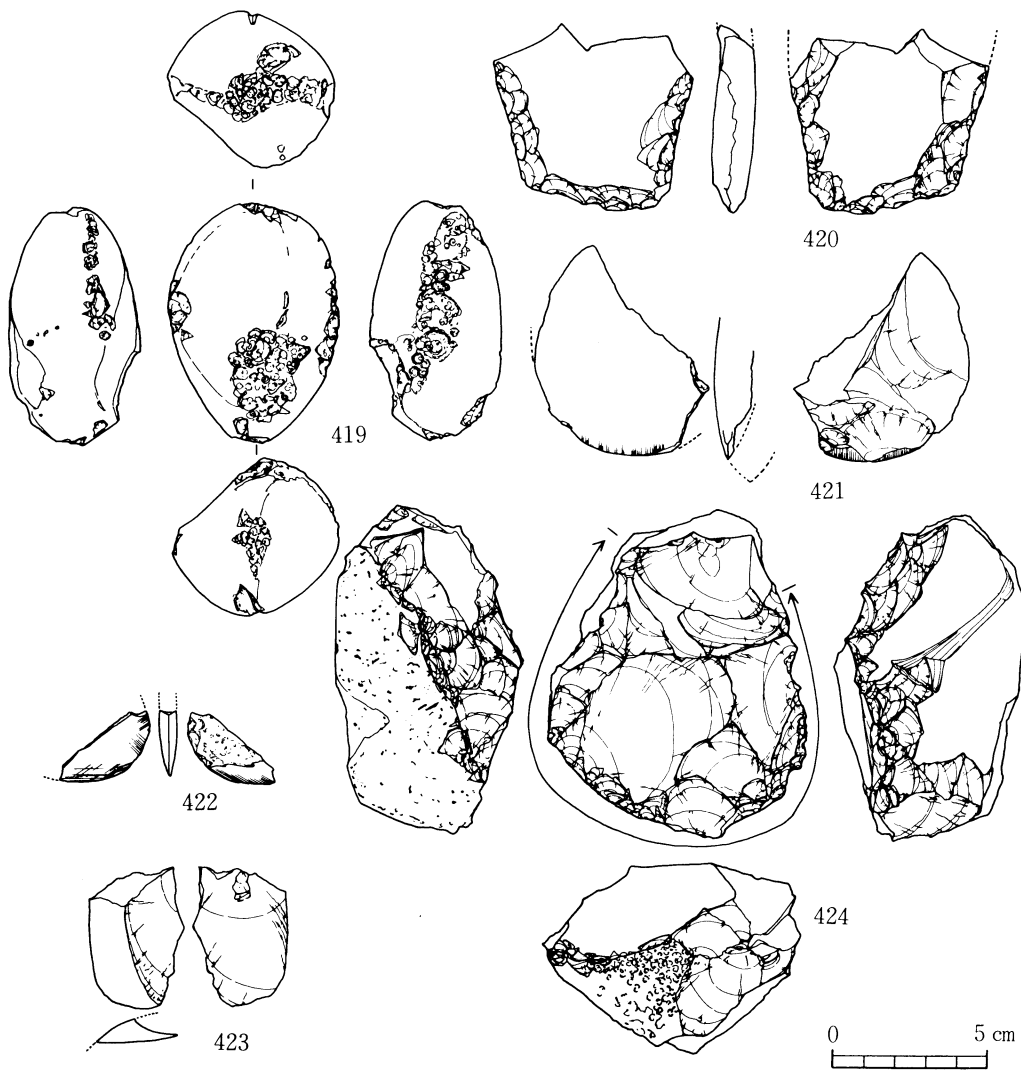
411



第 44 图 3 层出土石器



第 45 图 3 层出土石器

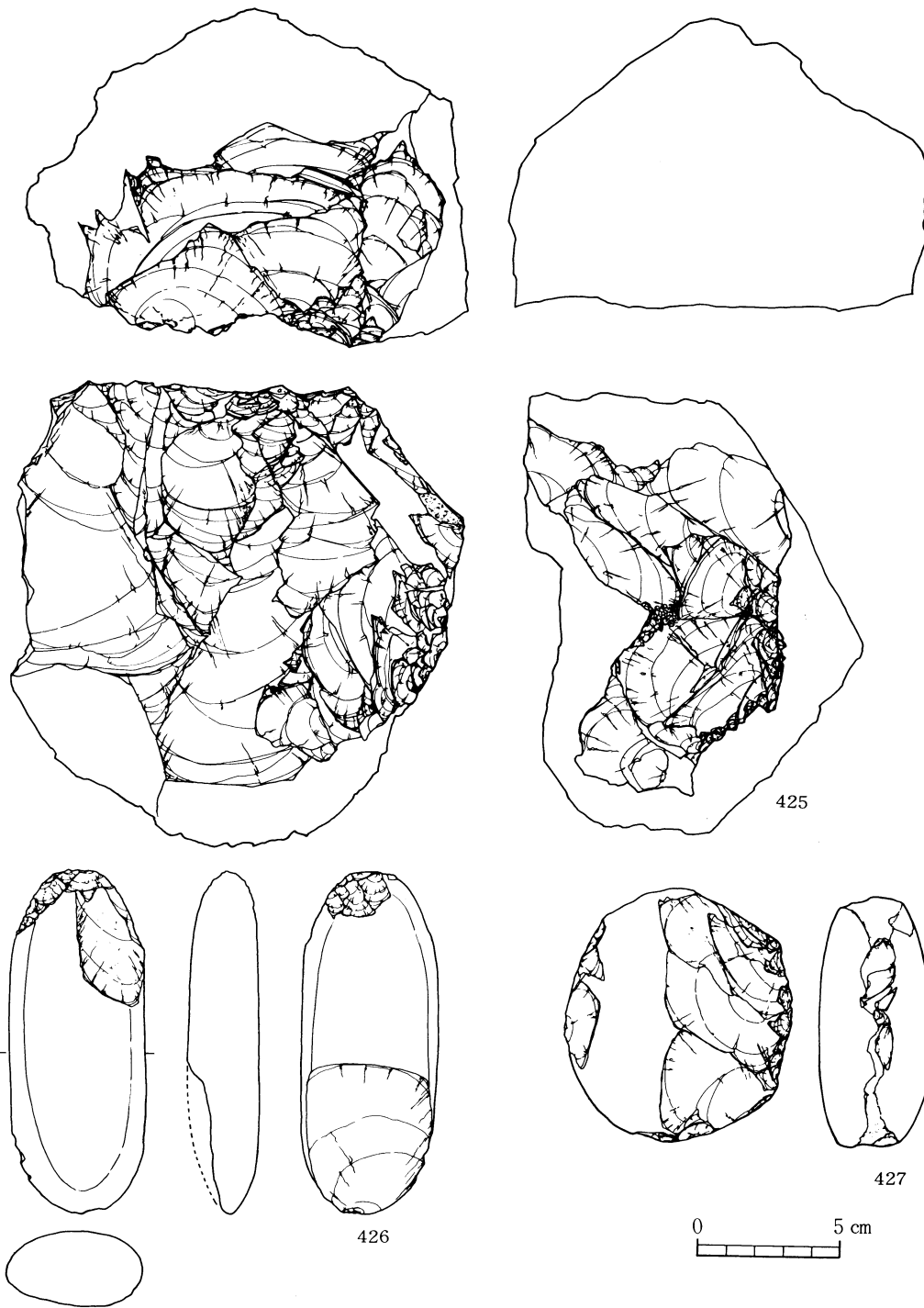


第 46 図 3 層出土石器

打による小剥離痕が著しい。424が硬質砂岩で、他はチャートである。389は唯一の資料で、乳白色のチャートを用い他にはこの石材は全く出土していない。共伴土器は不明であるが、土層出土の土器に伴う。403は断面が方形・404は三角形で剥出方法、先端部の加工よりポイント的機能を備えた石器である。404の側面調整は主剥離方向だけ、403は不規則である。

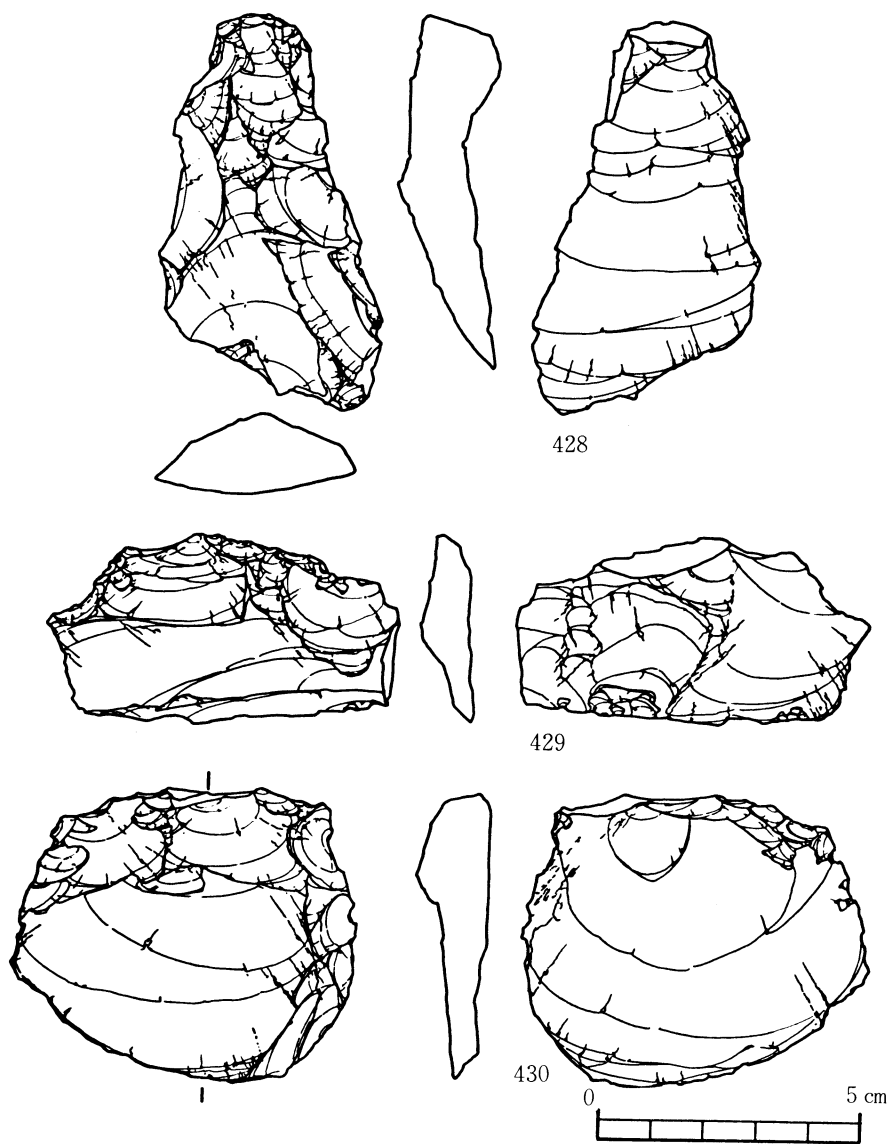
407は欠落した石器を再利用したもので、一貫して搔器的機能を備え、刃部形成は主剥離面より行っている。405・408は削器として用いている。406・412・414の3点は3層出土の石核で、平担打面から打ち下し不定形で横長の剥片を剥出している。425は4層出土の石核で、打面を転移しながら横長・縦長の剥片を剥き取っている。しかし、フィンジクラチャーの跡が多く残されている。428～430等は、この種の石核から剥出された可能性が高い。

392～395は、輝緑岩の転石を用い、磨耗した礫表皮を上位に剥離面を下位にして使用した



第 47 図 4 層出土石器

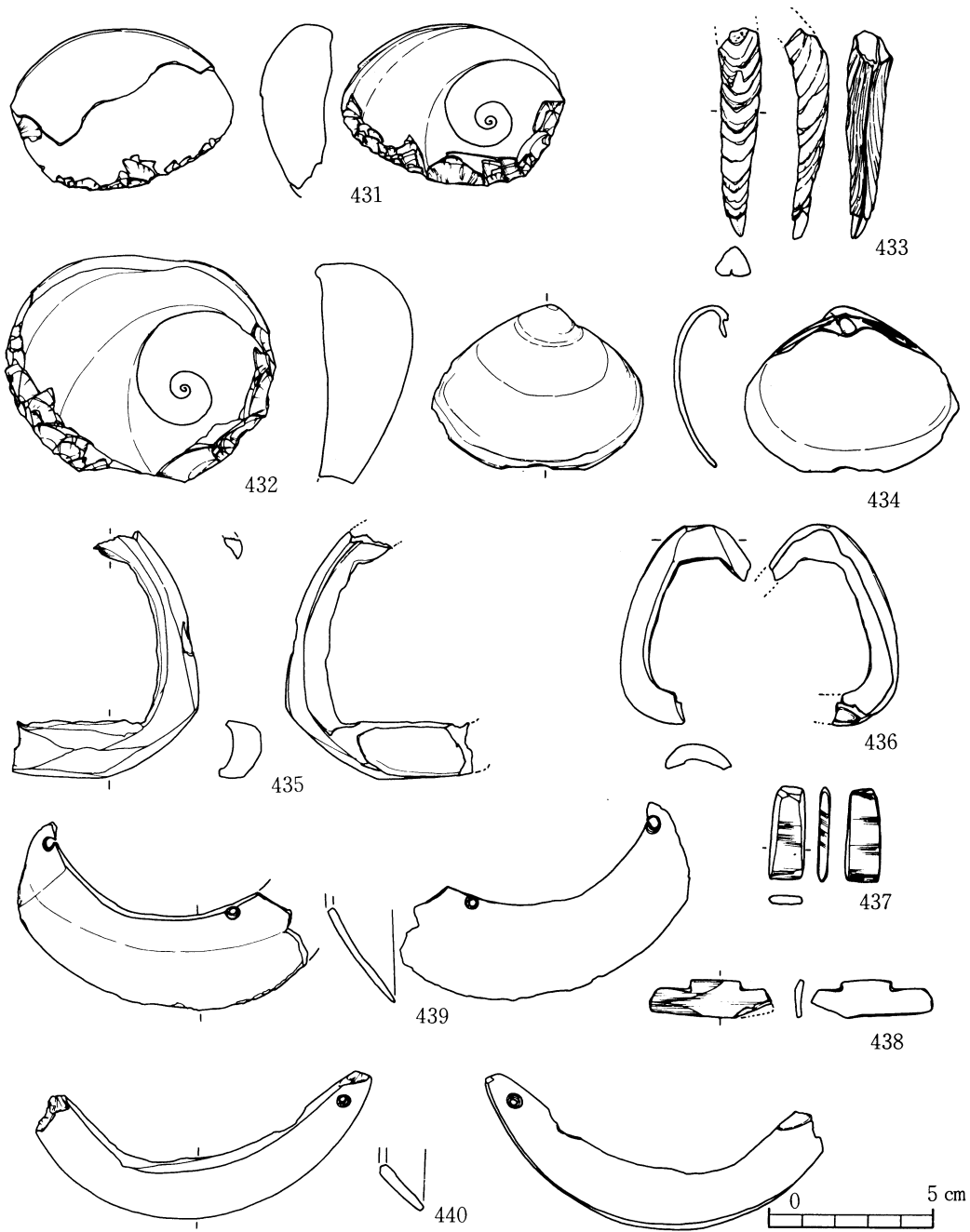
もので、わずかずつであるが剥離面に使用により生じた研磨面が残される。402は砂岩製で半欠品であるが円盤形石器の可能性はある。391・399・400・427は輝緑岩製のハンマーと思



第 48 図 4 層出土石器

われ、転石の一部に研磨を加え円盤状に整え、ほぼ全周に渡って使用痕が残される。418も輝緑岩製のハンマーで、転石を用い敲打による剥離痕が著しい。397・419・426も叩石であり、砂岩を用い敲打痕も顕著である。396・398・401・422・423は磨製石斧の欠損品で、いずれも輝緑岩製である。401・422等はかなり平扁な刃部をなしている。415～417は、本遺跡出土の中で最も大型の石斧で、416は硬質砂岩、415・417は輝緑岩製である。後の2点は蛤刃をなし、416は丸い断面を持つ棒状の形状を呈し敲打による整作痕が認められる。

図示しなかったものに、有溝砥石（軟質の砂岩製で、大小1点ずつある。大きい方は両面に3本の溝があり、断面は鼓状を呈している）、石皿2点（平扁な砂岩を用いた）がある。



第 49 図 貝製利器・貝製品

4) 貝製利器・貝製品 431・432は螺蓋製貝斧で、剝離痕よりハンマーの役を果たしたと思われる。433は水字貝の管状突起を刺突貝に用いている。435はゴホウラ(?), 436はイモガイを用いた貝輪で前者は腹面・後者は縦型に用いる。437は石斧状に作出, 438は採集品。439・440は孔を有し4層出土であり、ソデガイ科の貝種でその形状より垂飾品の一種と思われる。

第4章 ケジⅢ遺跡

第1節 出土遺物

本遺跡の調査の概要は、第2章の第1節で略述したが、砂採取事業のため削平を受けている地形であり、調査は空港建設関係事業に伴う地区を鹿児島県教育委員会、事業区外を笠利町教育委員会が調査を実施した。

地層は1層が黒褐色砂層、2層が黄褐色砂層、3層が暗褐色砂層、4層が白砂層である。本調査区では、1層から3層まで削平され、事業区外寄りに3層以下の層を一部に残しているのみで、3層最下層よりⅠ～Ⅲ類の土器の出土をみた。

本調査区からの出土遺物は、小範囲に土器破片が出土したのみである。これらの土器は深鉢と思われ、施文具の種類によりⅠ類からⅢ類までに分類したが、文様構成は破片のため不明である。

Ⅰ類（442・443・445）は、外面に太い沈線で文様を施した厚手の土器である。外面はていねいなナデ整形で、内面はナデ整形がくり返えされ、そのために条痕状の痕跡を認める（442）。445は内面にも沈線を施し、穿孔の痕跡を認める。bは底部付近で沈線を施している。

Ⅱ類（441・444・446・449～454）は、鋭いへら状の施文具により細沈線で文様を施した厚手の土器である。外面はていねいなナデ整形で、内面は比較的荒いナデ整形の痕跡を認める（444・449・453）。また446は、ナデ整形が充分なされず条痕状の痕跡を認めるものもある。

441は口唇部に刺突文を施し、横線に直行する文様構成がみられ、内面にも沈線をもつ口縁部破片で、内面は草茎状の施文具によるナデ整形を認める。

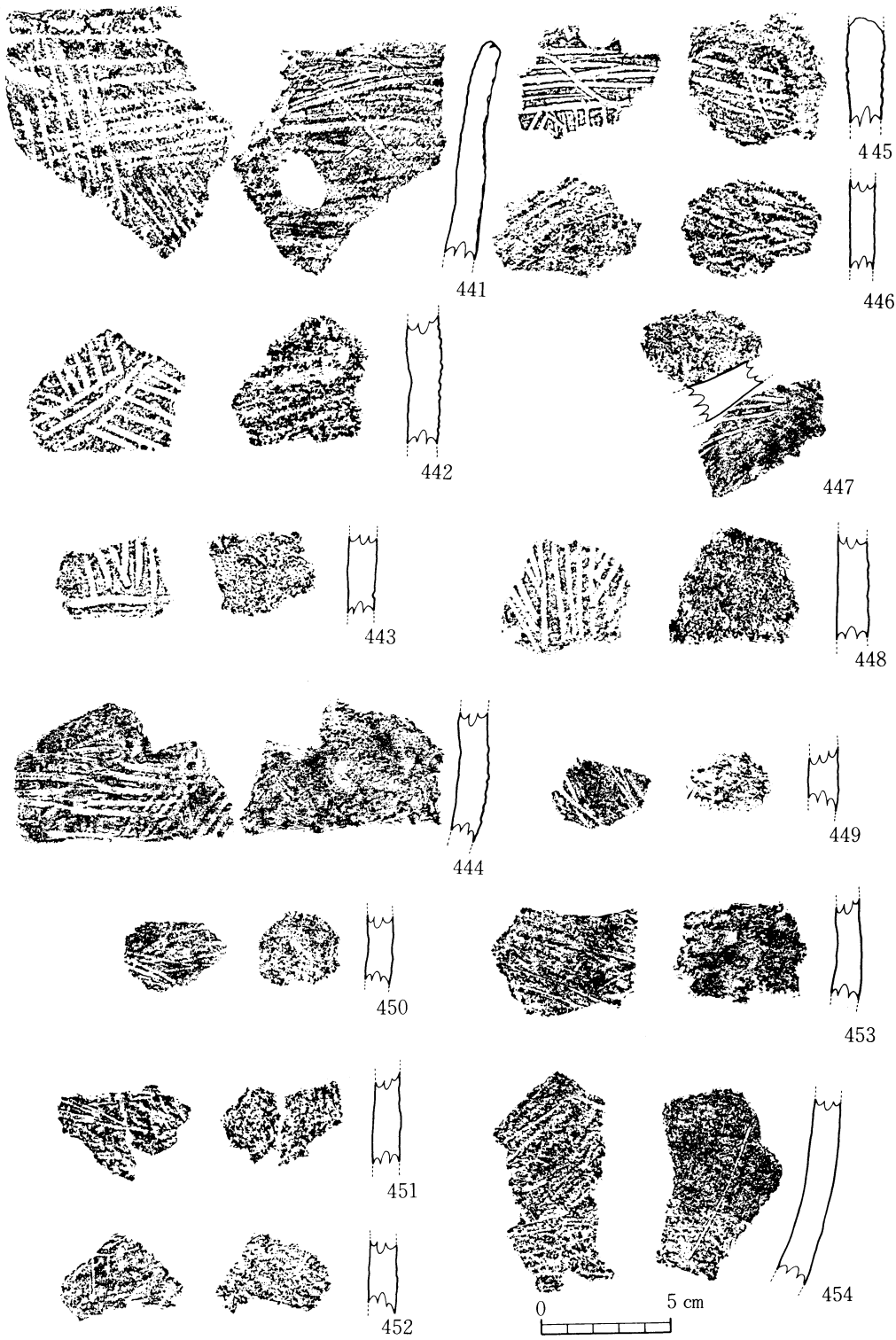
Ⅲ類（448）はⅠ類とⅢ類の中間の施文具により沈線を施した厚手の土器である。内外面ともていねいなナデ整形である。

第3表 ケジⅢ遺跡出土遺物一覧表

番号	類	出土区	色調	胎土	焼成	番号	類	出土区	色調	胎土	焼成
441	Ⅱ	D-5	赤褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	448	Ⅲ	D-5	明赤褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
442	Ⅰ	D-5	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	やや良	449	Ⅱ	E-5	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
443	Ⅰ	D-5	黒褐色	石英・長石・細砂	やや良	450	Ⅱ	E-5	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
444	Ⅱ	D-5	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	451	Ⅱ	E-5	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
445	Ⅰ	D-5	黒褐色	石英・長石・細砂	粗	452	Ⅱ	E-5	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
446	Ⅱ	E-5	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	453	Ⅱ	D-5	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	やや良
447	Ⅰ	D-5	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	454	Ⅱ	D-5	暗赤褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良

以上、本遺跡の調査区では、Ⅰ類からⅢ類までの土器破片の出土があり、施文具の種類により分類を実施した。Ⅰ類は曾畑式土器に近い施文方法で同町所在の高又遺跡にもみられている。Ⅱ類はⅠ類とは施文具は異なっているが、内面に文様をもつものは、曾畑式土器にみられる特徴と同様である。Ⅲ類は1点のみの出土で、今後の増加を待ちたい。

注1. 笠利町教育委員会「城・下山田・ケジⅢ遺跡」笠利町文化財報告書（8）1986・3
 注2. 笠利町教育委員会「笠利町高又遺跡」笠利町文化財報告書（2）1978



第 50 図 ケジⅢ遺跡出土遺物

第5章 まとめ

調査の結果、上下二枚の文化層を確認でき、下層の第4層にⅠ類・Ⅱ類土器（曾畑系土器）、上層にⅢ類土器（面縄前庭式土器）を中心にⅢ～Ⅵ類土器が少量ずつ混在しながら包含されていた。このように、層的に遺物を捉えることができたことは、予想以上の成果と言える。しかし、問題点も残されている。それらは、本遺跡が砂丘上に形成されたことから生じたことで、遺物の出土状況をどのように判断するかということである。すなわち、どの程度「原位置」として評価できるかという事である。このような問題は、本遺跡に限らず多くの砂丘遺跡（特に文化層の重複する）で浮上することである。このような点を踏えて、本文では「上層」「下層」出土の土器と大きく分離することで作業を進めることとした。

土器については、各層ごとに主体となる土器形式を数量的に抽出することで要易に作業が進められ、異なる文化層を捉えることができた。反面、接合による復元作業は困難を極め結果的にほとんど成功していない。同じように、剥片石器の場合も同様で、上下層で剥片剥離技術に極単な違いは認められないにもかかわらずチップ等の細片は上層に集中し、下層では大型の石核や剥片に限る現象を示していた。このことは、先の復元作業の困難さと同様に「動きやすい砂丘」の一端を示すものと思われる。

7基確認した集石遺構のうち、礫のみで構成したのは3号だけで、他の6基は礫と貝殻（魚骨）で構成されていた。また、加熱されたと判断できたのは2号の1基だけで他は明確に判断できていない。なお、この集石遺構は全て上層の時期の所産と判断している。特に、礫と貝殻等で構成されていることより、食生活の一端をうかがえる貴重な資料と考えられる。

Ⅰ類土器は、渡具知東原⁽²⁾、高又遺跡⁽³⁾で出土があり、曾畑式土器・曾畑系土器と呼ばれているものと、基本的に同種である。3遺跡で共通することは、器壁が極めて厚いことである。a～fの6に細分したが、文様を類型化すると(a)(b c d f)(e)と捉えることも可能である。横位の沈線文をもつf類は、本城・渡具知東原遺跡⁽⁴⁾でも散見され、高又Ⅱc類と類似している。また、119～137等の幅広の沈線文は高又Ⅱb類と同種と言える。183の施文手法は本城遺跡でも見られ、184・191・200等に見られる底部まで施文する手法は曾畑式土器の特長を良く示している。(b c d f)の押点、連点、列点文を施す一群の明確な帰属は明らかでないが、高又Ⅱa類に近いと見することもできる。次に、182(163・166・196)に見られる胴部上半で施文が終る手法の存在が注目される。182等の施文具や文様の特長から判断するとe類とした口縁部⁽⁵⁾も含まれる可能性がある。元来、胴部上半部で施文が終了する手法は、阿多Ⅴ類や野口Ⅵa～Ⅵc類⁽⁶⁾で見られる特長である。一方、本遺跡のⅡ類や182等では内面上位にも施文が施されており、この点では阿多Ⅴ類と同列とすることはできない。そこで、中村愿氏の指摘する⁽⁷⁾ように、南島地域における曾畑式土器の展開する時期を、曾畑Ⅲ式段階であるとの見解に立脚して捉えると、Ⅱ類の「…横位の短沈線…」は本来の連点文等が時間的推移の課程で個有に変容したとの解釈が成り立つ。つまり、曾畑式土器本来の文様規制の崩壊が起り、さらに、胴部の

文様も大きく崩れ沈線文が不規則となり、単になりごとをとおめる程度に変化した現象と見ることができ。したがって、曾畑Ⅲ式段階で流入し、流入後、器壁を厚くし滑石の入手できない南島地域で独自の製作が行われ、次第に変容していったと理解される。(I→II類)

189はいわゆる条痕文土器で、両面とも条痕が著しい。この土器片は他のものとは異なり、胎土に多量の角閃石を含み器壁は薄く(8mm)つくられ、焼成はやや軟質で他の曾畑系土器とは全く異質の土器である。この土器片より類推すると器形は深鉢形で丸底に近いと思われ、今後の資料の増加が期待される。

Ⅲ類とした面縄前庭式土器は、近年の神野貝塚の調査の以降、編年の位置づけが明らかとなりつつある。さらに、高宮廣衛氏の「面縄前庭様式」⁽⁸⁾、「具志川式土器」⁽⁹⁾の提唱は、面縄前庭式土器群の変遷を解明するための実践的方法論である。本遺跡出土のⅢ類土器のうち、d類および、225～235、283～286、324の頸部が縦位の沈線、胴部文様が菱形文等を持つものは、神野c式土器に近い。また、器形的な分析も試みたが、対象とする個体数が少なく積極的な資料とはならず、大多数を占めるe類は面縄前庭式土器の一般的器形でもある。また、文様構成も器形の違いによって変化することもなく、Ⅲ類土器の大半はいわゆる面縄前庭式土器の標式的範疇に含まれるもので、面縄第4洞穴⁽¹²⁾(面縄前庭式土器)出土のものと同と判断できる。

Ⅳ類は、犬田布貝塚Ⅱa類に近く、Ⅴ類は同様Ⅱb類に近いと思われる。

Ⅶ類は松山式土器で、四隅が山形に隆起する深鉢形で上面観は方形を呈する器形である。施文方法や器面整形に見られる特長より移入土器の可能性が高いと思われる。

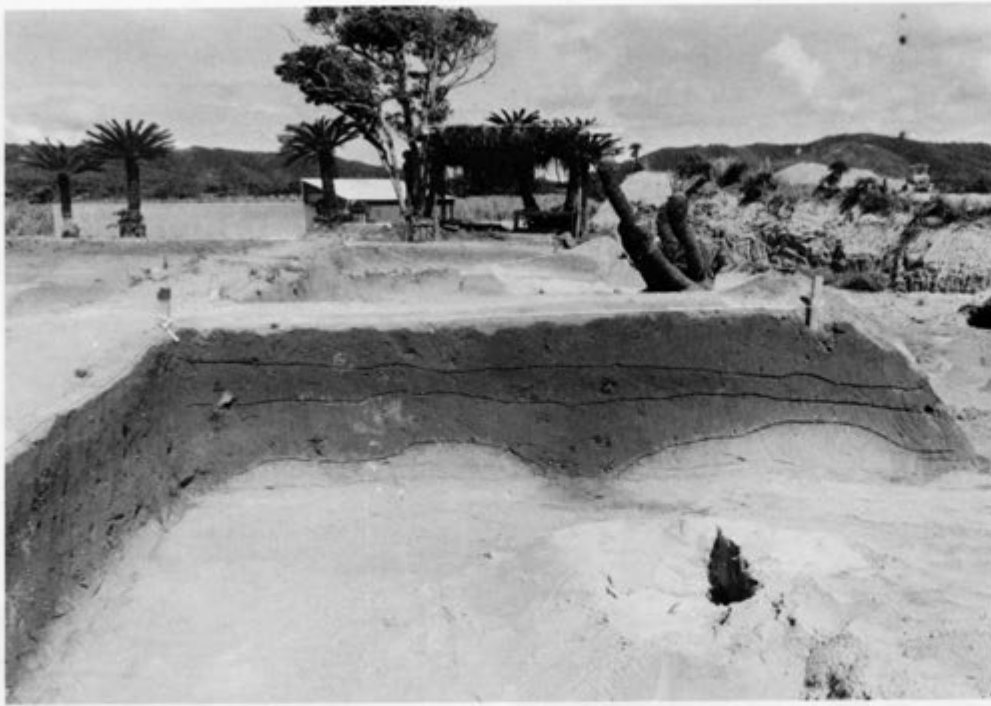
Ⅸ類はの一部は、宇宿貝塚から類似したものが出土しているが、いずれの土器形式に該当するか不明である。沖縄県の伊波、萩堂式土器との比較も試みたが判然としていない。⁽¹⁵⁾

なお、特にⅢ類土器について希硫酸を用いて胎土分析を行ったが⁽¹⁶⁾、サンゴ粒と思われるものは全く確認できず、石英がそのほとんどを占め、長石がわずかに含まれ、微量の雲母、角閃石の含まれる結果が出ている。Ⅰ・Ⅱ類土器でも同様の観察ができる。

石器では、特にチャート利用の剥片石器が注目された。安定した剥離技術は把めなかったが、不定形な横位の剥片を剥出することとに主眼が置かれていたようである。製品は少なく、ポイント2点、搔器1点、削器2点で、特にポイントと搔器の存在は注目できる。1点出土の石鏃は、用いた石材が他に全く採集されなかったことから製品の持ち込みを考慮してよいと言える。

参考引用文献

1. 河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号 1974
2. 高宮廣衛他「渡具和東原遺跡」『読谷村文化財調査報告第3章』読谷村教育委員会 1977
3. 中村憲他「笠利町高又遺跡」『笠利町文化財調査報告No.2』笠利町教育委員会 1978
4. 盛園尚孝他「本城遺跡調査概報」『鹿児島県西之表市』西之表市教育委員会 1973
5. 青崎和憲他「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財調査報告書1』金峰町教育委員会 1978
6. 富永直樹他「野口遺跡—久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告」『久留米市文化財調査報告書第28集』久留米市教育委員会 1981
7. 中村憲「曾畑式土器」『縄文文化の研究3』(縄文土器1) 雄山閣出版株式会社 1982
8. 沖縄国際大学文学部考古学研究室「沖国大考古第7号」
9. 高宮廣衛氏の多くの論文で論じられている。上記の(8)もその一つである。
10. 高宮廣衛・安里嗣淳「具志川式土器」『沖縄考古学会九月定例研究会発表要旨』1985
11. 8と一緒
12. 吉永正史他「面縄貝塚群—第4貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書4』伊仙町教育委員会 1985
13. 吉永正史他「犬田布貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書2』伊仙町教育委員会 1984
14. 河口貞徳他「宇宿貝塚」『笠利町文化財調査報告書』笠利町教育委員会 1979
15. 沖縄県文化課岸本義彦氏の指導助言
16. 本県文化課職員旭慶男氏の協力で、胎土に含まれる粒子を取り出し希硫酸で溶かす方法。



図版1 ケジI遺跡(土層断面・調査風景・1・6・7号等遺構)



圖版2 I類・II類土器



50

50'



51



52



58



59



54



60



61



62



63



65



74



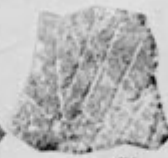
67



68



69



71



77



75



81

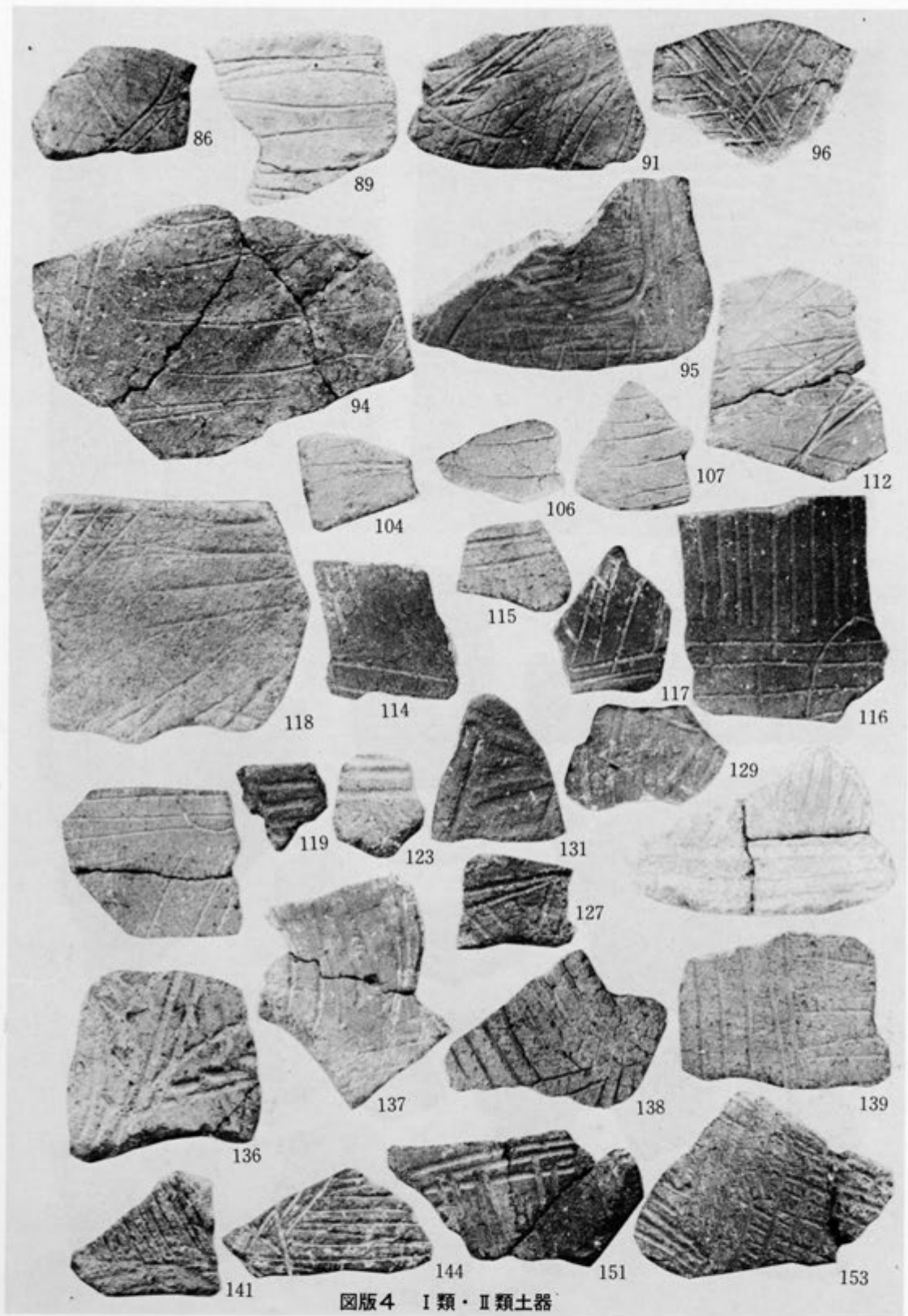


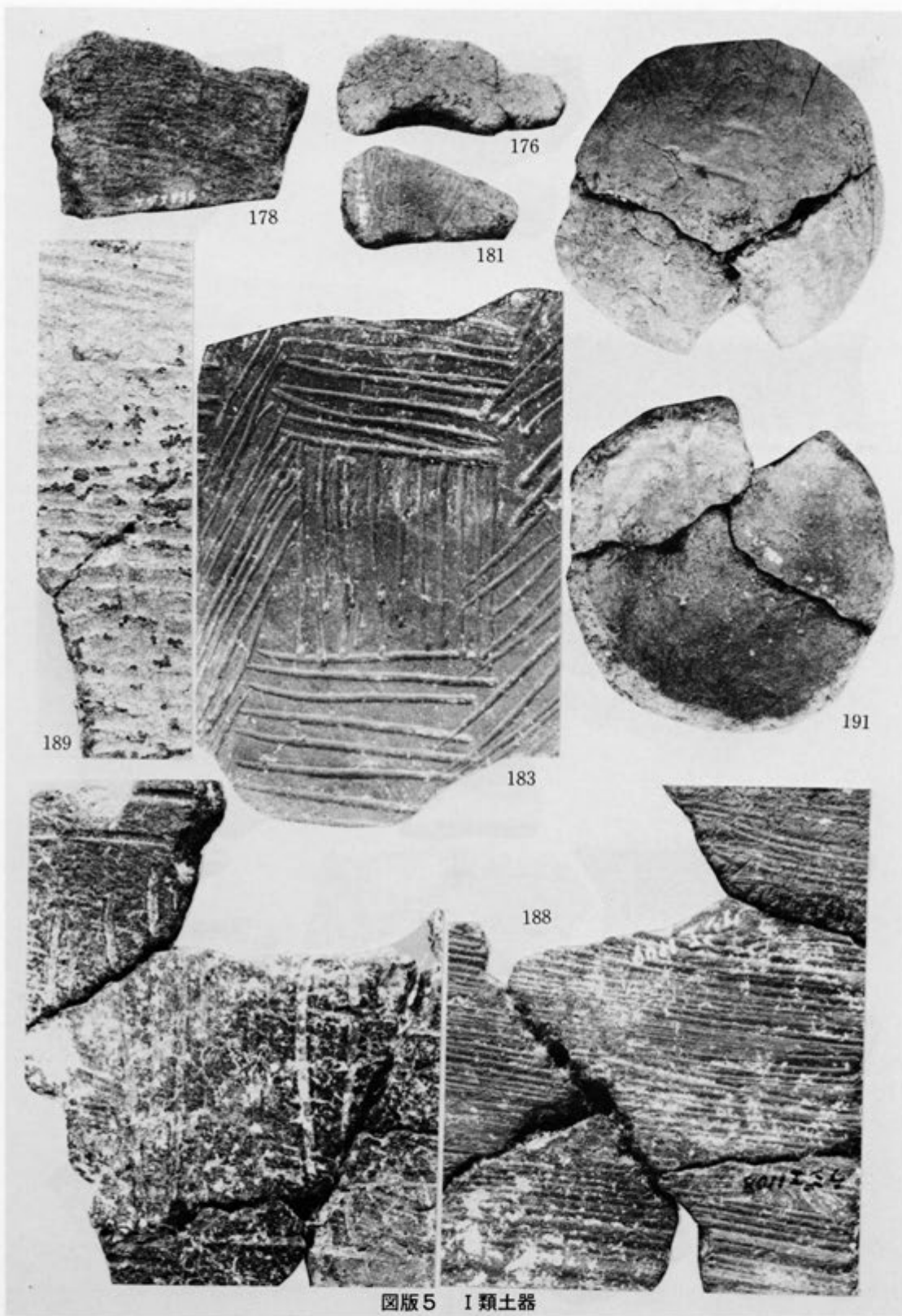
82



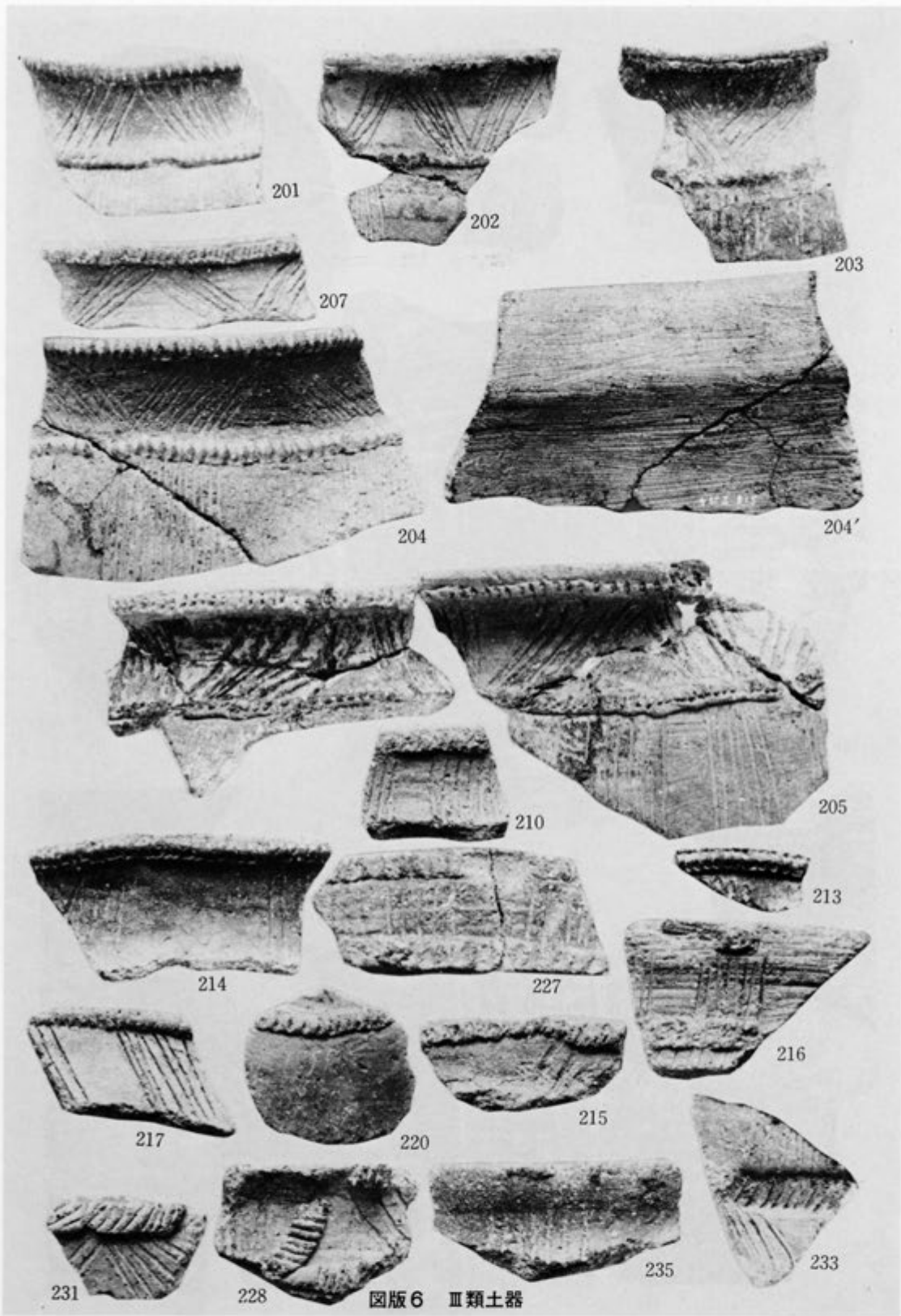
83

图版3 II類土器

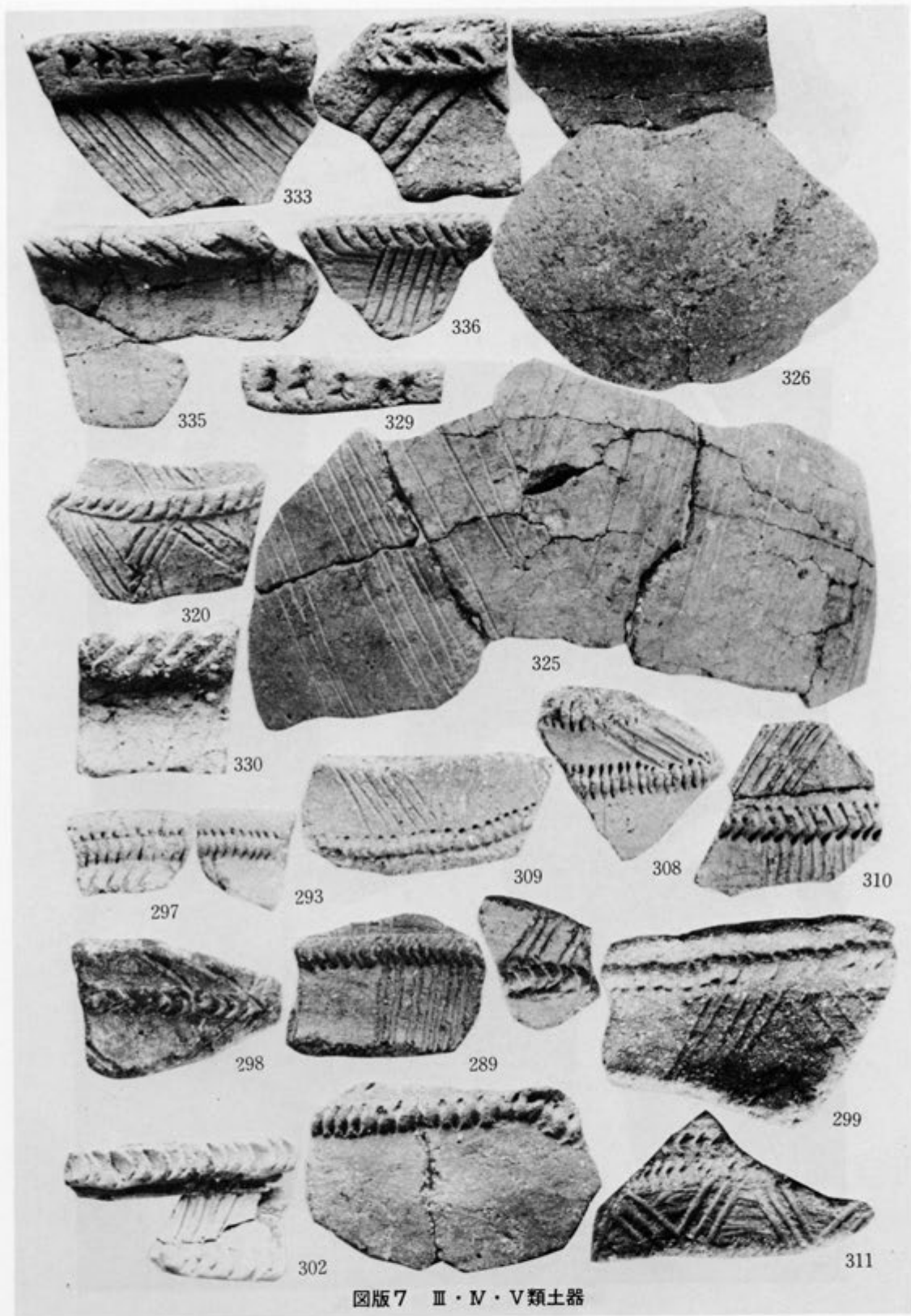


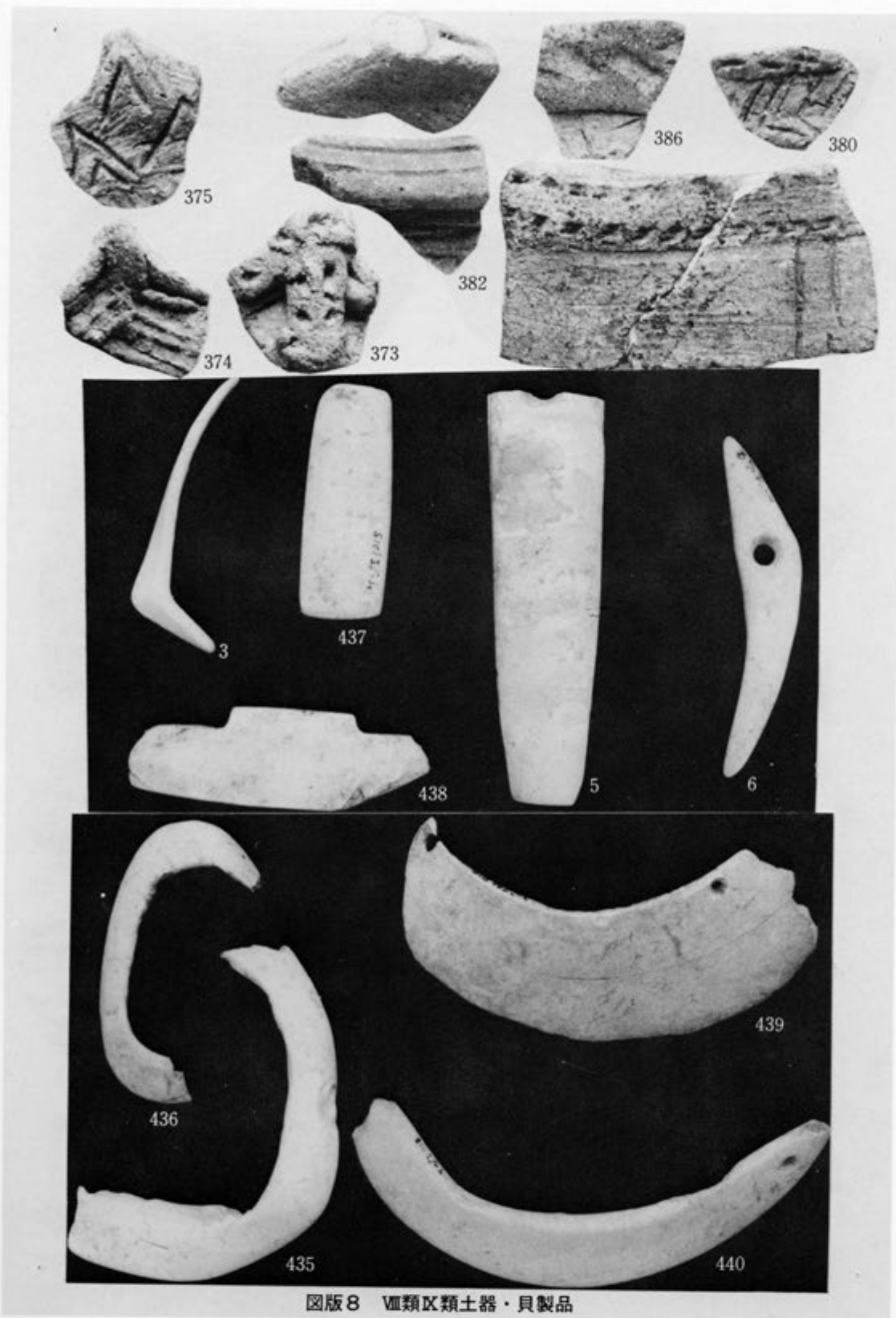


圖版5 I類土器



圖版6 III類土器





図版8 VII類X類土器・貝製品

第5章 自然遺物の同定

1. ケジ遺跡出土貝類について

行 田 義 三

1) ケジ遺跡から出土した貝類は次の通りである。

1 3 1種	海産	巻貝(腹足類).....98
		二枚貝.....25
	陸産5
	淡水産	巻貝.....2
二枚貝.....1		

- 2) いずれも同地域に現生している貝であるが、マングローブシジミだけは生息していない。
マングローブシジミは、住用村役勝川河口のマングローブ下に生息しているのが北限である。
- 3) 大形の貝にはヤコウガイ、スイジガイ、ゴボウラ、クモガイ、ラクダガイ、ホラガイなどがあげられる。
- 4) 多量に出土したマガキガイは肉が香ばしく美味であり、潮だまりに多産している。
- 5) 小形で食用にしたとは考えられないものがある。
ハシナガツノブエ、ノシガイ、フトコロガイ、オオシマボタル、カイコガイ、タメトモマイマイ、オキナワウスカワマイマイ。

ケジ遺跡出土貝類一覧表

番号	和名(科名)	分 布	番号	和名(科名)	分 布
	巻貝(腹足類)			※リュウテン科	
1	※ユキノカサ科 リュウキュウアマガイ	奄美以南	15	カンデク	種子島以南
2	※ツタノハ科 ツタノハ	房総以南	16	オオベソスガイ	奄美以南
3	オオツタノハ	種子島以南	17	リュウテン	種子島以南
4	アミガサガイ	北海道南部以南	18	コシダカサザエ	房総以南
5	オオベッコウガサ	奄美以南	19	チョウセンサザエ	平島以南
6	※ミミガイ科 フクトコブシ	四国以南	20	ヤコウガイ	種子島以南
7	トコブシ	北海道南部以南	21	※アマガイモドキ科 アマガイモドキ	四国以南
8	イボアナゴ	紀伊以南	22	※アマオブネ科 イシダミアマオブネ	九州南部以南
9	※ニシキウズ科 オキナワイシダダミ	奄美以南	23	キバアマガイ	四国以南
10	アナアキウズ	紀伊以南	24	フトスジアマガイ	種子島以南
11	ニシキウズ	紀伊以南	25	ニシキアマオブネ	四国以南
12	ムラサキウズ	紀伊以南	26	リュウキュウアマガイ	平島以南
13	ギンタカハマ	房総以南	27	イシマキガイ	房総以南
14	サラサバテイ	奄美以南	28	カノコガイ	紀伊以南
			29	※ムカデガイ科 リュウキュウヘビガイ	四国以南

番号	和名(科名)	分 布
30	※ゴマフニナ科 ゴマフニナ	紀伊以南
31	※ウミニナ科 ウミニナ	本州以南
32	ヘナタリ	房総以南
33	イトカケヘナタリ	九州以南
34	※オニツノガイ科 ハシナガツノブエ	房総以南
35	カヤノミカニモリ	房総以南
36	オオシマカニモリ	九州以南
37	コオニツノ	四国以南
38	※スイショウガイ科 ヤサガタムカシタモト	房総以南
39	ムカシタモト	房総以南
40	スイショウガイ	房総以南
41	マガキガイ	種子島以南
42	スイジガイ	種子島以南
43	ゴホウラ	種子島以南
44	クモガイ	種子島以南
45	ラクダガイ	種子島以南
46	※タマガイ科 ハウシュノタマ	房総以南
47	シロヘソアキトミガイ	紀伊以南
48	リスガイ	紀伊以南
49	トミガイ	紀伊以南
50	※タカラガイ科 ハナビラダカラ	房総以南
51	ホシキヌタ	房総以南
52	ヤナギシボリダカラ	房総以南
53	クチムラサキダカラ	四国以南
54	コモンダカラ	房総以南
55	ヤクシマダカラ	房総以南
56	ホシダカラ	四国以南
57	ハチジョウダカラ	四国以南
58	※フジツガイ科 シロシノマキ	種子島以南
59	ミツカドボラ	紀伊以南
60	ホラガイ	紀伊以南
61	シオボラ	紀伊以南
62	※オキニシ科 イワカワウネボラ	紀伊以南
63	ハイイロボラ	種子島以南
64	オキニシ	房総以南
65	※ヤツシロガイ科 ウズラガイ	房総以南
66	※アクキガイ科 ガンゼキボラ	房総以南
67	シラクモガイ	九州南部以南

番号	和名(科名)	分 布
68	テツレイシ	紀伊以南
69	ツノテツレイシ	紀伊以南
70	ツノレイシ	紀伊以南
71	ムラサキガレイシ	紀伊以南
72	コゲレイシダマシ	四国以南
73	ウネレイシダマシ	房総以南
74	ホソスジテツボラ	四国以南
75	※カブラガイ科 カブトサンゴヤドリ	紀伊以南
	※エゾバイ科	
76	シマベッコウバイ	紀伊以南
77	ノシガイ	紀伊以南
78	※タモトガイ科 フトコロガイ	房総以南
	※オリイレヨウバイ科	
79	ヒメオリイレヨウバイ	奄美以南
80	ヨフバイモドキ	紀伊以南
81	アワムシロ	四国以南
	※セコバイ科	
82	ヒモカケセコバイ	奄美以南
	※イトマキボラ科	
83	イトマキボラ	四国以南
	※オニコブシ科	
84	コオニコブシ	紀伊以南
85	オニコブシ	奄美以南
	※マクラガイ科	
86	オオシマボタル	奄美以南
	※ブドウガイ科	
87	カイコガイ	紀伊以南
	※カラマツガイ科	
88	コウダカカラマツ	国国以南
	※イモガイ科	
89	ジュズカケサヤガタイモ	紀伊以南
90	サヤガタイモ	房総以南
91	セイロンイモ	奄美以南
92	イボシマイモ	房総以南
93	アジロイモ	種子島以南
94	マダライモ	紀伊以南
95	ニシキミナシ	四国以南
96	ヤナギシボリイモ	紀伊以南
97	アンボンクロザメ	奄美以南
	※タケムコガイ科	
98	ベニタケ	紀伊以南
	淡水産	
	※※カワニナ科	
99	カワニナ	北海道以南
	※トウガタカワニナ科	
100	トウガタカワニナ	奄美以南

番号	和名(科名)	分 布
	陸 産	
101	※ヤマタニシ科 オオシヤマタニシ	奄 美 以 南
102	※オナジマイマイ科 タメトモマイマイ	奄 美 以 南
103	オオシヤママイマイ	奄 美 以 南
104	オキナワウスカワマイマイ	奄 美 以 南
105	※ナンバンマイマイ科 ウラジロヤマタカマイマイ	奄 美 以 南
	二枚貝	
106	※フネガイ科 エガイ	房 総 以 南
107	オオミノエガイ	奄 美 以 南
108	リュウキュウサルボウ	種 子 島 以 南
109	※シュモクアオリ科 マクガイ	種 子 島 以 南
110	※ウグイスガイ科 クロチョウガイ	紀 伊 以 南
111	※イタボガキ科 オハクロガキ	紀 伊 以 南
112	ノコギリガキ	房 総 以 南
113	※ウミギク科 メンガイ	紀 伊 以 南
	※ツキガイ科	

番号	和名(科名)	分 布
114	ツキガイ	紀 伊 以 南
115	ウラキツキガイ	四 国 以 南
116	カブラツキガイ	四 国 以 南
117	※ザルガイ科 カワラガイ	奄 美 以 南
118	※マルスダレガイ科 ユウシオガイ	奄 美 以 南
119	マルオミナエシ	紀 伊 以 南
120	ケショウハマグリ	種 子 島 以 南
121	ホソスジイナミガイ	紀 伊 以 南
122	アラスジケマンガイ	奄 美 以 南
123	ヌノメガイ	九 州 南 部 以 南
124	ヒメアサリ	房 総 以 南
125	スダレハマグリ	九 州 南 部 以 南
126	※シオサザナミ科 リュウキュウマスオ	紀 伊 以 南
127	※チドリマスオ科 イソハマグリ	房 総 以 南
128	ナミノコマスオ	奄 美 以 南
129	※ニツコウガイ科 リュウキュウシラトリ	紀 伊 以 南
130	サメザラ	九 州 南 部 以 南
	淡水産	
131	※シジミ科 マングローブシジミ	奄 美 以 南

2 放射性炭素測定について

京都産業大学理学部・年代研究室 山 田 治

測定番号	試 料 名	測定値(B.P.Y)
K S U-1221	ケジ遺跡No.1(貝)	3520±50 B.P.Y
K S U-1222	ケジ遺跡 No.2 C-1区 4層	5080±50 B.P.Y

以上 御依頼試料の炭素年代測定結果を御報告申し上げます。

3 ケジ遺跡出土の自然遺物

—とくに出土動物骨について—

鹿児島大学 西中川 駿(農学部)・四宮明彦(水産学部)

ケジ遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町万屋ケジにあり、新奄美空港建設のために、昭和60年6月～8月に、鹿児島県文化課の長野、立神両氏の指導のもとに発掘された縄文時代の遺跡である。ここでは人工遺物と共伴した自然遺物、とくに動物骨について、その概要を報告する。

ケジ遺跡から出土した自然遺物は、総重量532.9g(貝類を除く)で、それらは哺乳類(14.5g)、鳥類(13.1g)、爬虫類(15.5g)、甲殻類(5.6g)および魚類(484.2g)であり、とくに魚類の出土が多く、全出土重量の91%を占めている。

哺乳類はイノシシで、胸椎、右上腕骨、左第3中手骨、左第4指基節骨、右大腿骨、左腓骨などの骨片がみられる(図版Ⅰの1—4参照)。左第3中手骨の骨体中央部の幅×径は、11.7×9.0mmで、これは鹿児島県本土の高橋貝塚⁶⁾出土骨より小さく、現生のリュウキュウイノシシと同じ大きさである。

鳥類の出土骨はマガモの頭蓋、右上腕骨、尺骨、大腿骨などで、この中でも尺骨片の出土が多い(図版Ⅰの5・6参照)。

爬虫類は、種の同定は出来ないが、ウミガメで、腹甲、縁甲、中腹板や指骨が出土している(図版Ⅰの7～10参照)。

甲殻類は、ノコギリガザミのものと思われる錯脚5個が出土している(図版Ⅰの11・12参照)。

魚類は本遺跡では最も多く、その骨片数も多い。ここでは紙面の都合上詳細に報告することが出来ないので、主な魚骨について述べる。サメの椎骨、スズキの前顎骨、ハリセンボンの上・下顎骨、ベラの歯骨、下咽頭骨、ブダイの前上顎骨、上、下咽頭骨など沢山の魚骨が出土しているが、これらの種は奄美の遺跡でよくみられるものである。

以上、ケジ遺跡から出土した動物骨について述べたが、奄美本土でこれまで発掘された宇宿貝塚⁵⁾、サウチ遺跡⁴⁾、あやまる第2貝塚³⁾および長浜金久第Ⅱ貝塚²⁾と同様に、海の幸が多く、イノシシなど陸上の動物の出土は少ない。これらの点から、ケジ遺跡を遺した人々は、主に漁撈や貝類の採集を行っていたことがうかがわれる。また、貴重な出土品として、図版Ⅰの24に示すようなヤスと思われる骨製品が出土している。これはシカの左中足骨を縦に割りその外側部を利用し、近位部に穴を開けている。これまで奄美の遺跡からは、食料として利用されたシカの骨は出土していない。徳之島の犬田布貝塚¹⁾からもシカの角製品が出土したが、これは他の地域から移入されたものであると推定されている。本品も他にシカの出土骨がないことから、他の地域から移入された可能性のあることが示唆される。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(38)

竜郷一新奄美空港線の改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

ケ ジ I ・ III 遺 跡

発行日 昭和61年 3 月

発 行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 株式会社秀巧社印刷 〒890 鹿児島市高麗町42番15号